

527  
16



始





岡本綺堂著

綺堂戲曲集

第九卷

大正

14. 9. 17

内交

東京春陽堂版

527-16

第九卷 目次

三	一	一	〇	〇	〇	〇	〇
巴	景	唐	武	黑	明	增	無
雪		人	田	船	智	補	禮
夜	清	塚	信	話	光	信	講
話			立		秀	長	
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
三	三	三〇	二	三	二	二	一
五	元	一	天	五	七	二	

薩

摩

櫛

大正十一年六月作。  
大正十一年八月。新富座初演。

初演當時の主なる役割——竹田近江（片岡市蔵）竹田出雲（市川左團次）竹田小出雲（市川建升）三好松洛（阪東壽三郎）早田八右衛門（市川猿之助）錢屋善次郎（市川壽美藏）船頭権四郎（市川左升）櫻風呂の菊野（市川松蔦）など。



登場人物——竹田近江掾（機關師、御時計師）竹田出雲掾（近江の弟、竹本座の座元、淨瑠璃作者）竹田小出雲（出雲の子、淨瑠璃作者）三好松洛（町醫者、淨瑠璃作者）錢屋善次郎（兩替屋の子）早田八右衛門（西國武士）米津作之進（同前）寺山半五郎（同前）権四郎（船頭）菊野（櫻風呂の抱妓）おとめ（大和屋の女房）ほかに櫻風呂の抱妓、女中。大和屋の女中。竹田の雇人。竹本座の手代。船頭。なまいだ坊主。按摩。町の娘。ぞめきの男。ならず者など。

幕

大坂、東横堀の川筋。正面は川岸通りにて、川へ降りる路あり。前は川の、ろにて岸に柳あり。川中の上のかたには一艘の屋形船が浮べり。

(元文二年六月下旬の夕刻。二階作りの屋形船(この時代には洒落れて樓船といふ)は簾をまきあげて、船中に竹田近江、五十二三歳。三好松洛、四十五六歳の坊主頭。竹田小出雲、廿一二歳。この三人が酒を飲んでゐる。船の艦には竹田出雲、四十六七歳、立ちながらに扇をつかつてゐる。そのそばに船頭権四郎、五十餘歳の巖乘さうな男、煙草をのんでゐる、うすく水の音、よその船の騒ぎ、唄きこゆ。)

出雲。

日が落ちたので、すこしは涼しい風が吹き出して来たな。

権四郎。

さうでござります。やがて七月の暦を繰らうといふに、まだこのやうな暑さでは、今年の残暑も思ひやられます。

出雲。

さうかも知れぬ、しかし成るべく暑さの長い方がおまへ達の商賣には都合がよからう。

権四郎。

(笑ふ。) まあ、さう仰しやればそんなものでござります。

出雲。

(岸の方をみる。) 歌舞伎はこの暑さにも怯けすによく遣つてゐるな。

権四郎。

なか／＼大入ださうでござります。

出雲。

歌舞伎はこのごろ繁昌ぢや。

権四郎。

あやつりの方はまだお休みでござりますか。

出雲。

(少し寂しさに。) 操りは秋の来るまで先づ休みぢや。この暑さでは客を呼べぬ。

近江。

(聲をかける。) これ、出雲、こつちへ這入らぬか。酔うて船端へ出てゐるとあぶないぞ。

小出雲。

ほんにお危なうござります。

出雲。

は、大丈夫。まかり間違うて滑り落ちたところで、そばには船頭が附いてゐる。そちらにはお医者どのも控へてござる。ちつとも心配することはない筈ぢや。

松洛。

(酔うて笑ふ。) いや、それは請合はれぬ。わしも手摺の方では自由に人間を殺したり生かしたりするが、匙の方では聊か心もとない。まさかの時にも餘り頼みにはならぬと思つてござれ。

出雲。

いや、それは堪らぬ。さうと知つたら今日の涼みにも誘うて来るのではなかつたに、は

権四郎。

は、ムム。

出雲。

(松洛を顧みて指す。) あのお人はお医者様でござりますか。

(笑ひながら。) さうぢや。あれは三好松洛と云うて、お医者もすれば淨瑠璃も書く。淨瑠璃の筆はうまいが、お医者の方にはあまり頼みにはならぬと、自分でも云うてゐるのぢやから間違ひはあるまい。命が二つあれば格別、めつたにあのお医者様の薬などを貰ふまい

權四郎。(真面目に。)さうでござりますか。

出雲。まつたく怖いぞ。

權四郎。怖うござりますな。

近江。(松洛に。)先生、大分評判が悪いやうでござるな。

松洛。(出雲をみかへる。)座元の口のわるいは今に始まつたことではござらぬ。それにな。(わざ

とらしく真面目に。)この間の『御所櫻』——あれが偉い評判であつたので、おん大將、少々

妬んでござるのぢや。は、は、は、は、。

近江。は、そんなことかも知れませぬ。まつたく『御所櫻』の辨慶上使と藤彌太物語、あれは

出雲。近年の當り作でござつたな。

松洛。残念ぢやが、あれはそこにゐる藪醫者どのと文耕堂めに爲てやられた。とりわけて三の切

がよかつたな。

小出雲。ほんにおわさのさはりは今でも耳に残つてをります。(扇拍子を取りて語る真似をする。)こつ

ちで思へば其人も、すれつ纏れつ相生の、松と松との若縁——

松洛。(手を拍つ。)よう、よう、出來た、出來た。

近江。播摩掾の口真似はなかく巧いわ。

二人。は、は、は、。

權四郎。あ、みな様はお羨ましくござりますな。

出雲。なにが羨ましい。

權四郎。おまへ様方はさうして名高い淨瑠璃を澤山かいて、後の世までも名をお残しなさる。わた

くし共はこの年になるまで棹や權を持ち暮して、死んでしまへばそれぎりの命で、あとに

は何の影さへも残りませぬ。

出雲。(ちつと聽いてゐる。)これ、小出雲。

小出雲。はい。

出雲。その酒と杯をこつちへくれ。

小出雲。はい、はい。

出雲。(小出雲は徳利と杯を把つて出せば、出雲はうけ取りてしやがむ。)

出雲。どうぞや。一杯飲まぬか。(權四郎にさす。)

権四郎。いえ、先ほども十分に頂戴いたしました。この上に酔うてはなりません。まあ、飲め。おまへが漕けずばわしが漕ぐ。わしが漕けずば俵に漕がせる。まあ、安心して飲め。

権四郎。はい、はい。では、遠慮なしに頂きます。(さかづきを押し頂く。)

出雲。(酌をしてやる。)おまへの名は権四郎と云うたな。

権四郎。はい。親代々の名で権四郎と申します。

出雲。む、権四郎……。よい名ぢやな。

権四郎。さうでござりませうか。

出雲。もう一杯。(かされて注ぐ。)なう、松洛。この船頭は権四郎といふさうぢや。例の漕船には

松洛。なるほど好いかも知れぬな。

権四郎。何かわたくしがお役に立つことがござりますか。

出雲。ある、ある。實はあの松洛とも相談して、福島にある逆櫓の松……。おまへも知つてゐるであらうが……。

権四郎。福島逆櫓の松……。はい、はい。よく存じて居ります。

出雲。あの逆櫓の松を種にして、新淨瑠璃を書いてみたいと思つてゐる。土臺が逆櫓ぢや。是非とも人形には船頭が出る。その船頭の中でも一ち好い役の名が権四郎……。どうぢやな。

権四郎。では、その逆櫓の狂言にわたくしの人形を出してくださいませうか。

出雲。む、権四郎を出してやる。その筋立はまだよく考へてはるぬが、なにしろその権四郎を立派な好い役にこしらへてやる。

権四郎。(よろこぶ。)どうぞ後の世までも残りますやうに、せいよくよい役にこしらへて下さりませ。

出雲。よい、よい。わしがせいよく工夫して、船頭権四郎といへば日本中で誰も知つてゐるやうな大きい芝居を書いてやるぞ。

権四郎。はい、はい。ありがたうござります。(小出雲に。)若旦那さま。(松洛に。)お医者様。なにぶん宜しくおねがひ申します。

松洛。よい、よい。たしかに頼まれたぞ。

近江。誰も彼も手軽さうに請合つて、その淨瑠璃が不評判であつたら可笑しからうな。

出雲。はて、船中にて左様なことは申さぬものにて候ふ。



小出雲。それで思ひ出しました。あの知盛はどうなりましたな。

出雲。さうぢや。あの知盛の船幽霊も書いてみたい。いや、書きたいものは色々つかへてゐながら、いざとなれば何れもまとまらぬ。困つたものぢや。

権四郎。なにを措いてもその権四郎をどうぞお早く願ひます。一旦御約束なされた以上、わたくしが時々御催促にあがります。

出雲。いや、催促に来るには及ばぬ。書く時が来れば屹と書く。

権四郎。でも、あまり長びきましては。

出雲。まあ、よい、よい。(扇にておさへる。)こりや飛んだことを請合うたな。さあ、もつと飲め、飲め。

権四郎。いえ、もう十分でござりますから、どうぞその権四郎の方をお忘れなく……。

出雲。判つた、わかつた。さう煩さく責めるな、暑くなつてくる。

(出雲は扇をつかつてゐる。船中の三人も笑ひながら酒をのんでゐる。上のかたの河岸の上より早田八右衛門、廿五六歳。竹田近江の手代小平に案内されて出づ。)

早田。どうぢや。船は見えぬか。

小平。なにしろ此頃は川遊びの船が澤山出て居りますので……。

早田。(すこし急いで。)判らぬか。

小平。はい、はい。

(小平は船を探すころにて、そこらを見まはしてゐる。)

早田。では、もう少し下つてみようか。まゐれ。

小平。はい、はい。

(ふたりは下の方へゆきかゝる。船の中より権四郎は聲をかける。)

権四郎。おい、おい。そこへ行くのはお手代さんではないかな。

(小平は立ちどまる。)

権四郎。旦那様に御用があるのではないか。

小平。さうぢや、さうぢや。そのお船か。さつきから此の川筋をさがしてゐたのぢや。(引返して来る。)薩州のお屋敷の早田様を御案内してまゐりましたと、旦那様に申上げてくれ。

出雲。よい、よい。おれが云うてやる。(船中にむかひて。)これ、兄者。薩州のお屋敷から早田様が見えましたぞ。

近江。

こゝへ見えられたのか。

小平。

それへ御案内申しても宜しうござりますか。おいそぎぢやと仰せられますが……。

近江。

では、失禮ぢやがこれへ御案内せい。

出雲。

大勢がこのやうに押合つてゐるには、お客人も御迷惑、われくも窮窟ぢや。御川談のすむ

松洛。

間、松洛も小出雲も河岸をぶらぶらあるいて見ぬか。

小出雲。

船にも少し倦いたところぢや。それもよからう。(よろけながら起つ。)

松洛。

(松洛を支へながら。) わたくしもお供いたします。

出雲。

(出雲は先に立ち、松洛と小出雲もついて岸にあがる。)

早田。

遊興の邪魔をいたして氣の毒ぢやな。

出雲。

どうぞ御遠慮なくお通りくださりませ。

早田。

ゆるせ。(小平に。) そちも大儀であつた。

小平。

では、これで御免くださりませ。

(早田は船中に入る。小平は出雲等にも會釋して上のかたに引返して去る。出雲はあちらへ行かうと扇にて指せば、松洛と小出雲はうなづきて、三人打連れて下のかたに立去る。船中にては權四郎が)

近江。

そこらを取片付け、早田を上座に据ゑる。)

かやうなところへお運びをねがひまして、まことに恐れ入りました。

早田。

實は唯今お身の宅へ尋ねて参つたところ、弟どもに誘はれて船遊びに出たとか申すので、

近江。

手代に案内させてこの川筋を探しにまゐつた。

早田。

生憎留守にいたしましたして、重々恐れ入りました。日が落ちましてもまだお暑うござります。

早田。

どうぞお羽織をお取りください。

近江。

當年の残暑は格別のやうぢやな。(扇をつかひながら。) さて近江掾、あの御時計は相違なく

早田。

出来いたすであらうかな。

近江。

六月晦日までといふ御約束、今度は相違なく出来いたさせます。して、いよく來月は御

早田。

出立でござりますか。

早田。

本來はこの五月に歸國いたす筈のところ、御時計の手入れ延引のために歸國も自然延引、

近江。

いよく來月八日の出船にて出立いたすこと、相成つた。

それも皆わたくしの手後れからで、いづれも様にも御迷惑をかけ、なんとも御詫の申上様もござりませぬ。ほかならぬ薩摩の太守様のお道具、殊に日本で作りまししたる品とは變り

薩摩櫛

早田。

まして、和蘭渡りの御時計でござりますれば、その機關がなか／＼むづかしく、多年おほえのあるわたくしも随分苦勞いたしました。  
それは萬々察してをる。世に御時計師は多けれど、和蘭渡りの御時計をとこほりなく修繕いたす者は、長崎表にも見あたらす、大坂の竹田近江掾ならでは御用をうけたまはる者もあるまいと、わざ／＼當地の藏屋敷へ仰せ越されて、お身におたのみ申した次第。したがつて、多少の延引はよんどころない。當月中に相違なく出来いたせば、手前は勿論、他の諸役人も安心と申すものぢや。では、晦日の午過ぎに手前が受取りに出向いてよいな。お待ち申して居ります。

近江。

早田。

ところで、近江掾 手前折入つて相談があるのぢやが……。

近江。

はい。なんなりとも仰せくださりませ。

早田。

むむ。(權四郎を見かへる。)これ、船頭。手前は少々用談がある。氣の毒ぢやが些との間、そこらの岸へあがつてゐてはくれまいか。

權四郎。

はい、はい。かしこまりました。

早田。

これ、これ。(幾らかの金をつゝみて遣る。)

權四郎。

ありがたうござります。(近江に。)では、鳥渡御めん下さりませ。

(權四郎は岸に上り、濫圍扇をつかひながら下のかたに立去る。)

早田。

まつたく日が暮れても昏いなう。(むやみに扇を使つてゐる。)

近江。

たべ荒しではござりますが、こゝにお肴もござります。景氣拂ひに一つ如何でござります。(杯をさす。)

早田。

いや、折角ぢやが、けふは飲むまい。さて餘の儀でもないがの……。云ひかけて扇をつかつてゐる。)

近江。

(眞面目に。)はい。

早田。

早田八右衛門、折入つて頼むといふは外でもない。(思ひ切つて。)實はあの御時計のお直し料の儀ぢやが……。あれは八十五兩であつたな。

近江。

仰せの通りでござります。

早田。

はなはだ面目ない儀ぢやが、その八十五兩の代金、たしかに重役より預り居つたのぢやが、手前すこしく手詰りの儀があつて、およそ半金ほどを使ひ果してしまふた。いや、勿論お身に迷惑はかけぬ、約束の代金はかならず拂ひ渡す積りであるが、差當り當月の晦日には

八十五兩のうち四十五兩だけをお身に渡して、それと引換へに御時計を受取るわけにはまゐるまいか。

近江。(しづかに)さう致しまして跡金は……。

早田。同役の米津作之進、あれが屹とひき受けて、おそくも來月の末までにはお渡し申す。どうぞそれまでお待ちくださらぬか。薩州の藏屋敷、四十兩や五十兩の金に事缺く筈はござらぬが、重役達の耳に這入つては八右衛門が身の破滅、武士ひとりをお助けと思はれて、萬事は内分、さしあたりは半金で御勘辨くださるやうに、手をさけてお願ひ申す。

近江。わかりました。相手は御大藩の薩州家、御約束の御細工料が一錢缺けましても、料簡いたしにくい所でございますが、おまへ様の御身分にかゝはることとござりましては、また料簡を仕換へねばなりません。よろしうござります。四十五兩の金を御持参くださりませう。は、おあづかりの御時計をたしかにお渡し申しませう。

早田。早速の御承知、過分でございます。手前は來月早々出發いたしても、あとに残る作之進がかならず残金を調達して、唯今も申す通り、おそくも來月末までにはおとゞけ申す。お疑ひくださるな。

近江。承知いたしました。正直な薩摩の衆、おまへ様や米津様の御氣性も、ふだんから好う存じて居ります。

早田。では、手前、これでお別れ申す。かやうなところへ押掛けてまるつて、自分勝手の厚かましいお頼みは、かへすくも面目次第もござらぬ、餘の人々にもよろしく御挨拶ください。では、又重ねて。

早田。みそかの午過ぎに屹とおたづね申す。御免。

(早田は會釋して岸にあがる。近江は船端まで出て見送る。)

近江。すぐに御屋敷へお戻りでござりますか。

早田。え。

近江。(笑ひながら)曾根崎でござりますか。

早田。(すこし赤面して。)いや、出立前で色々の用事もござれば、すぐに屋敷へ戻らねばならぬ。

(云ひ捨て、早田は早々に上のかたへ立去る。近江は竈に立ちて笑ひながら見送る。芝居の打出しの太鼓の音きこゆ。)

近江。お、芝居ももう打出したと見ゆるな。

(岸の下のかたより芝居廻りの男女「はぞろ」とつゞいて出づ、その中には遊女を乗せたる駕籠なども出づ。それらの通り過ぐるを、近江は船よりながめてゐる。川の下のかたより一艘の屋形船漕ぎ出づ。櫂を把る船頭角藏の姿のみ見えて、船には籠をおろしてあり。岸の下のかたより権四郎出づ。)

権四郎。(岸の上より。)お客様はもうお歸りになりましたか。

(近江はうなづきて船中に入る。権四郎は漕ぎ廻扇をあげて下の方をまねけば、松洛と小出雲の二人出づ。)

小出雲。歌舞伎は相變らず流行りますな。

松洛。(不快らしく。)歌舞伎はこの頃めきくと繁昌して、あやつりを壓倒さうとしてゐる。大坂の奴等には淨瑠璃の旨味が判らぬやうになつたと見ゆる。(小出雲の手を把る。)もう船はつまらぬ。行かう、行かう。(上のかたを指す。)

小出雲。どちらへおいでなされます。

松洛。はて、野暮をいふな。それで面白い淨瑠璃が書けるか。

権四郎。(笑ひながら)北でござりますか。

松洛。

北でも南でも足の向く方角へゆく。歌舞伎がむやみに盛るのを見せつけられて、胸が悪くなつた。どこかで一と騒ぎせねば蟲が納まらぬ。さあ、行かう。権四郎、おまへも一緒に來い。

権四郎。御常談を……。わたくしがお供してまゐりましたら、あの船がどうなりませう。は、は、は。

(権四郎は船に入る。小出雲もつゞいて入らうとするを、松洛はひき留める。)

松洛。まあ、待て。どうしても行かぬか。

小出雲。けふは御免を蒙ります。

松洛。若いくせに弱い男ぢや。伯父御や親父がそんなに怖いか。

小出雲。まあ、先生もおとなしくお戻りなされませ。

(小出雲に宥められて、松洛も漕ぎながら船に入る。)

近江。出雲はどうしたな。

小出雲。芝居の打出しの混雑で、父のすがたを見失うてしまひました。

松洛。大方どこぞへ遊びに行つたのであらう。

近江。

おとなしく船へ戻つて来ればよいが……。まあ、もう少し待つてゐて遣らうか。  
(下のかたの船より船頭が聲をかける。)

角藏。

おい、おぢい。さつきからこゝに縋つてゐたのか。

権四郎。

おゝ、角藏。お客様は芝居の歸りか。

角藏。

むゝ、芝居の中であんまり蒸されたから、こゝらで些と涼んで行かうといふのぢや。なにしろ暑いな。

権四郎。

暑い、暑い。何年にも覚えぬことぢや。

(下のかたの船にて簾をまき上げる。船中には錢屋善次郎、廿二三歳。櫻風呂の菊野、廿歳。大和屋の女中おきよ、十八九歳。芝居歸りの姿にて乗つてゐる。)

権四郎。

おゝ、錢屋の若旦那でござりましたか。お芝居もお暑いこととござりましたらう。

善次郎。

ほんに昨日けふの暑さでは、芝居見物も樂ではござらぬ。すつかり汗になりました。

菊野。

水の上でさへこの通り、岡へあがつたら嘸ど暑いこととござんせうな。

おきよ。

今夜のやうな晩は、蒸暑くて寝られますまい。

菊野。

もう少しこゝらに涼んでゐるやうではござんせぬか。なあ、善さん。

善次郎。

もう一時ぐらゐ涼んで歸らう。船頭さん。灯を入れてくださらぬか。

角藏。

はい、はい。

(角藏は蠟燭を出し、おきよも手傳ひて船の提灯に火を入れる。権四郎も提灯に火を入れる。)

松洛。

(小出雲に。)あの芝居歸りの船にゐるのは錢屋のどら息子ぢや。櫻風呂の女子にうつゝをぬかして、どうでも勘當もの、心中もの、やがては淨瑠璃に唄はれうぞ。文三郎が使ふには好い人形ぢや。はゝゝゝゝゝ。

小出雲。

もし、きこえたら悪い。もつと低い聲でお話しなされませ。

松洛。

(自分の耳を指す。)はゝ、逆上せてゐる。大抵のことはお通じ無しぢや。

近江。

(真面目に。)氣の毒なことぢや。どうでも松洛先生に書かるゝかな。

松洛。

門左衛門どのがるなくなつてから、世話淨瑠璃はとんと流行らぬ。わたし等はやつぱり時代物ぢや。

近江。

去年の「大晏寺堤」——あれは評判がよかつたやうでござるが……。

松洛。

あれとても仇討物で、眞世話の世界ではござらぬ。

小出雲。

豊竹の方でも近頃は一向に世話物を出しませぬな。

近江。

やつぱり門左衛門殿ほどの名人はないかな。

松洛。

残念ぢやが、是非もない。操りがこのごろ歌舞伎に押さるゝのも、一つには門左衛門ほどの名人がないからぢや。(小出雲に)こなたなどはまだ若い。これから精出して二代目の門左衛門にならねばなるまいぞ。歌舞伎に壓潰されて無念でないか。

小出雲。

(すこしく興奮して。)はい、一生懸命に精出します。

(この中に、河岸の家々にも灯が入りて、川の上のかたにて騒ぎ唄の三味線きこゆ。下の船にては人々が耳をかたむける。)

善次郎。

もう日が暮れ切つたので、川遊びの船がだんくんに下つてくる。

菊野。

いつもながら水にうつる提灯は美しいものでござんすな。

善次郎。

淨瑠璃や物真似の船でも来ればよいが……。

(上のかたより二つの西瓜が流れてくるを、こなたの船にて見つける。)

小出雲。

お、西瓜が流れて来ました。

權四郎。

上のかたの船でながしたと見えます。

松洛。

取れ、取れ。

(小出雲と權四郎は船端へ出て、西瓜を拾ふ。一つの西瓜は下の方へながれてゆく。)

おきよ。

あれ、あれ、西瓜がこつちへも流れて来ました。

善次郎。

面白い。取れ、とれ。

(角藏とおきよは西瓜を拾ひ取る。)

菊野。

(水をのぞく。)あれ、あれ、また鬼灯が流れて来ました。善さん、早う取つてくださんせ。

善次郎。

お、鬼灯か。これはむづかしい。

菊野。

あれ、流れてゆく。早う、早う。

善次郎。

待て、待て。

(善次郎は扇にて鬼灯を船端へかきよせて掬ひあげる。)

菊野。

取れましたか。

善次郎。

取れは取れたが、扇子一本を廢らせてしまつた。(扇の雫を拂ひながら、ほゞづきを菊野に渡す。)

菊野。

お、見事な鬼灯でござんすな。

おきよ。

色々ものが流れて來ますな。

善次郎。

川遊びはこれが面白いのぢや。

菊野。(たちまち叫ぶ。)あれ、忌な。

善次郎。え、びつくりした。なんぢや、なんぢや。

おきよ。どうしたのでござります。

菊野。(ほうづきを見せる。)これ、この鬼灯には首がない。

善次郎。首がない。

(人々は顔を見あはせる。)

角藏。は、どこかの船のいたづらでござります。首のない鬼灯を幾つも流して来て、人に拾は

せて笑はうといふのでござります。

権四郎。(笑ひながら聲をかける。)大方そんなことではないかと、さつきから見えてゐました。は、

は、。(西瓜をたゝいて見せる。)併しこれは大丈夫でござりますよ。

角藏。(おなじく西瓜をたゝく。)は、これは大丈夫ぢや、は、は、は、。

(菊野は鬼灯をちつと眺めてゐる。)

善次郎。いつまで眺めてゐても仕様がな。一杯食はされたがこつちの阿房ぢや。早う捨て、しま

やれ。

菊野。首のない鬼灯がどうしてこゝへ……。

善次郎。今もいふ通り、どこかの船のいたづらぢやと云ふに……。

菊野。でも、なにやら気がかりな。

善次郎。はて、氣にかけることはない。思ひ切つて捨て、しまや。(菊野の手より鬼灯を取りて水にな

げ込む。)ほんに悪いたづらをする奴ぢや。(こなたの船へ聞えよがしに云ふ。)

権四郎。いや、思ひ違ひしてくださるな。それはこちらの船から流したのではござりませぬぞ。

善次郎。なんの、その位のこととは仕兼ねぬ奴等ぢや。なんほ逆上せると云うても、さつきから

の悪口憎て口、みなこの耳に筒ぬけぢやぞ。いかにもわしは錢屋のどら息子ぢや。櫻風呂

の女子にうつゝをぬかして、やがては親に勘當されて、淨瑠璃に唄はるゝ身の上ぢや。文

三郎が使ふにはよい人形ぢや。これ、船頭。あの船にゐる憎てらしい坊主頭に、その西瓜

をがんといふほど打ち付けてやれ。

角藏。え。(躊躇してゐる。)

権四郎。いや、それは迷惑でござります。

松洛。なに、おれの坊主頭に西瓜をうち付けるといふたのは何處の何奴ぢや。おのれ今に路頭に

薩摩櫛



迷うて、芥溜かゝりから西瓜すわいかの皮かわを拾ひろうて食くはぬやうに用心ようじんせい。

善次郎。なんぢや。もう一度いちど云いうてみい。

おきよ。まあ、お侍お侍ちなされませ。

松 洛。お、幾度いくどでも云いうてやる。

(松洛は船端へ出るを、小出雲と権四郎が止める。)

松 洛。おのれも小町屋こまちや惣そう七しちになりたいか。襟えり首くび引ひつ欄らんんで水みづへ投げ込こむぞよ。

善次郎。は、おのれこそ毛剃けそり九右衛門くさゑもんにはよい面おもぢや。この海賊かいぞくめが……。

松 洛。なにが海賊かいぞくぢや。

小出雲。もうお止としなされませ。

近 江。はて、先生せんせいもおとなけない。所詮しよせんはこなたが要いらぬ悪口わるくちを云いうたから起おつたことぢや。喧けん

嘩わの種たね蒔まはこつちにある。大抵たいていのことは勘辨かんべんせられい。

小出雲。さあ、元の座まへお直ただりなされませ。

権四郎。船遊ふなあそびの喧嘩けんわはめづらしうない。もう御料簡ごりょうけんなされませ。

松 洛。いまくしい小二せうに才さいめぢや。(並々しびながら座まに戻もどる。)

善次郎。さあ、口惜くわしくばこゝまで来きてみい。おのれの頭かぶをこのやうに叩たたいてやるぞ。(扇あふぎにて西瓜すわいかを

たたく。)

松 洛。なに……。(又また起おこしたうとするを、小出雲等は支さへる。)

近 江。こりやどうもならぬ。船頭せんとうどの。もう船ふねを出だしてくだされ。

権四郎。はい。でも、座元ざもとの旦那様だんなさまがまたお戻もどりになりませぬ。

小出雲。わたくしがもう一度いちど探さがして来きませうか。

近 江。いや、構かまはぬ。今いままで待まちつてゐても戻もどらぬやうでは、どこで何なにをしてゐるか判わかつたもので

ない。こんなところに長居ながるしては面倒めんどうぢや。(あなたの船ふねに思入おもひいれ。)さあ、早はやうのほつて

くれ。

権四郎。(のみこみて。)はい、はい。かしこまりました。

角 藏。おぢい、もう行くか。

権四郎。雨あめの降ふつた日に遊あそびに来こいよ。

角 藏。む。

(権四郎は船を漕こいで上かみのかたに去さる。あなたの船ふねの人々ひとぐは見送みおくる。菊野きくのひとり先刻さきときからちつと

打沈んでゐる。

善次郎。(まだ罵る。)海賊め。たうとう逃けて行き居つたか。やい、海賊。おのれは坊主にされて、命ばかりは助けられたのであらうが……。今度悪いことしたら、その首がごろりと落ちるぞよ。

菊野。あれ、善さん。又しても首が落ちるのと……。あゝ、忌、忌。もうそのやうなこと云うて下さんすな。

善次郎。ぢやと云うて、あの鬼灯は屹とあいつらが流したのぢや。

菊野。もう鬼灯の話は止めてくださいな。わたしは頭が痛んで来ました。

善次郎。それも皆あいつ等の仕業ぢや。わしをどら息子の、勘當息子のと云ひくさつて、擧句の果にこないたづらをする。ほんにほんに憎い奴等ぢや。

おきよ。相手は逃げて行きました。もう堪忍してお遣りなされませ。

菊野。誰が流したにしても、この船へ流れて来たは何かの因縁でござんせう。

善次郎。その鬼灯の話はよせと云ひながら、やつぱり自分から云ひ出すのか。もう、もう、なんにも氣にかけぬがよい。

菊野。あい。

善次郎。よいか。つまりぬことを氣にかけまいぞ。

(善次郎は菊野をなだめてゐる。上のかたにて唄の聲きこゆ。)

唄 させくと云うてもあらい薩摩櫛。

菊野。(眉をよせる。)又あんな唄を……。

善次郎。ほんに悪い唄が流行り出したものぢや。薩摩櫛よりもあらい薩摩のお侍、あのやうな唄が早田さまの耳に這入つたら何んなことにならうも知れまい。一體誰が作り出したのであらうか。

おきよ。さあ、誰が歌ひはじめたとも無しに流行り出したあの小唄、このごろは曾根崎ばかりでなく、こゝらあたりまで廣まつたと見えます。

菊野。早田さんにはお氣の毒でござんす。

唄 すかぬ此身はたとひ身をけづられても、解きやせぬ、ときやせぬ。

善次郎。あれ、まだ歌うてる。くどくも云ふやうぢやが、相手は氣のあらい薩摩の衆ぢや。腹立まぎれに何をしようも知れぬ。店の出入りにもよく氣をつけねばならぬぞ。

菊野。

あい。

(菊野は怪えるやうに身を竦めてゐる。河岸の上のかたより無頼漢らしき町人三人出づ。)

町人一。

(船に聲をかける。もし、もし、その船へ西瓜が流れて来ませぬか。)

角藏。

お、流れて来たので一つ拾うた。それがどうぞしましたか。

町人二。

拾うたら何うぞ買うてくださりませ。

角藏。

え。これは賣るのか。

町人三。

川上から流しまして、拾うたお船に買うて頂くのでござります。

角藏。

(舌打して。悪いことが流行るな。まあ、仕方がない。旦那様にたのんで遣らう。(善次郎に。)

善次郎。

もし、お聞きなされましたか。

角藏。

(おなじく舌打して。今夜は碌なものは流れて来ぬ、どうで強請るのであらう。なんほと云

町人一。

ふか聞いてみやれ。

角藏。

(岸にむかひて。おい、おい。この西瓜は何ほぢや。

町人一。

思召でよろしうござります。

角藏。

おほしめしでは判らぬ、はつきりと直段を云やれ。

町人二。

では、銀五匁くださりませ。

角藏。

なに、五匁……。截賣にしたら八文か十文の西瓜を銀五匁とは途方もないことぢや。足も

町人一。

とを見て附込むな。

町人一。

どうておやまを連れて船遊山するほどのお客様ぢや。五匁や十匁は溝へでもお捨てなさる

町人二。

西瓜は一つでも賣手は三人ぢや。

町人三。

かれこれ云はずに買うてくだされ。

三人。

買うてくだされ。

角藏。

そんなことを旦那には取次がれぬ。錢百文が關の山ぢや。

町人一。

阿房いふな。百文で賣れるか。

角藏。

賣れずばこつちから戻してやるわ。(西瓜を岸へ投げあげる。)

町人二。

おのれ、吝いことして後悔するな。

角藏。

勝手にさらせ。

三人。

吠面かくな。

おきよ。  
それ、石打ちや。おあぶなうござります。(あわて、簾をおろす。)

角藏。(叫ぶ。)あばれ者ぢや。あばれ者ぢや。

(三人は委細かまはずに小石を打ちつゞける。下のかたより竹田出雲出で、この體をみて俄に思案し、上のかたを指さして叫ぶ。)

出雲。おゝ、町廻りのお役人が来る。あれもうそこへ……。そこへ……。

三人。なに、町廻りが……。うしろを見かへり。ほんに侍が来るぞ、来るぞ。

(三人はうろたへて下のかたへ逃げてゆく。出雲は笑ひながら見送る。)

出雲。は。町廻りが来ると云うたら、うろたへて逃げて行つた。

どうも有難うござりました。

出雲。あばれ者が多くて困るな。

まつたく困つてしまひます。

角藏。(心づく。)や、おれの船が見えぬ。これ、これ、船頭衆。そこらにかゝつてゐた屋形船はどこへか行きましたか。

出雲。その船はもう少し前の上つて行きましたよ。  
芝居歸りの人に逢うて立話をしてゐるうちに、船を出されてしまつたか。とんだ俊寛僧

都ぢや。足摺りしても仕方があるまい。どれ、あるいて行くかな。

(船の簾をあげて善次郎と菊野は岸の上をみる。出雲はしづかに上のかたへ行かんとする時、上の

かたより早田八右衛門は足早に出て來りて、思はず出雲にゆきあたる。)

出雲。(透しみて。)あ、早田様か。

(早田は答へず、つかくと川端にすゝみて船のなかを屹と透し視る。善次郎と菊野はあわて、簾をおろす。出雲は上のかたへ行きかけて見かへる。うすく水の音。船の三味線きこゆ。)

幕

第二幕

(一)

薩摩櫛

曾根崎新地の櫻風呂。平舞臺の少しく上の方によせて、櫻風呂と染めたる長暖簾をさげたる入口あり。軒の柱にはおなじく櫻風呂と記せる行燈をかけ、色紙をつけたる七夕の竹を立てたり。左右は千本格子にて、下のかたに用水桶あり。

(七月七日の夜。騒ぎ唄きこゆ。上下よりぞめきらしき町人四五人出で、すれ違ひて去る。上のかたより風呂屋の女中が提灯を持ち出て出づ。下のかたより櫻風呂の女中おくらも提灯を持ち出て出づ。)

女中。

暑いことぢやな。

おくら。

暑いことや。おまけに今夜はお節句で忙しい。

米津。

(ふたりは挨拶して、女中は下のかたへ、おくらは櫻風呂の内へ別れて入る。向うより米津作之進、廿五六歳。寺山半五郎、廿三四歳。人をさがす體にて出づ。)

寺山。

(舞臺に来る。)はてなう。早田めはどこへ行き居つたかなう。

米津。

われくよりも一足先に茶屋を出て、まつすぐに屋敷へ戻つたことと思つて居つたに、まだ戻らぬとは不思議ぢやなう。

米津。

さあ。(かんがへる。)先日は手前同道で竹田近江の宅へまかり越し、とまほりなく御時計もうけ取り、國許への土産物なども買ひとのへたれば、もう外に用事はない筈ぢやが。

寺山。

いよく明日日出立するといふのでわれく若い者どもが打寄つて、いつものふれまひ茶屋で別杯を酌みかはし、無事にかしこを出たのぢやが、その途中から何處へ抜けて行つたか。

米津。

(又かんがへる。)早田は今夜可なり酔うてをつたな。

寺山。

む。酔うて居つた。

米津。

(鸚鵡返しに。)酔うてをつた。

寺山。

やつぱりこゝらにうろ付いて居るのではあるまいか。

米津。

あれは薩摩へ戻る男ぢや。遊び納めも好からうが、今夜はひどく酔うて居つたからなう。

寺山。

(不安らしく。)あいつ酔ひ過ぎると何うもいかん。

米津。

兎も角もそこでたづねて見よう。

米津。

む。

(ふたりは櫻風呂の前に来り、暖簾をくゞりて内に入る。下のかたより早田八右衛門は酒に酔ひながらも早足に出て来り、暖簾口より内をうかゞひあたるが、やがてあわたゞしく引返して用水桶のかげに忍ぶ。暖簾の内より米津と寺山出づ。)

米津。こゝにも居らぬ。不思議ぢやなう。

寺山。大和屋にも居らず、こゝにも居らぬ。はて、どこであらうかなう。

米津。大和屋と櫻風呂、この二軒をさがしても判らぬとは困つたものぢや。まさかに風呂屋と茶屋を軒別に聞いてあるくわけにも行くまい。

寺山。もうあきらめて戻らうではないか。われ／＼が斯うしてをるあひだに、案外もう屋敷の方へ戻つて居るかも知れぬぞ。

米津。それもさうぢやな。(考へる。)

寺山。もう行かう。

米津。(思ひ切つて。)行かうかなう。

寺山。おれも今夜は飲みすぎて暑うてならぬ。屋敷へ戻つて早う肌でも脱ぎたい。

米津。さうぢや。この二三日は論外の暑さぢや。ゆうべよりも又暑いな。

寺山。あつ、あつ。とても堪らぬ。  
(二人は扇をつかひながら下のかたに去る。用水桶のかけより早田は再び出で、ぬき足して櫻風呂の前へ行かうとする時、内より女中おくらが提灯を持ちて出づるに、早田はあわて、退る。おくら

につゞいて抱妓の湊も出づ。)

湊。(扇をつかひながら。)外にも些とも風がない。なんといふ暑さであらう。七夕さんにはめづらしいな。

おくら。あんまり暑さがひどいので、この新地でも急に気がひが三人出来たとか聞きました。

湊。こんな暑さではわたし等もやがて気がひにならうも知れぬ。おくらさん、おまへも用心しなさんせ。(笑ふ。)

おくら。ほんに人間ばかりでない、この暑さで気がひが犬もたんと殖えたと云ひます。けふも櫻風呂呂のおちよほが使に出た途中で、どこからかまぐれ込んだ野良犬に左の足を咬まれたとやら。

湊。お、怖。(顔をしかめる。)

おくら。かうしてゐても油断はならぬな。

(湊とおくらは下のかたへ行きかける。早田は呼びとめる。)

早田。これ、待て。

二人。え。(少し驚いたやうに立停まる。)

早田。(すゝみ出づ。)おまへ達はこれから何處へゆく。

湊。(透しみて。)おゝ、早田様でござんしたか。

早田。(湊とおくらは悪い人に逢つたといふやうに顔を見あはせる。)大和屋へのゆくか。

湊。(よんどこみなく。)あい。

早田。大和屋に菊野も行つて居るか。

湊。(曖昧に。)いゝえ。

早田。菊野は先月の末に京へ住み換へしたといふは本當か。

おくら。さうでござります。

早田。たしかに此の櫻風呂には居らぬか。

二人。あい。

早田。むゝ。(かんがへてゐる。)

おくら。(湊に眼くばせして。)わたくしどもは急ぎます。これで御めん下さりませ。

湊。御免くださりませ。

(湊とおくらは逃げるやうに向うへ立去る。)

早田。菊野はたしかに京へ行つたか。いや、どうもまこととは思はれぬ。(やはり考へてゐる。)

(櫻風呂より抱妓住の江出づ。女中おそめは提灯を持ち出て出づ。)

住の江。河内屋のお客では、また酒を強るのであらう。忌なことぢやな。

おそめ。お察し申します。

(ふたりは上の方に去る。早田は透し観て、それが菊野でないことを確め、たゞすんだまゝ考へてゐる。櫻風呂より按摩富市出づ。)

(内にむかひて挨拶する。)はい、はい、毎度ありがとうございます。

富市。(富市は杖をつき、下の方にゆきかゝる。)

(内)これ、富市ではないか。

早田。はい、はい。(考へて。)おゝ、さう仰しやるは、お蔵屋敷の早田様ではござりませぬか。

富市。静かにいたせ。(すつと寄りて富市の腕をつかむ。)

早田。あ痛、あ痛。もし、どうなされます。

富市。(小聲で嚇すやうに。)これ、隠さずに云へ。菊野はまだ櫻風呂に居るであらうな。

早田。薩摩櫛

富市。なぜそのやうなことを御詮議なされます。

早田。なぜでもよい。さあ、はつきりと云へ。菊野は居るか。

富市。(躊躇して) さあ、どう御返事をいたしてよいのか判りませぬが、菊野さんは相變らずに勤めておいでなされます。

早田。京へはゆかぬな。

富市。誰がそんなことを申したか知りませぬが、菊野さんはさつきまでこの家においでなりました。

早田。さうか。(うなづく) して、今夜はどこへ行つた。

富市。それは存じませぬ。

早田。屹と知らぬか。

富市。存じませぬ。

早田。(思案して) よい、よい。(つかみし腕を放して突きやる) ゆけ、ゆけ。では、御めんくださりませ。

富市。(富市は薄気味わるさうに挨拶して、早々に下のかたへ立去る。)

早田。(櫻風呂を見かへる) 菊野はやつぱり居つたのぢや。いつはり者め。ばいため。

唄 (下のかたにて唄の聲きこゆ。)

唄 させくと云うてもあら薩摩櫛。

早田。(腹立たしげに) 又唄ひをるか。

唄 すかぬ此身はたとひ身をけづられても、解きやせぬ、ときやせぬ。

(早田はその唄を聴いてゐる。上のかたより錢屋善次郎もその唄を聴きながら出づ。早田はそれに心づかず、やがて足早に向うへ立去る。善次郎はあとを見送る。時の鐘きこゆ。)

(11)

おなじく曾根崎の茶屋、大和屋の店さき。二重屋體にて軒に暖簾をかけ、正面は葺戸。門の柱に大和屋と記せる行燈をかけ、こゝにも七夕の竹を立てたり。よきところに柳の立木あり。店の上のかたには、二階へあがる階子段ありて、二階にも葺戸をしめてあり。この店の下のかたには灯の入り



たる町家がつゞきて見ゆ。店には燭臺を置き、店のまへには長床几二脚を置きたり。  
（おなじ夜。なまいた坊主ははうろく頭巾をかぶり、墨染の法衣にたすきを掛け、床几に腰をかけた鉦をたゝきながら唄つてゐる。大和屋の女中おすぎ、おかつの二人は店に腰をかけて聴いてゐる。そのほかにぞめきの男、通りがかりの女、十四五人が立つて聴いてゐる。）

坊主。

（汗を流しながら唄ふ。）和藤内はつたと怒り、おのれやれ、門を破るは日本の、朝夷流を見よやとて、貫の木逆茂木ひきやぶり、右龍虎、左龍虎打ち取つて、難なく過ぐる月日の關や。なまみだ、なまみだ、なまみだ、なまみだ、（無暗に鉦をたゝく。）こゝに哀れは紀國屋、小春は治兵衛に馴れそめて、泣かしやんせ、泣かしやんせ。なまみだ、なまみだ、なまみだ、（鉦をたゝき立てる。）

（店の奥より女房おとめ出づ。）

おとめ。

はて、店先でさうぐさしい。もうよいほどにして下さらぬか。

坊主。

はい、はい。（鉦をやめる。）

おとめ。

（女中等に。）おすぎもおかつも、うつかりと口あいて聴いてゐることか。人立ちがして暑苦しい。第一に商賣の邪魔。一錢二錢遣つて早う断つてしまはぬか。

おすぎ。

あい、あい。（袂から紙につゝみし錢を出す。）もし、御報謝でござります。

坊主。

（まじめに。）いや、それは御奇特のこと。かたじけなうござる。（錢をうけ取る。）さつきから喉が潤いてなりませぬ。とても次手に白湯一杯。

おかつ。

はて、色々のことをいふ坊様ぢや。

（おかつは奥に入る。坊主は紙包みの目方をひいてみて打笑む。）

坊主。

これは重い。もう少しお念佛を申しませうか。

おとめ。

いえ、もうそれには及びませぬ。この頃この里でも心中沙汰がやうく鎮まつたに、聞きたくもない小春治兵衛、もうやめて下され。

坊主。

は、あ、左様でござるか。

（奥よりおかつは茶碗を盆に乗せて出づ。）

坊主。

はい、はい。ありがたうござる。（湯を飲む。）やれ、やれ、今夜はお暑いこととでござるな。

おすぎ。

あれ。坊様に髪がある。

一同。

ほゝゝゝゝ。はゝゝゝゝ。

(人々は一度に笑ふ。)

坊主。(やはり眞面目で。) われらの宗旨は聖徳太子直傳 肉食妻帯飲酒戒、踊り三味線も一切お構ひなしとあつて、姿もかやうな大俗凡夫でござる。

おとめ。え、なんのことぢや、さあ、さあ、てんがう念佛が濟んだら、早う往んでくだされ。はい、はい。(床几を立つ。) なまみだ、なまいだ。やれ、暑い、暑い。

坊主。(坊主は鉦をたゝきながら上の方に去る。あつまりし人々も笑ひながら左右に別れてゆく。)

おとめ。やれ、やれ。あらしの止んだあとのやうな。これ、おすぎ。今夜のお座敷は櫻風呂の湊さんと柳風呂の小富さん、夕浪さん、それだけぢやな。

おすぎ。あい、あい。それだけでござります。

おかつ。それから櫻風呂の菊野さんが見える筈でござります。

おとめ。菊野さんが……。お客は薩州の早田様ではあるまいな。

おすぎ。いえ、早田様ではござりませぬ。

なぜ菊野さんはあのやうに早田様を嫌ふのでござりませうな。

おとめ。性があはぬと云ふのか、蟲が嫌ふといふのか。菊野さんは逃げまはつて逢はぬやうにして

困つたものぢや。

おすぎ。まつたく困つたものでござりますな。

(おすぎとおかつは店さきの床几を直しなどしてゐる。上のかたにて義太夫の三味線きこゆ。)

おとめ。お、隣では淨瑠璃がはじまるさうな。誰のお座敷であらうな。

おかつ。なんでも大一座のやうでござります。

おとめ。今夜はお節句ぢや。どこでも賑やかな方がよい。これ、お前達も店にばかり涼んでゐて、お座敷の方はよいかや。

(云ひ捨て、おとめは奥に入る。あとに二人は顔を見あはせて、お前が奥へゆくと互ひに争ひ、おすぎはおかつの背を一つ打ちて笑ひながら奥に入る。おかつは矢張り店に腰をかけて團扇をつかつてゐる。上のかたにて、紙治の淨瑠璃きこゆ。)

(今日普通におこなはるゝ近松半二の改作淨瑠璃は、この當時いまだ世に出でざれば、この河庄の一段はすべて近松門左衛門の原作によるべし。)

淨へ天満に年ふる千早振る、神にはあらぬ紙様と、世の鰐口に乘るばかり、小春にふかく大

幣の、腐れあうたる御注連繩、いまは結ぶの神無月、せかれて逢はれぬ身となり果て、あはれ逢瀬の首尾あらば、それを二人の最期日と、なごりの文の云ひかはし、毎夜々々の死覚悟、魂ぬけてとほくと。

(この文句よきほどに、向うより竹田出雲は片手に扇、かたてに螢籠を持ち、すこしく酒に酔ひたる體にて、物を考へつめながら出て、花道にたすむ。やがてあとより櫻風呂の菊野はあと先に氣を配りながら出て、思はず出雲に突き當れば、出雲はよろめきて草履をぬぐ。菊野はこゝろづきて會釋しながら草履を直す。)

出雲。 は、まるで歌舞伎のやうぢやな。

菊野。 どうも粗相をいたしました。

出雲。 お、櫻風呂の菊野でないか。これからどこへゆく。

菊野。 あの大和屋へまわります。(云ひながらも背後をみかへる。)

出雲。(おなじく見かへる。誰か連でもあるのか。)

菊野。 いえ、さうではござんせぬが……。

出雲。 大和屋ならばわしも行くところぢや。丁度よい。一緒に連れ立つて行かう。

淨 心でまねく氣は先へ、身は空蟬のぬげがらの、格子に抱き付きあせり泣。

(出雲はこれを持つてくれと螢籠を出す。菊野はすこし躊躇して迷惑さうに螢籠をうけ取る。)

出雲。 さあ、来やれ、来やれ。

(出雲は先に立ちて、菊野はうしろを見かへりながら大和屋の店前に来る。)

出雲。 相變らず暑いことぢやな。

おかつ。 お、竹本座の旦那様。ようおいでなされました。菊野さんも御一緒にござりましたか。

出雲。(床几にかける。)いや、わしが連れて来たのではない。今そこで逢うたのぢや。

菊野。(おかつに。)まだ善さんは見えませぬか。

おかつ。 い、え、まだ見えませぬ。善さまよりも、もう少し前に、薩摩の御屋敷の衆がふたり見え

て、早田様はこゝに來て居らぬかとおたづねなされてござりました。

菊野。 え。あの薩摩の衆が……、ほんたうにこゝへ……。

おかつ。 あい。

菊野。 さうして探しに來るやうでは、今夜も早田さんがこゝらをうろ付いてゐるのでござんせう

か。

おかつ。そんなことかも知れませぬ。

浄 連立ち出づれば南無三寶と、格子の小蔭に肩身をすほめ、かくれて聴くとも内には知らず。

(菊野はぎよつとして床几を起ち、螢籠を持つたるまゝにて左右を見返りながら奥にかくれ入る。)

出雲は扇をつかひながら矢はり物を考へてゐる。奥より女房おとめ出づ。

おとめ。あれ、菊野さんのあわたましい。連のお客様はどなたぢやな。

おかつ。竹本座の旦那様でございます。

おとめ。(店を出る。)おゝ、うつむいてござるので、ついお見それ申しました。これは座元の旦那様

でございますか。

(おとめは丁寧に會釋する。出雲は矢はりちつと考へつめてゐる。)

おとめ。もし、旦那様、お暑いのに好うお越しくだされました。今夜は七夕のお節句といふに、ま

あ、なんといふお暑さでございます。

(おとめは近寄つて、團扇にて出雲を扇ぐ。これにて、出雲は心づきて見かへる。)

出雲。どうも暑いことぢやな。どこやらで淨瑠璃の聲がきこえる。この家の座敷かな。

おとめ。いえ、隣の一階でございます。

出雲。紙治の河庄を語つてゐるのか。

おとめ。左様でございます。さつきもなまいだ坊主が来て、てんがう念佛に紙治を唄ひましたれば、

心中物は縁起がわるいと叱つて歸してやりましたが、又しても隣で紙治の淨瑠璃が始まり

ました。

(笑ふ。)となりでは叱ることも出来まいな。

(おなじく笑ふ。)どうも致方がござりませぬ。して、お座敷へお通りなされますか。

むゝ、座敷へ通して貰はう。

女郎衆はどなたをお呼びなされます。

誰でもよい。こゝの女房はよく知つてゐる筈ぢやが、わしには妙な癖があつてな。新淨瑠

璃をかながへて、どうしても好い趣向が浮ばぬ時には、ふら／＼と家を飛び出してどこか

の廊へ迷ひ込む。さうして広い座敷のまん中に澤山の燭臺を煌々と點けさせて、美しい女

郎どもを幾人も傍に引きつけて、その酌でちびり／＼と飲みながら、靜かにちつと考へて

ゐると、そのうちに又なんとか新しい智慧が湧いて來ることもある。

おとめ。こんなところでは近所隣がさうくしく、考へ事などなされるには、お氣が散つて悪うござりませうに……。

出雲。

それがさうでない。(笑ふ)隣座敷で唄うても踊つてもかまはぬ。泣いても笑うても頓着せぬ。いや、却つて賑いほどがよい。どこの座敷にも灯がついてゐる。そこにもこゝにも華やかな唄の聲や、媚かしい笑ひ聲が賑かにきこえる。酒の匂ひがする、白粉や油の香りがする。それに魂を溶かされたやうな心持になつて、しづかに考へるのがわしの癖ぢや。實は今夜も新淨瑠璃の趣向にゆき詰まつて、いつもの通りに家を飛び出して、途中で少しばかり酒をのんだが、一升袋は一升、無い智慧袋からはどうしても新しい智慧の泉が湧き出して來さうもないので、そこらを的もなしにうろ付きまはつて、たうとうこゝへまぐれ込んで來たのぢや。さあ、いつまでも店さきを塞いでるてはならぬ。どこか廣い座敷へ通してくれ。

おとめ。

はい、はい、かしこまりました。

出雲。

(見かへる)お、いつの間にか菊野は消えてしまつたな。は、錢屋の息子でも來てゐるのか。

おとめ。

(笑ふ)よう御存じでござりますな。

出雲。

は、知つてゐる。今夜も來てゐるのか。

おかつ。

いゝえ、まだ見えませぬ。

出雲。

隠すな、隠すな。わしは錢屋と張合うて、菊野の客にならうとは云はぬわ。(笑ふ)さあ、涼しさうなところへ案内して、美しい女郎を大勢呼んでくれ。

おとめ。

御承知の通り、今晚はお節句で大抵の女郎衆は御約束になつて居りますれば、少しお手間が取れるかも知れませぬ。どうぞ御勤辨くださりませ。

出雲。

よい、よい。どうせ急がぬ旅ぢや。そんならもう少しこゝに涼んでゐて、隣の淨瑠璃でも

おかつ。

それが宜しうござりませう。

出雲。

(耳をかたむける)や、淨瑠璃がいつの間にか止んだ。さりとはい意地の悪い。もつと積けて

おとめ。

語ればよいに……。

おとめ。

ほんに塗ぎれてしまひましたな。

(向うより早田八右衛門は足早に出づ。)

おかつ。

お、早田様。

早田。

(急いで)菊野は居らぬか。

おかつ。

(奥を見かへりながら)いえ、おいではなりませぬ。

早田。

これ、女房。櫻風呂の菊野はたしかに来て居らぬか。

おとめ。

(おかつと眼を見あはせて)はい、今夜は一度もみえませぬ。

早田。

約束の客もないか。

おとめ。

唯今のところではお約束のお客もござりませぬ。

早田。

いや、隠すな。櫻風呂では京へ住みかへしたと申してをるが、それはいつはりで、矢はり

こちらに勤めて居ることは按摩の富市から承知したぞ。唯今もこれへまるる途すがら、人

込のなかで遠眼にみたは確かに菊野のうしろ姿ちや。これへまるつたに相違あるまい。さ

あ、隠さずに逢はしてくれ。

おとめ。

菊野さんが先月かぎりで京へ住み換へしたといふことは、わたくしも噂に聞きました。そ

早田。

こちらで御覽なされたとは、夜目遠目の人違ひでござりませう。

人違ひでない。現に富市もこつちに勤めてをると申したでないか。

おかつ。

はて、眼の見えぬ人の云ふことがなんの證據になりませうぞ。

早田。

え、おのれらは引込んで居れ。よい、よい。どうでも菊野が参つてをらぬといふなら

奥へ通つて探してみるぞ。(草履のまゝにて店へ上らうとする。)

おとめ。

(支へる)あれ、まあ、土足であんまりな。なんほこのやうな商賣してゐても、おまへ様方

に家探しはさせられませぬ。

早田。

家探しといふではない。唯そこの座敷を覗いて見るだけのことぢや。(焦れて)邪魔する

と斬るぞ。(刀に手をかける。)

おとめ。

え。(おとめとおかつは驚く。先刻より黙つて聴きおたりし出雲は、この時、見かれて起ちあがる。)

出雲。

もし、早田様。先づおしづまりなされませ。

早田。

(見かへる)お、お身は竹田近江掾の……。

出雲。

はい。弟の出雲でござります。先日は失禮いたしました。(丁寧に會釋する。)

早田。

(すこし極り悪さうに)その節は手前も遊興の邪魔をいたしました。

出雲。

兄の近江におあつらへの御時計はお受取りに相成りましたか。

薩摩備

早田。お、たしかに先日受取つてまるつた。

出雲。御細工は御意にかなひましたか。

早田。手前には一向にわからぬが、すぐに屋敷へ持歸りしところ、さすがは竹田近江掾、けに天

晴れの御細工ぢやと、重役の面々も賞美して居られた。

出雲。左様に御賞美にあづかりましては、兄の面目、それにつながるわたくしまでも肩身が廣うござります。

(出雲は再び丁寧に會釋する。早田は困つた奴に出逢つたと、腹のなかでは舌打ちしながら黙つてゐる。)

出雲。

本来ならばこの五月のお船で御歸國の筈のところを、兄の御細工延引のために二月あまりもお待合せくだされたとやら、御迷惑いくへにもお察し申します。わたくしどもの口から申上ぐるまでもござりませぬが、大切の御時計、お取扱ひが悪いとすぐに狂ひませう。道中は随分氣をつけてお持歸りをねがひます。

早田。

(素氣なく) 承知いたしました。(云ひながらも奥なうかゞつてゐる。)

出雲。しかし御時計の狂うたのは、わたくしの兄に仰せ付けられましたら、二度でも三度でもお

繕ひをいたしませう。人間の胸の機關、それが一度狂ひましたら、兄は勿論、どなたの手にかかけましたも、容易にお繕ひはかなひますまい。これは御時計よりも猶さら御大切になさねばなりません。いや、いつも淨瑠璃詞が癖になつて、なにか理窟張つたことを申上りました。天禮御めんくださりませ。

早田。

(よんどころなく) いや、判つた、わかつた。お身が申すまでもなく、殿様からおあづかり申した大切の御時計、かならず氣をつけて持歸るぞ。

出雲。

明日のお船でお立のやうにうけたまはりましたが、左様でござりますか。

早田。

いかにも明朝出發いたす。

出雲。

秋と申してもまだくお暑うござります。殊にこの四五日は人を氣ちがひにするやうな暑さ、おからだをお厭ひなされませ。

早田。

む。

(早田は今更どうすることも出來ず、苛々しながら床几に腰をおろす。)

早田。

これ、水をくれ。

おかつ。

はい、はい、

(おかつは奥に入る。下のかたより米津作之進出づ。)

米津。 お、早田。 やつぱりこゝに居つたか。

おとめ。 たつた今おいでなされたのでござります。

米津。 途中からお主の姿が見えなくなつたので、寺山とそこらを探しあるいて居つたのぢや。

早田。 (空とぼけて。) 寺山と二人で探してをつたか。

米津。 む、寺山はあきらめて屋敷へ戻つたが、おれはどうも不安心ぢやで、引返して又探しに

来た。

早田。 なに、不安心ぢや。

米津。 その譯はあとで話す。まあ、来いよ。

早田。 む、(溢つてゐる。)

出雲。 お連衆の見えられたは丁度幸ひぢや。御一緒にお歸りなされませ。

早田。 む、(また溢つてゐる。)

(奥よりおかつは茶碗に水を汲んで出づ。早田は引つたくるやうにして飲む。)

米津。 さあ、飲んでしまふたら早く来いよ。あすの船は明六つに安治川口を出るといふではない

か。早う戻つて一寐入りせい。

早田。 うるさい奴ぢやな。これ、女房。菊野はまつたく參つて居らん。

おとめ。 まだ疑うておいでなされますか。

早田。 む。

(早田は奥を覗みながら、持つたる茶碗を地に投げつけて打破り、そのまゝつかくと下のかたに去る。米津もつゞいて去る。)

出雲。 (早田のうしろ姿を見送る。) 薩摩歌の源五兵衛によつて似たお侍ぢや。

おとめ。 (おなじく見送る。) 菊野さんにたのまれていつもく嘘ばかり云うてゐるのは、なんだか氣

が咎めてなりません。心づいて。なにしろ、飛んだ御迷惑をかけたして、まことに申譯がござりませぬ。唯今すぐにお座敷をこしらへさせませう。鳥渡お待ちくださりませ。(二階にあがる。)

出雲。 やれ、やれ、ちつと静かになつた。(床几に腰をかける。)

(二階にておとめの呼ぶ聲きこゆ。)

おとめ。 おかつや。おまへも鳥渡来てくれぬか。



おかつ。 あい、あい。

(おかつも二階にあがつてゆく。出雲はふところより横縷ぢにしたる草稿を取り出して、読みかけしが、少し暗いといふこゝろにて、身を捻ぢ向けながら店さきの灯に透して草稿を讀んでゐる。奥より菊野は螢籠を持ちて、あたりをうかゞひながら出づ。)

菊野。 もし、早田さんはもう行きましたかえ。

出雲。 (草稿をよみながら。) むゝ。行つた、行つた。

菊野。 これでわたしもほつとしました。(下駄を穿いて出る。) さつきあんまり慌てたので、うつかりとこの螢籠を持逃げしてしまひました。堪忍してくださいませ。

(出雲は黙つて一心に草稿をよんでゐる。)

菊野。 (竊と進みよる。) もし、旦那さん。螢をお戻し申します。こゝへ置いてもようござんすか。

出雲。 (初めて見かへる。) なに、螢……。おゝ、これか。こゝへくる途中、橋の袂で秋の螢を賣つてゐたので、酔つた紛れについ買ふ氣になつたのぢやが、さて買つてみても何うにもならぬものぢや。そこらへ勝手に放してやれ。

菊野。 放してやりますか。

出雲。 いや、待つてくれ。こゝは少し薄暗うてならぬ。その螢の火が入用ぢや。唐土の學者は螢の火をともしびに代へて書物を讀んだといふ。わしも鳥渡その真似を試してみようかな。(螢籠を取らうとする。)

菊野。 では、わたしが照してゐませう。(立ちながらに螢籠をかざす。)

出雲。 それは大儀ぢや。しかし座敷の方はよいのか。誰かに叱られはせぬかな。

菊野。 約束のお客さんはまだ見えませぬ。

出雲。 さうか、さうか。

(出雲は再び草稿をよみはじめ。菊野は螢籠をかざしながら無言にてその傍に立つてゐる。二階

よりおかつ降り来る。)

おかつ。 もし、旦那様。お座敷が出來ました。

出雲。 (草稿をよみながら。) まあ、待つてくれ。もう少しあとで行く。

おかつ。 すぐにはおいでなされませぬか。

出雲。 (うるさうに。) はて、待つてくれといふに……。

おかつ。 はい、はい。(二階へ引返してゆく。)

菊野。

(隣の淨瑠璃の三味線再びきこゆ。)  
(ひとり言のやうに。) 隣では又ひき出したさうな。やつぱりさつきの紙治のつゞきであらうか。

(出雲は答へず、一心に草稿を見つめて考へてゐる。淨瑠璃きこゆ。)  
淨 さゝやけば手をあはせ。

詞「御誓言での情のお詞 涙がこぼれて忝けない。いかにもく紙治さんとは死ぬる約束、親方にせかれて逢瀬も絶え、差合ありて今急にうけ出すこともかなはず、南の元の親方とこゝとにまだ五年ある年の中、人手にとられては、わたしは固より、主は猶一分たゝず。いつそ死んでくれぬか。あい、死にましょと、引くに引かれぬ義理づめに。

淨 ふつと云ひかはし、首尾を見あはせ合圖をさだめ。  
(このうちに、菊野は淨瑠璃に聞き惚れて、思はず簞籠を床几のうへに置く。出雲はちつと考へてゐるが、これも淨瑠璃がだんくに耳につきて、顔をあげて聴く。)

出雲。

(ひとり言のやうに。) 門左衛門はやつぱり巧いな。(嘆息して) あゝ、名人ぢや。とても及ばぬ。

菊野。

あの淨瑠璃は門左衛門といふお人が書いたのでござんすか。

出雲。

さうぢや。近松門左衛門、わしが師匠も同様のお人ぢや。わしも根かぎり工夫して、一生の中になつた一つでも、あの紙治ほどの作をして、近松門左衛門、竹田出雲と、肩をならべて立ちたいものぢやが……。 (又もや嘆息する) あゝ、それもなるやらならぬやら。うかつかしてゐる中に、わしもやがて五十の聲を聞く。

淨 ぬけて出よう、抜けて出よと、いつ何時を最期とも、その日おくりの敢ない命。

(出雲は草稿を床几の上に置き、起ちながら腕をくみて淨瑠璃を聴く。菊野は又、出雲とは違つた心持で、矢張り身にしみるやうにその淨瑠璃をちつと聴いてゐる。)

菊野。

その門左衛門といふお人はまだ生きてゐられるのでござんすかえ。

出雲。

いや、もうこの世には居られぬ。去年が丁度十三回忌で、いま語つてゐる紙治の淨瑠璃は享保五年、六十八歳のときに書かれたのぢや。わしもその歳まで生きられたら、もう少しなるとかなるかも知れぬが……。 いや、門左衛門殿のやうな名人は格別、わし等のやうな下根なものが六七十の年寄りになつたら、第一に筆が枯れ切つてしまつて、あのやうな若々しい艶も濕びも失せるであらう。(菊野の顔をみる) おまへはまだ若い。羨ましいいな。

菊野。なんの羨ましいことがござんせう。人に羨まるゝやうな果報があれば、こんな勤めに出や  
しませぬ。

出雲。さう云へばそんなものぢやが、人間はなんでも若い花、さうした勤めをしてゐる中  
でも又面白いことがあらう。

菊野。へいつとなる。面白いこと、派手なこと。それはほんの表ばかりで、この身になつて御覽  
じませ。子供のときに父様には死別れ。

菊野。わたし一人をたのみの母様、南邊に賃仕事して裏家住み。  
それを思へば年のあくまでは大事のからだ、どんなにいたい男があつても、あの淨瑠璃  
の小春さんのやうに、心中する氣にはなられませぬ。

淨。死んだあとでは袖乞ひ非人の飢死もなされうかと、これのみ悲しさ、わたしとても命は  
一つ。

菊野。それをあの早田さん、わたしに嫌はれたを口惜しがり、このごろは夜も晝もわたしの出入  
りを附けまはし。

淨。思ひがけなき男心、木から落ちたるごとくにて、氣もせき狂ひ。

菊野。

見つけ次第に斬るか突くか、刃物三昧も仕かねぬと、噂を聞くさへぞつとして、かうして  
こゝへくる途中も、若しやあの人に逢はうかと、かたきを持つたも同様の心づかひ、ほん  
に壽命が縮まります。

淨。膝にもたれて泣く有様。

出雲。

なるほどそれは氣の毒、丁度あの淨瑠璃の河庄で、小春が太兵衛に附けまはされるも同じ  
ことであらうか。併しもう案じることはない。いかに執念ぶかい薩摩の侍でも、主人の  
御用には勝たれぬ。わしの兄の近江にたのんだ御時計がもはや出来いたした以上、いつま  
でうかくと大坂の藏屋敷にはゐられぬ。あすの船で國許へ歸る筈。おまへが仇を持つて  
ゐると云ふも今夜かぎりぢや。まあ、安心しやれ。

菊野。

そんな噂も聞きましたか……。では、ほんたうに早田さんは、今夜かぎりでお國へ歸るの  
でござんすか。

出雲。

屹と歸るに相違あるまい。

菊野。

それで命拾ひをしたやうな。わたしもやうく安心しました。

出雲。

一體おまへは勤めの身で、なぜそのやうに早田氏を嫌ふのぢや。

薩摩 柿

菊野。なぜか自分にもわかりませぬ。たゞ譯もなしに忌で忌で……。おほかた早田さんとわたしとは仇同士の生まれ變りでもござんせうか。勤めする身は辛抱が大事と、幾たび思ひ直しても、どうしてもあの人の座敷へは二度と出る氣にはなれませぬ。

出雲。それでも懲りもせずに通うてくるのか。させ〜と云うてもあらい薩摩櫛——あのやうな流行唄まで出来るやうでは、この廓へも絶えず入り浸つて、これまでに随分無駄な金を使つたであらう。氣の毒なことぢや。

菊野。誰が歌ひ出したのかあんな唄まで流行らせて、ほんに思へばお氣の毒でござんすが、身取ひするほどに忌なお客、なんほ勤めでもこればかりは……。む。それも道理ぢや。嫌ふおまへに無理はない。嫌はれても思ひ切られぬといふ早田氏にも無理はない。どちらにも無理はないと知りながら、それをどうすることも出来ぬのが人間の悲しさぢやな。

出雲。誰が歌ひ出したのかあんな唄まで流行らせて、ほんに思へばお氣の毒でござんすが、身取ひするほどに忌なお客、なんほ勤めでもこればかりは……。む。それも道理ぢや。嫌ふおまへに無理はない。嫌はれても思ひ切られぬといふ早田氏にも無理はない。どちらにも無理はないと知りながら、それをどうすることも出来ぬのが人間の悲しさぢやな。

菊野。(しんみりして)そんなことかも知れませぬ。  
淨 小春は始終むせかへり、みなお道理とばかりにて、詞も涙にくれにけり。  
(二人はしばらく無言。)

出雲。(空をみる)今夜はたなばた、空には秋らしい天の川が流れてゐる。宵のうちに引きかへて餘ほど涼しくなつて来たな。  
菊野。陽氣が急に變つたやうに、涼しい風がそよ〜と吹いて来ました。  
(寂しき間。按摩の笛遠くきこゆ。)

出雲。内にゐても好い智慧が浮ばず、こゝへ來ても工夫がつかず。所詮今夜は駄目ぢや、駄目ぢや。(舌打ちしながら起ちあがる。)

菊野。(氣の毒さうに)わたしゆゑに由ない御心配をかけまして、とんだ御邪魔をいたしました。いや、いや、おまへのせるでもない、誰のせるでもない。このあひだから夜も晝も考へつめてゐる新淨瑠璃がいつまで立つても纏まらぬは、わしが生得下根なからぢや。あゝ、くどいやうぢやが、門左衛門どのは名人、いつも聴く紙治の淨瑠璃も、今夜はつく〜と身にしみて急に心さびしくなつたやうな。(再び腰をかける。)

菊野。お寂しくなりましたら、早う二階へおいでなされて、御機嫌直しに酒でもおあがりなされませぬか。

出雲。いや。止さう、止ませう。賑かな色町の酒の匂ひも、今夜はなんだか忌になつた。  
薩摩櫛

(出雲は矢はり浮かぬ顔をしてゐる。奥よりおとめ出づ。)

おとめ。もし旦那様。まだお這入りなされませぬか。お銚子もお吸物も冷えてしまひます。

出雲。今も云うてゐたところぢやが、さつきの酔がすつかり醒めてしまつたら、もう再び飲む氣にはなれなくなつた。勝手ぢやが今夜はこれで歸る。(再び起つ。)

おとめ。(不思議さうに。)すぐにお歸りなされますか。

(出雲は紙に銀をつゝみて遣る。)

出雲。少しぢやが、女子達に花をやつてくれ。

おとめ。ありがたうござります。(銀を頂く。)

菊野。せめて一と口召上つておいでなされませぬか。

出雲。支度をさせて氣の毒ぢやが、やつぱりすぐに歸るとしよう。

おとめ。どうしてもお歸りなされますか。では、女子どもを呼んで御挨拶を致させます。

出雲。いや、いつも来る客ぢや。構ふな、かまふな。(袖をかき合わせる。)

菊野。ほんに涼しくなつて来た。

出雲。もう夜が更けた。

淨 歸るすがたも痛々しく、あとを見送り聲をあけ、なげく小春もむごらしき、不心中か心中か。

(出雲はこの淨瑠璃を聴きながら、さびしき心持にて歸りかゝる。おとめは螢籠を取りて渡さうとすれば、出雲は要らぬと頭をふる。菊野は床几の上の草蓆を見つけて取つて出せば、出雲はこゝろづいて會釋しながら受け取る。時の鐘。道具は半廻しになりて、横手の黒板扉みゆ。)

淨 まことの心は女房の、その一筆の奥ふかく、誰がふみも見ぬ戀の道。

(出雲は時々立ちどまりて、淨瑠璃に耳をかたむけながら下のかたへ徐かにあゆみゆく。)

淨 別れてこそは歸りけれ。

(淨瑠璃の三重。時の鐘。)

幕

第三幕

(一)

薩摩櫛

大坂千日前、竹田出雲の家。本宅は道頓堀にありて、こゝは一種の控へ家なれば家は廣からず、風流にして侘びたる作りと知るべし。上のかたの床には近松門左衛門の畫像の一軸をかけ、その前に香爐をおく。つゞいて違ひ棚、鴨居には千前軒と題せる額をかけたなり。棚の上には伏見のおやま形、京人形などを飾り、ほかに色々の書物も積んであり。それにつゞいて、奥へ出入りの襖あり。縁は廻り縁にて、縁先には閑伽桶やうのものに草花を入れたるが置いてあり。庭の上の方には四つ目垣ありて、こゝにも秋の草花が深山に咲きみだれたり。下のかたには百日紅の大樹、花は紅く咲けり。下のかたの奥には風雅なる門を内より見たる形にて、扉の半分はあけてあり。門の向うは彼の千日寺にて、荒涼たる墓場を見る。

(七月十三日の午後。竹田出雲は上の方へすこし斜めに机を据ゑて、横綴ちの草稿になにか筆を入れてゐる。机の上には一文人形が五つ六つならべてあり。そこらには義太夫の丸本と抜本が幾冊も取りちらしてあり。千日寺の叩き鉦の音きこゆ。出雲はしきりに考へながら筆をやめ、人形をとりて列べ換へなどしてゐる。下のかたの門より竹田小出雲は奉公人佐助に小さき盆燈籠を持たせて入り来る。)

小出雲。

今日は……。

(出雲は更に丸本を把りあげて讀んでゐる。)

佐助。

旦那様。お涼しうなりました。

出雲。

(見かへる。お、来たか。めつきり涼しうなつたな。)

小出雲。

(縁に腰をかける。やはり曆は争はれぬもので、盆が来ましたら急に涼しくなりました。)

出雲。

む、この中の暑さが夏の別れであつたらしい。昨日けふは俄に涼風が立つて来た。(むき直る。お、燈籠を持つて来たな。)

小出雲。

小さいのと仰しやりましたので、こんなのを持たせてまゐりましたが……。

佐助。

これでは如何でござりませう。(燈籠をみせる。)

出雲。

よい、よい、そのくらゐで丁度よい。すぐに懸けてくれ。

佐助。

はい、はい。(縁にあがる。こゝらに致しますか。)

出雲。

お、そこらでよからう。

出雲。

(佐助は機に燈籠を吊る。)

出雲。

どうぢや。表のお寺には参詣があるか。

小出雲。

大分参詣があるやうでござります。お盆中は少しさうくしいかも知れませぬ。

出雲。

盆と彼岸だけは仕方があるまいよ。さうくしいと云うても知れたものぢや。

(町の娘ふたりは線香を持ちて、門より内をうかひながら入り来る。)

町娘一。あの、鳥波おたづね申しますが、この千日寺にある三勝のお墓はどの邊でござりませう。  
出雲。三勝の墓は金毘羅堂のそばで、墓の上には標の松が栽ゑてござります。  
町娘二。半七のお墓も一つとところでござりますか。

出雲。さあ、三勝半七と一口にいふが、そこにあるのは三勝の墓だけで、石塔に戒名嵐雪月照と彫付けてあります。(微笑みながら) 兎も角もよく拜んでおやりなされ。半七も共々によるこぶでござらう。

娘二人。はい、はい。どうも御邪魔をいたしました。(門の外へ出てゆく。)

佐助。(見送る)は、浮氣まるりの多いことぢや。(小出雲に)若旦那様。ほかに御用はござりませぬか。

小出雲。さあ。(出雲に)おやぢ様。どうでござります。

出雲。ほかに用はない。戻つてくれ。

佐助。はい、はい。では、御めんくださりませ。(會釋して出てゆく。)

(小出雲は座敷にあがり、門左衛門の畫像の前に禮拜して座に着く。)

小出雲。時に松洛先生はまだ見えませぬか。

出雲。晝すぎには来る筈ぢやが、まだ見えぬ。今年は残暑が強かつたので病家廻りが忙かしいかな。

小出雲。そんなことかも知れませぬ。

(奥より女中おつる出づ。)

おつる。(小出雲に)おいでなされませ。

小出雲。涼しうなつたな。

出雲。わしも飲みたい。茶を淹れて来てくれ。

おつる。かしこまりました。(奥に入る。)

(膝をすゝめる)どうでござります。御趣向はつきましたか。

出雲。ひ、ゆうべも遅くまで工夫して、先づ一通りの筋は立てた。實は先頃から一つ考へてゐるものがあるが、それはなかく纏まらぬので、わしもひどく案じ悩んでゐると、そこへ

だしぬけに降つて湧いたのが今度の五人斬ぢや。秋興行には是非それを取仕組んでみたい

と、きのふから急にその相談をはじめたので、いや忙がしいこと、忙がしいこと、ゆうべ

と、きのふから急にその相談をはじめたので、いや忙がしいこと、忙がしいこと、ゆうべ

と、きのふから急にその相談をはじめたので、いや忙がしいこと、忙がしいこと、ゆうべ

小出雲。

は碌々眠らなんだ。いよ／＼筋立がきまつたら、おまへも一と場うけ持つてくれ。

出雲。

それにしても松洛は何をしてゐるかなう。あの男が来てくれねば本當の筋立がきまらぬ。佐助を迎ひにやれば好かつた。

小出雲。

では、わたくしが鳥渡お迎ひに行つてまゐりませう。

出雲。

さうしてくれ。御病家も勿論大切であらうが、こちらは何分いそぎますと云うてな。

小出雲。

はい、はい。

權四郎。

(小出雲は早々に出てゆく。出雲は再び机にむかひて丸本をよみ始める。叩き鉦の音。きりぎりすの聲きこゆ。下のかたより船頭權四郎、浴衣にて切素麵を持ち出て出づ。)

權四郎。

(内をうかゞひて。)御免なされませ。

おつる。

(奥よりおつるは茶道具と湯沸しを持ち出て出づ。)

おつる。

どなたでござります。

權四郎。

旦那様はお宿でござりますか。

おつる。

して、おまへさんは……。

權四郎。

船頭の權四郎めでござります。

出雲。

(ふり向く。)お、權四郎、来たか。まあ上れ。

權四郎。

はい、はい。これで結構でござります。(縁に腰をかける。)旦那様。これは少々ばかりでござりますが、御佛前へお供へくださりませ。(素麵を出す。)

出雲。

ほう、素麵か。それは丁寧な。折角ぢやから貰うて置きます。

出雲。

(おつるを見かへれば、おつるは會釋して素麵をうけ取る。)

出雲。

けふは盃蘭盆ぢや。近松先生の御靈前にそなへて置け。

おつる。

はい、はい。(素麵を床の間に置く。)

出雲。

そこで、けふは商賣は休みかな。

權四郎。

お盆の入りでござりますから、けふ一日は商賣を休みまして、これからお寺まゐりをいたします。

權四郎。

(この中におつるは茶をついで、出雲と權四郎にすゝめる。)

おつる。

もうお構ひくださりませ。頂戴いたします。(茶を飲む。)

おつる。

御ゆつくりなされませ。(更に其盆を權四郎にすゝめ、會釋して奥に入る。)



權四郎。

實は道頓堀の御本宅へあがりました處、きのふから千日前の方にお泊り込みとうけたまはりました、失禮ながら押掛けにこちらへ伺ひましてござります。

出雲。

なにしろ道頓堀の本宅は、あの通り混雑の場所でもあり、兎かくに人出入りも多いので、とても落着いて筆を執つてゐることは出来ぬ。そこでこんなところへ小さい家をこしらへて、書き物などをする時には大抵こゝへ來ることにしてゐる。千日前にあるので千軒。(額を指さす)こゝがわしの仕事場ぢや。

權四郎。

(あたりを見まはす)結構なお住居でござります。定めて閑靜なことでござりませう。

出雲。

閑靜を通りすぎて寂しくらるぢや。このごろは孟蘭盆で少しは參詣人もあるが、不斷はさびしい。なにしろ千日寺ぢやからな。

權四郎。

千日寺といへば、先づお仕置者か心中の晒し者か、お寺の名を聞いただけでも餘りよい心持はいたしませぬ。なんでも雨のふる晩などには、亂塔場に鬼火が燃えるとか人魂が飛ぶとか申しまして、氣の弱いものは滅多にこゝらを通らないさうでござります。

出雲。

わしがこの家を作る時にも、そんなことを云ふ者があつたよ。(微笑む)場所もあらうに千日前、態々そんなところを探さずとも、ほかに相當の場所があらうと意見してくれた者も

權四郎。

あつたが、その寂しいのがわしの氣に入つたので、たうとう強情に來ることになつたが、まつたく雨風の晩などは夜が更けると物凄いな。

出雲。

(氣味悪さうに)なにか出ますか。

いや、ほんたうに出るかどうかは知らぬが、なにか出さうな氣もするな。おまへも云ふ通り、この千日寺に埋めてあるのはお仕置者か、心中の晒し者か、この世に思ひの残つてゐるうなのが多い。雨風の暗い晩などに、こゝにおつと坐つてゐると、こつちの氣のせるか、亂塔場のあたりで人の泣くやうな悲しい聲が途切れ途切れに聞えるやうなこともある。

權四郎。

(息を呑んで)さうでござりますか。おまへ様はお強うござりますな。

出雲。

強いと云ふでもないが、それがためにこゝを逃げ出さうとも思はぬ。若しほんたうに出るものなら、一度は幽霊にも出逢つてみたいと思ふが……。

權四郎。

(感心したやうに)なるほど、旦那様方のお心掛けは又格別でござりますな。わたくしどもは話を聴くさへもぞつとする幽霊や人魂も、おまへ様方にはよいお友達で、なにかまた面白い御淨瑠璃の御趣向になるかも知れませぬな。いや、實はその御淨瑠璃に就きました……。(すこし云ひ遊つてゐる。)

出雲。 淨瑠璃がどうした。

権四郎。 先日船のなかで御約束いたしました御淨瑠璃のことでござります。

出雲。 おゝ、船頭権四郎のことか。

権四郎。 はい、はい。その権四郎でござります。あの逆櫓とやらの御淨瑠璃はもうお出来になります。

出雲。 したでござりませうか。

権四郎。 (笑ひ出す)では、その催促に出かけて来たのか。

出雲。 (云ひにくさうに。)御催促と申すでもござりませぬが、御約束をいたしてから既う半月ばかりになりますので、どんな御様子か鳥渡うか、ひに出ましてござります。

権四郎。 いや、それはまだ出来ぬ。どうして、どうして出来るものでない。

出雲。 (失望したやうに。)まだ出来ませぬか。

権四郎。 このあひだも話した通り、わしは松洛と相談して、福島逆櫓の松を種にして新淨瑠璃を書きたいと思つてゐる。勿論、その逆櫓の件だけは趣向もおほかたは決まつてゐるが、それは三段目で、二段目や、四段目はまだなんにも工夫が付いて居らぬ。それを仕上げるのは先づ來年かな。

出雲。

権四郎。 來年……。そんなに御手間がかかるのでござりますか。

出雲。 その前にもまだ書かねばならぬものがある。それでこの間から夜も晝も苦しみにてゐると、そこへ又俄に忙がしい仕事が出来て、ゆうべも碌々に眠られなんだ。さういふ譯であるから、いくらお前が催促しても、右から左に逆櫓の方へは取りかゝられぬ。かう見えても、わしは忙がしい。苦しいほどに忙がしい體ぢや。

権四郎。 はい。

出雲。 しかし一旦約束した以上、逆櫓の淨瑠璃はきつと書く。たとひおまへが催促せずとも、わし達の方でも書かねばならぬ。まあ安心して待つてゐるやれ。

権四郎。 (不安らしく)では、どうでも來年になりますか。

出雲。 嘘はつかぬ。待つてくれ。そこで、権四郎。おまへの用はそれぎりか。

権四郎。 はい。

出雲。 では、一人でゆつくりと茶でも貰でも喫んでゆけ。わしは少し考へなければならぬことがある。

権四郎。 (出雲は茶道具を権四郎の前に持ち出し、自分は横向きになりて机のまへに坐り直す。権四郎は取

権四郎。

出雲。 したでござりませうか。

権四郎。 このあひだも話した通り、わしは松洛と相談して、福島逆櫓の松を種にして新淨瑠璃を書きたいと思つてゐる。勿論、その逆櫓の件だけは趣向もおほかたは決まつてゐるが、それは三段目で、二段目や、四段目はまだなんにも工夫が付いて居らぬ。それを仕上げるのは先づ來年かな。

権四郎。 その前にもまだ書かねばならぬものがある。それでこの間から夜も晝も苦しみにてゐると、そこへ又俄に忙がしい仕事が出来て、ゆうべも碌々に眠られなんだ。さういふ譯であるから、いくらお前が催促しても、右から左に逆櫓の方へは取りかゝられぬ。かう見えても、わしは忙がしい。苦しいほどに忙がしい體ぢや。

権四郎。 はい。

出雲。 しかし一旦約束した以上、逆櫓の淨瑠璃はきつと書く。たとひおまへが催促せずとも、わし達の方でも書かねばならぬ。まあ安心して待つてゐるやれ。

権四郎。 (不安らしく)では、どうでも來年になりますか。

出雲。 嘘はつかぬ。待つてくれ。そこで、権四郎。おまへの用はそれぎりか。

権四郎。 はい。

出雲。 では、一人でゆつくりと茶でも貰でも喫んでゆけ。わしは少し考へなければならぬことがある。

権四郎。

出雲。 (出雲は茶道具を権四郎の前に持ち出し、自分は横向きになりて机のまへに坐り直す。権四郎は取

りつく島もなく、だまつて眞をのんでゐる。出雲は草稿をよみながら机の上の人形を色々にならへ換へる。

出雲。(ひとり言) あゝ、これではどうもならぬ。はて、どうしたものか。えゝ、いつそこゝで殺してしまふかな。

権四郎。

え。

出雲。

(やはり獨り言) いや、殺すまい。こゝで殺しては紋切形ぢや。どうも新しい工夫が見えぬ。(又かんがへる) さりとて、所詮生かしては置かれぬ。やつぱり思ひ切つてこゝで殺すかな。いや、殺されぬ。殺さうか。(考へる) えゝ、どうしたら……。

(出雲は焦れて、一つの人形を縁側に叩きつける。権四郎はびつくりして起ちあがれば、出雲も起つて縁側をあるき始める。)

出雲。

(ひとり言) どうしてもこゝで殺すか。(強い聲で) さうぢや、殺すなら鬨殺しぢや。すたくに斬り苛んで……。いや、それとも一と思ひにばつさり遣るかな。(持つたる扇にて斬る眞似をする。)

(権四郎は縁側におきたる眞入を竊と取つて、だん／＼に遠退きながら、呆れたやうに眺めてゐる)

出雲。

(ひとり言) それとも突くな。(扇にて突く眞似をする) 脇腹を蒸ぐるかな。喉をつくかな。むゝ、ひとりは先づ突き殺して置いて、あとは手あたり次第にばた／＼斬り倒すか。

(出雲は扇をふりながら縁側をあるく中に、おもはず間伽桶を蹴倒す。権四郎はい／＼呆氣にとられてだん／＼に遠退き、やがて狐鼠々と逃げ出してゆく。出雲はそれに氣もつかず、再び机のまへに坐りて、いそがしさうに草稿に筆を入れはじめ。下のかたより三好松洛は先に立ち、小出雲もつゞいて入り来る。)

小出雲。

松洛先生が見えました。

出雲。

(見かへる) おゝ、松洛。さつきから待つてゐたのぢや。

松洛。

今そこで船頭の権四郎に逢うたら、座元の旦那様は氣が狂うたかも知れぬと云うてゐたぞ。又いつもの癖をはじめたな。はゝゝゝゝゝゝ。

出雲。

権四郎はおどろいて歸つたか。はゝゝゝゝゝゝ。

松洛。

(松洛と小出雲は座敷に上がり、松洛は門左衛門の書像に禮拜して座に着く。)

新淨瑠璃が出来るさうぢやな。

出雲。

曾根崎の五人斬をどうでも秋狂言に仕組んでみたいと思ふが、よい工夫はあるまいかな。

松洛。

それは面白からう。下手人は薩摩の侍ぢやさうな。今も途中で息子どのから大略を聴いたが、この間われくの船へたづねて来た侍がそれぢやと云ふではないか。

出雲。

さうぢや。薩州の藏屋敷の米方與力で早田八右衛門といふのぢや。

松洛。

その八右衛門に斬られたのは、櫻風呂の菊野と大和屋の亭主十兵衛と女房おとめ、ほかに

出雲。

女中ふたり、あはせて五人ぢやな。どれも皆死んだか。

松洛。

む、ひとりも助からぬ。

出雲。

(瀬をしかめる) 酷いことをしたものぢや。その晩、こなたも新地へ入込んで大和屋に居あ

松洛。

はせたと云ふではないか。あぶないことであつたな。

出雲。

しかもその八右衛門にも逢ひ、菊野にも逢ひ、女房にも女中にも逢うたのぢや。亭主だけは其時留守であつたが、わしが歸るとやがて引き違へに戻つて来たので、これも運悪く一

松洛。

緒に斬られてしまつた。

出雲。

(この對話のうちに、小出雲は松洛に茶をすゝめ、自分は末座に控へて聴いてゐる。)

松洛。

寢込みへ押込んで、一つ蚊帳のなかに寢てゐる女郎と夫婦を片端から斬つたのぢやと云ふ

出雲。

が、なぜ罪もない女中共まで殺したかな。

松洛。

一途に取りのほせて、誰彼なしに斬つて見たくなつたのであらう。

出雲。

さうかも知れぬ。つまり血に酔うたのぢやな。

松洛。

(松洛はかんがへてゐる。下のかたより錢屋善次郎はすこし取亂したる姿にて足早に入り来る。あ

善次郎。

とより櫻風呂の女中おきよが不安らしく附いてくる。)

善次郎。

(興奮したるやうに。) 失禮ながらおたづね申します。こちらは竹本座の座元さんのお住居で

小出雲。

ござりますか。

善次郎。

(縁に出る) はい。左様でござります。お、おまへ様はたしか錢屋の……。

松洛。

はい。錢屋善次郎でござります。

善次郎。

(見かへる) お、錢屋のどら息子か。この間おれに憎て口いうた報いは観面で、おのれが

出雲。

大事がつてゐた櫻風呂の女郎は薩摩の侍に斬られたぞよ。

善次郎。

(口早に) それで願ひに出たのでござります。先日の失禮は幾重にもお詫を申します。こ

出雲。

の通りでござります。(縁に手をつく) 先づお手をおあけなされ。して、わたしに何か御用でござりますか。

薩摩櫛

善次郎。

はい、はい。(縁に腰をかける。)今日はその菊野の初七日でござります。それで……。(おきよを指さす。)櫻風呂の女中に案内して貰ひまして、そつと菊野の墓参りをいたしまして、その歸り路にこちらへおたづね申しました。と申すのは、ほかでもござりませぬ。今度の曾根崎の五人斬は近年にないこと、きつと操りに仕組まれるに相違ないと世間でも専ら噂をして居ります。

出雲。

世間ではもうそんな噂をして居りますか。(松洛と顔を見あはせて微笑む。)

善次郎。

つきましては、一日も早くその操りに仕組んで頂きたいのでござります。(はいよく興奮して。)お願ひでござります。あの薩摩の侍を思ひ切つて悪い奴に書いてくださりませ。まったく悪い奴でござります。憎い奴でござります。鋸引きにしても、逆磔にしても、飽き足らないほどの大悪人でござります。極悪悪人でござります。(涙を拭きながら。)もし、その晩のことはわたくしが好う存じてをります。丁度たなばた祭の晩でござりました。(すこし進み出る。)それをわたしも聴きたいのぢや。おちついてお話しなされ。その時、こなたは大和屋に泊りあはせてゐられたのか。

出雲。

(やはり口早に。)左様でござります。菊野とは前々からの約束がござりますので、背の口か

善次郎。

ら櫻風呂へ行つて一口飲んでをりましたが、いつまで待つても戻つてまゐりませぬので、わたくしはすぐに大和屋の方へまゐりますと、菊野は疾うに來てをりました。おまへは櫻風呂に待つてゐる筈ぢや。いや、すぐに大和屋の方へ來てゐる約束ぢやと、二人のあひだに鳥渡いさかひもござりましたが、それも仲直りが済みまして、やがて九つに近い頃に一旦二階に臥せりましたが、そこで又少しいさかひがござりまして、わたくしは腹立ちまぎれに、え、もう歸れ歸れと申しますと、女の方でも、あい戻りますと云うて二階を降りて行きましたが、もう夜が更けてをりますので表へ出た様子がござりませぬ。下座敷に釣つてある蚊帳のなかへ這入つて、大和屋の女房と一緒に寐てしまつたやうでござりました。

(出雲は机の上の人形を把つて、膝のまへに列べながら聴く。)

出雲。

では、大和屋の亭主と女房と菊野とが一つ蚊帳に寐てゐたのでござるな。(人形を三つならべる。)して。こなたは矢はり二階にござりましたか。

善次郎。

はい、なにぶん夜が更けてをりますので今更歸るにも歸られず、そのまゝ一人で臥せつてをりましたが、癪が立つて眠られぬので、唯まじくとして居りますと、やがて下座敷の

方できやつといふ聲がきこえました。それも一度ならず二度も三度もつゞけて聞きましたので、どうしたことかと竊と這ひ起きて、梯子のあがり口から覗きますと、袴を穿いた一人の侍らしい男が血刀を持つて廊下に突つ立つてゐるのが、掛行燈の火ではつきりと見えませんでしたので、わたくしはびつくりして胴震ひが致しました。物取りか意趣斬か、なんにしても見付けられては大變ぢやと思ひまして、顫へながらそこらを這ひまはつて、やうやうのことで押入れのなかへ潛り込んで、息を殺して小さくなつてをりましたが、あとで聞きますと、あの晩二階に泊りあはせてをりました他の客や女郎達も、みんなこの騒ぎにおどろきまして、押入れに隠れたのもあり、窓から屋根づたひに逃げたのもあり、櫻風呂の湊といふ女は屋根から飛び損じて左の足を挫いたとか申します。

松 洛

善次郎

それで、その侍はどうしたな。どうしたか存じませぬ。下の物音が鎮まりましたも、わたくしはまだ怖ろしさが止まないので、いつまでも押入れの中に竦んでをりますと、やがて近所の人達があつまつて來たらしいので、初めてほつとして二階から怖々降りてみますと、下座敷には菊野と大和屋の夫婦、女中部屋にはおすぎとおかつの二人が、みんな蚊帳越しに突き殺されてをりました。

おきよ

白い寝衣も青い蚊帳も一面の血まぶれ……。なう、おきよ

(今でも悴えてゐるやうに) はい、はい。その知らせを聞きまして、わたくし共もすぐに駆けつけましたが、それはそれは酷たらしいこと、とても二目とは見られませなんだ。

出 雲

さうであつたらうなう。いや、判つた。(善次郎にも) 判りました。かういふ時には、世間では尾緒をつけて色々に云ひ觸らすので、どこまでが本當やら嘘やら判らぬもの。その晩そこに居合せたこなたのお話がなにより確かぢや、勿論ありのまゝを淨瑠璃に仕組めるものではござらぬが、本當のことを知つてゐて嘘をかく。それが我々の祕事でござる。よう教へに來てくださった。ありがたうござります。

善次郎

では、いよく淨瑠璃に書いて下さりますか。わたくしからも改めてお禮を申します。ありがたうござります。くれぐれもお願ひ申しまするのは薩州の侍の奴、悪人も悪人、大悪人の極悪悪人にお書きくださりませ。

松 洛

(冷笑ふ) 薩州の侍も悪く書くが、そのときに女を見殺しにして、二階の押入れに隠れてるたとかいふ奴も、決してよくは書かぬぞよ。さう思つておるやれ。

善次郎

もうかうなれば、わたくしのことなどは極道ともども息子とも何とお書きなされても構ひ

ませぬ。唯あの八右衛門といふ侍を、人でなしの大悪人にさへお書きくだされば、それでわたくしの胸が晴れるのでござります。〔泣く。〕菊野も屹と浮ばれませう。どうぞお願い申します。

出雲。

〔うなづく。〕判りました。わかりました。どんなものが出来るか、いづれ御覽になれば判ります。この矢先にあまり其處らをうろくしてゐられては、こなたのお爲にもならぬ。まつすぐにお店へお戻りなされ。これ、櫻風呂の女中どの。

おきよ。

はい、はい。

出雲。

氣をつけてお連れ申すがよいぞ。

おきよ。

かしこまりました。さあ、善次郎様。御用が済みましたらお暇をなされませ。

〔おきよに袖をひかれて、善次郎は力なげに立ちあがる。〕

善次郎。

ほんに思へば先度の芝居歸りに、どこやらから鬼灯が流れて来て……。

松洛。

まだそれをいふか。

善次郎。

いえ、決しておまへ様に申すのではござりませぬが、そのほゞづきに首がないと云うて、菊野がひどく氣に病んでをりましたが、今更おもへば……。〔嘆息する。〕

おきよ。

ほんにあれが悪いしらせであつたのかも知れませぬな。

松洛。

首のない鬼灯、それもなんぞの種に使うてやるわ。

善次郎。

なにぶんとともにお願い申します。〔一同に會釋して行きかゝる。〕

出雲。

これ、これ。〔呼び止める。〕しかし今度の五人斬を竹本で取仕組むといふことは、かならず他言してくださるな。櫻風呂の女中どのにも頼みましたぞ。

おきよ。

はい、はい。

〔善次郎はまた何か云ひたさうに躊躇してゐるを、おきよは促して門の外へ連れてゆく。出雲は起つて縁端まで見送り、そのまゝ縁に腰をかける。〕

出雲。

さあ、これで片附いた。すぐに相談に取りかゝらねばならぬ。〔小出雲に。〕おつるに申付け

松洛。

けふは飲むまいと思つてゐたが、やはり少しは飲んだ方がよい智慧が出るかな。

小出雲。

すぐに支度をいたさせます。

〔小出雲は奥に入る。〕

出雲。

お身も知つてゐる通り、文耕堂は生憎に病氣ぢや。ほかに相談する人もないので、ゆうべ

はわし一人て夜あかし同様、けふも朝から人形をならべてゐるが、どうも思ふやうに段取りが付かぬ。

勿論、三段物であらうな。

さうぢや。相手が薩摩の侍ぢやで、門左衛門の薩摩歌に因んで、男はやはり源五兵衛、斬られた女はおまん。いや、小萬といふことにしたら何うであらうな。

薩摩の侍が源五兵衛、斬られた女が小萬、成程それもよからう。して、その外題は……。

それに困つてゐる。  
いつそ薩摩櫛と据ゑてはどうぢや。させくと云うてもあらい薩摩櫛、あの流行唄は八右衛門のことを歌うたのぢやと云ふではないか。

なるほど、その流行唄を外題にして薩摩櫛……それも面白いかも知れぬ。ところで、いつも云ふやうぢやが、門左衛門どのが亡い後はどうも世話淨瑠璃に當り作がすくない。際物とはいひながら、今度は久振りの世話物ぢやで、みつちりと腕に擦りをかけて豊竹は勿論、歌舞伎の芝居どもにも眼に物見せてやりたい。お身と文耕堂がこの春に書いた「御所櫻」——あれも當るには當つたが、なにぶんにも近年の歌舞伎にはかなはぬ。早い話が、

出雲。

松洛。

出雲。

松洛。

出雲。

松洛。

この頃の残暑にも怯けずに歌舞伎は毎日興行してゐるが、あやつりの方は竹本も豊竹も畠中とはみな休みぢや。それだけでも世間の人氣が知るゝでないか。なう、松洛。なんとかして既う一度、門左衛門の全盛時代に盛返したいとは思はぬか。

それを改めて云ふことか。歌舞伎が年々繁昌するのを見るにつけて、太夫や人形つかひまでが兎かくに門左衛門どの存生の時代が戀しい懐しいといふ。それを聴きたびに膽が煎れてならぬ。おれは病人の脈をみることは上手でないかも知れぬが、淨瑠璃の筆を執つては覺えがある。なんの、歌舞伎の奴等が……。今に大坂中の見物をあやつりに吸ひよせて、歌舞伎などは有れども無きがごとくにして見せるわ。それにつけても、今度の新淨瑠璃は大事ぢやな。

松洛。

出雲。

まつたく大事ぢや。精一ばいに腕を揮つてくれ。なにぶんにも文耕堂は病中ぢやで、上の巻は俸めに書かせて、わしが下の巻をかく。お身は中の巻をひき受けて、播磨掾の語り場を思ふ存分に書いてくれ。小萬の親父の役をこしらへて、その老役と小萬の女形とを文三郎に使はせてみたいが、どうであらう。

松洛。

む、それもよからう。して、あらましの筋は立つたか。

薩摩櫛



出雲。

俄作りぢやで、どうも氣に入らぬところが多い。まあ、見てくれ。

(出雲は座敷に上がりて、机の上の草稿をとりて松洛に見せる。松洛はうけ取りて無言で讀む。奥より小出雲は先に立ち、おつるは酒肴などを運び出す。)

小出雲。

どうも遅くなりました。

松洛。

まあ、そこへ置いてくれ。(やはり草稿をよんでゐる。)

出雲。

(おつるに。)まあ、さうして置け。

小出雲。

(おつるは茶道具を片付け、會釋して奥に入る。)

出雲。

(出雲に。)もう筋立はきまりましたか。

小出雲。

まだほんたうには決まらぬ。(考へる。)八右衛門がどうして菊野を殺すことにするかな。

出雲。

菊野は薩摩の侍を嫌ひ抜いてゐたと云ふではござりませぬか。

小出雲。

いや、ほんたうは然うぢやが、淨瑠璃ではその上に何とか工夫せねばなるまい。

松洛。

さうでござりませうかな。

出雲。

(よみながら扇にて膝を打つ。)む、面白い、面白い。これなら人形が立派に働かれる。文三郎の使ひ振りが今から眼に見ゆるやうぢやよ。

出雲。

(疑ふやうに。)面白いか。

松洛。

おれが受持の世話場はなかく骨が折れさうぢや。しかし面白い。おやぢの役も生きてゐる。

出雲。

しかし下の巻の殺し場がまだほんたうに固まつて居らぬ。やはり道行を付けるかな。

松洛。

その方が派手にはなるな。どつちにしても、女を殺すまでの運びがまだ十分に行きとゞいて居らぬやうぢや……。(考へる。)尤もこゝはお身の受持ぢやで、いよく筆を執るまでに

又なにか工夫してみるがよからう。兎も角もこれであらましの屋臺骨は出來た。そのほかの造作はめいゝ腕次第といふものぢや。

(松洛は草稿を戻せば、出雲はうけ取りて、又もや繰返して讀む。)

小出雲。

(覗きながら。)わたくしの持場はむづかしさうでござりますか。

出雲。

いつもの上の巻より少し込み入つてゐる。人形が随分澤山にならぶぞ。

松洛。

どうしてなかくむづかしい。息子どのにはよい修業ぢや。

(松洛は笑ひながら杯を把る。小出雲は酌をする。)

出雲。

(松洛に。)下の巻は兎もかくも、上と中とは全くこれでよからうかな。(不安らしく。)正直に

薩摩

云うてくれ。

松 洛。それでよい。確かによい。それだけに骨組を作るのは並大抵のことではあるまい。息子殿の話では、ゆうべは碌々眠らなかつたと云ふが、なるほど今日は顔の色がよくないやうぢやな。

出 雲。頼頼がすこし痛んでならぬ。(額をおさへる。)

松 洛。まつたく氣を痛める。からだを痛める。苦しい商賣ぢやな。(さかづきを出雲に獻す。)

出 雲。いや、飲むまい。まだもう少し考へねばならぬ。(小出雲に。)おれは庭をあるいて来る。お

まへは松洛さんのお相手をしる。

小出雲。頭はよほどお痛みになりますか。

出 雲。なに、それほどでもない。さあ、お酌をしてあげい。

(云ひすて、出雲は庭に降り、上のかたの四つ目垣のあたりを徘徊す。きりぎりすの聲きこゆ。松洛は小出雲に酌をさせて飲んでゐる。出雲は秋草の花を折つてちつと眺めながら考へてゐるが、やがて其花を引きむしりて捨てる。)

松 洛。(小聲で。)大將、しきりに焦れてゐるな。

小出雲。(うなづく。)さうと見えます。

(出雲は更に他の花を折りて、殆ど無意識に打ち振りながら徘徊してゐる。下のかたより竹田近江は先に立ち、米津作之進と寺山半五郎は笠をかぶりて出づ。)

近 江。弟の宅はこれでござります。おかまひなくお這入りくださりませ。

(米津はうなづきて入り来る。出雲は空を仰いで考へながら下の方へあゆみ来り、思はず近江に突き當らうとする。)

近 江。これ、どうした。は、あ、又いつもの工夫最中か。これ、お客人を御案内申して来たぞ。

出 雲。(心づく。)いや、これは失禮。(米津に。)見苦しいところでござりますが、どうぞお通りくだ

さりませ。

米 津。(笠をぬぐ。)御めんください。

出 雲。お、おまへ様は……。

米 津。お、先夜曾根崎で出逢うたはお身であつたな。

(寺山も笠をぬいで出雲に會釋する。それを見て松洛は小出雲に眼くばせし、ふたりは酒肴を持ち運びて奥に入る。出雲は机などを片寄せて、近江等三人を座敷に請じ入れる。)

近江。

(米津に。)これが弟の出雲でござります。 (出雲に。)こなたは薩州の御藏屋敷に御在番の米津作之進様と寺山半五郎様ぢや。

出雲。

先夜は失禮。唯今あらためて御挨拶を仕つります。わたくしは竹田出雲、どなたもお見識り置きをねがひます。

寺山。

お身が高名のあやつり作者といふことは我々もかねて聞き及んでをる。兄は機關師、弟はあやつり作者、兄弟揃うて當代の名人と呼ばれる、は名譽のことでござるな。

出雲。

恐れ入つてござります。先夜かしこに居あはせられたら、大抵のことは御存じでもござらうが、近ごろ面目次第も

米津。

なき早田八右衛門が今度の不始末、いかに可笑ひくだされても我々一言もござらぬ。まことに藩中の面汚し、當藏屋敷に詰めをる面々も世間の手前を遠慮して、白晝はめつたに外

出雲。

出もならぬ次第。お察しください。皆様方の御迷惑、いくへにもお察し申します。うけたまはりますれば早田様は翌朝お召捕りに相成つたとか申します。まかつたく左様でござりますか。

出雲。

(嘆息して。)ぢやに因つていよく面目ない。あれほどの椿事を仕出して、せめては薩摩の

米津。

武士らしく、其場でいさぎよく切腹でもすることか、安治川口より小舟に乘込み、沖の元船へ逃げ隠れようとするところを、追手の早船に追ひ付かれて縄目の恥辱。その落着はいまだ相判らねど、おほかたは死罪の上に獄門、この千日前に見苦しい死首を晒さるゝのでござらう。

(米津はかされて嘆息する。出雲も氣の毒さうに聴いてゐる。奥よりおつるは茶を持って出で、近江等三人にすゝめ、會釋して去る。)

近江。

そこで、今日このお二人がわしのところへお越しなされて、折入つての御相談といふのは外でもない。なにしろ近年めづらしい騒ぎである上に、場所は曾根崎、男はお武家、女は櫻風呂の抱女といふのぢやから、これはどうしても歌舞伎か淨瑠璃物ぢや。この秋にはどこかで屹と興行さるゝであらう。左なきだに今度のことに就ては藏屋敷の方々も世間を憚り、今もあなたが云はれたやうに、晝間は表へ出るのも差控へてゐらるゝやうな始末。それを歌舞伎や淨瑠璃にかけられては、又ぞろ世間の評判になつて、申さば恥の上塗りでお屋敷の衆はいよく御迷惑、大きくいへば薩州の御家の名前にも瑕がつく。皆様もそれを御心配なされて、なんとかなるまいかといふ御相談ぢや。

米津。

(出雲は黙してゐる、米津は一膝すゝみ出づ。)

右の次第で重役の面々も胸を痛め、これは諸方へ手をまはして、なんとか興行を見合せてくる、やうに頼み入るより外はあるまい。幸ひにこの近江掾には時計のお繕ひを頼んだ縁もあり、しかもお身とは兄弟ちやと云へば、竹本座への掛合はこれに絶つて頼むが上分別と、重役衆の内意をうけて、われ／＼どもが今日近江掾の住居をたづね、迷惑がるのを無理にさそひ出して、かうして押掛けてまるつたのでござる。

寺山。

おたのみの仔細は唯今近江掾が云はれた通りで、なにぶんにも屋敷の名前にもかゝはる次第、そこを幾重にも御推察くだされて、早田八右衛門の一條を竹本座の操りに取仕組むこと、なにとぞ御見あはせくださるまいか。藏屋敷の者一同に代つて、われ／＼兩人が手をさけておたのみ申す。

出雲。

いかにも御推量の通り、曾根崎の五人斬は大坂中に隠れもないこと。わたくしの方でも是非とも操りに取仕組んでみたいと存じまして、きのふも今日も頻りに工夫を凝してゐるところでござります。勿論、むかしとは違ひますので、あからさまに早田様のお名前は出しませぬ。殺された者もみな替名にいたす筈でござりますが、それでもお屋敷の御迷惑に相

米津。

成りませうか。

(考へる。)なるほど變名とあれば一應は差支へないやうなもの、誰が眼にもすぐにそれと覺らるゝやうでは、やはり迷惑はおなじこと。なう、寺山、さうではあるまいか。

寺山。

さあ、(これも考へる。)たとひ何といふ替名を用ゐても、この矢先におなじやうな筋立の淨瑠璃を作られては、世間でもすぐに覺るであらう。又それを覺られぬやうでは、折角興行しても詮ない道理ぢや。して、その新淨瑠璃といふのは、いよく興行することに決つたのでござるな。

出雲。

(はつきりと。)決つてをります。筋立もあらまはしは纏まりまして、明日からでも早速に書きはじめ積りでござります。外題は薩摩櫛、上中下三段、上の巻は伴の小出雲、中の巻は三好松洛、下の巻はわたくしが受持ちまして、未熟ながらも十分に腕をふるひ、この秋興行には道頓堀に一と花咲かせたいと存じてをります。皆様は御存じもござりますまいが、近松門左衛門のない後は、あやつりも兎かくに羨み勝で、やゝもすれば歌舞伎に壓されかかつてをりますれば、これを機に人氣を呼び返して、再びむかしの繁昌に引き戻さねばなりません。竹本座の座元としても、操りの作者としても、竹田出雲は今が一生懸命の時節

でござります。いづれも様のお頼み、兄の口添へでも、この儀は何分にも……。

米津。

出雲。

近江。

折角ではござりますか、何分よい御返事を申上げかねます。

いや、それも道理ぢや、おまへの迷惑も萬々察してゐる。それぢやに因つて、わしも一旦はお断り申したのぢやが、皆様が折入つてのお頼みといひ、今一つには、よくよく考へてみると、今度のことにはこの近江掾もまんざら係り合がないとは云はれぬ。薩州様からおあつらへのお時計を御約束通りに仕上げたら、早田様も五月のお船で無事に戻られて、こんな騒動は起らなかつたかも知れぬ。わしの御細工が延引したために、早田様の御歸國も延引、さうして今度のやうな事になつたかと思ふと、わしも御屋敷に對してなんだか申譯のないやうな氣がしてならぬ。いや、御屋敷ばかりでない。早田様にも、殺された人達にも、又は世間に對しても、申譯のないやうな氣がするのぢや。旁々わしもお前にたのむ。どうぞお二人の頼みをきいて、その新淨瑠璃を手摺にかけることは思ひ止まつてはくれまいか。

(出雲はやはり黙してゐる。)

米津。

折角取仕組まうとした新淨瑠璃を今更見あはせるとあつては、そちらの御迷惑も重々お察し申す。ついでには常方より二百兩三百兩の内濟金は差出しても苦しいござらぬ。それでも矢はり御不承知かな。

出雲。

わたくしも操り芝居の座元でござりますれば、商賣冥利として金銀は大切、二百兩三百兩の大金をありがたく頂戴いたしたうはござりまするが、それは所詮一時のことで、竹本座の盛衰には換へられませぬ。まして淨瑠璃作者としての竹田出雲が一旦書かうと思ひ立ちましたるものを、金銀づくで思ひとまる譯にはまゐりませぬ。

近江。

寺山。

(困つたやうに。)さう云はれると強てとも云ひにくいが……。皆様、如何でござります。いや、ならぬ。どうでも背いて貰はねば、我々どもが屋敷へ立戻つて重役達にあはす顔がない。(出雲に。)これはお身にばかり頼むのでない。歌舞伎は勿論、豊竹の操りへも手をまはして、皆それづくに頼んで居るのぢや。

出雲。

米津。

して、歌舞伎や豊竹では素直に承知いたしましたか。それは他の者どもが掛合に出向いて居るので、われ々にはまだ何ともわからぬが、先方も商賣、所詮は金銀づくで納得するであらうと存じてをる。とりわけてお身はこの近江掾

と兄弟の因みもありながら、飽までも不得心を云ひ張るは、あまりに聞き分けがないと申すものぢや。(少しく形をあらためて。)但しはなにかの意趣があつて、どうでも薩摩の屋敷に恥辱をあたへたいか。

決して左様な次第では……。

出雲。この使を仕損じて、われづくに腹を切らせたいか。

米津。飛んでもないことを仰しやりますな。

出雲。え、面倒な。得か不得心か、今一度たしかに申せ。(思はず刀をひきよせる。)

近江。(米津の刀をおさへる。)もし、早田様の二の舞をなされますな。

寺山。急いてはならぬ。まあ、侍て。

米津。む、(出雲を睨みながら躊躇する。)

近江。弟めにはわたくしから改めて理解を加へまして、なんとか得心致させますれば、先づ先づ御料簡くださりませ。

米津。屹と得心させてくるゝか。

近江。承知いたしました。何事もわたくしにお任せなされて、今日はこのまゝお引取りなされま

米津。

寺山。

出雲。

近江。

松洛。

小出雲。

せ。かならず悪いやうには致しませぬ。

では、萬事よろしくお身に頼むぞ。出雲にも今一度かんがへ直して貰ひたい。(詞をやはらげて。)不意に押掛けてまるつて邪魔をいたした。

無禮はゆるしておくりやれ。

わたくしこそ失禮御免。

さあ、まゐりませう。

(近江はふたりを促して立去る。出雲は縁を降りて見送る。奥の襖をあけて三好松洛は酒に酔ひたる體にて出づ。あとより小出雲は支へながら出づ。)

え、大名がなんぢや、西國一の名がなんぢや。(縁に出て罵る。)

この大坂は町人の世界ぢやぞ。吹けば飛ぶやうな藏屋敷一つ持つてゐればとて、大名風を吹かすなよ。おのれら

のために生きてゐる操りでない。書かうが書くまいがおれの勝手ぢや。餘計な世話を焼き

居るな。

はて、もう、よろしうござります。

(出雲は無言にて引返し、縁に立つたる松洛と顔を見あはせる。)

松洛 止めるか。

出雲 (しづかに。)やめたくないな。

松洛 書くか。

出雲 兄には氣の毒ぢやが……。書かねばなるまい。

松洛 (愉快らしく笑ふ。)それで安心した。大名に嚇されて筆を捨てるやうな俺達でない。(小出雲に。)さあ、あの酒をこつちへ運ばせてくれ。

小出雲 はい、はい。(奥に入る。)

松洛 さあ、さう決まつたらすぐにも書きたい。家へ歸ると、また病家の迎ひなどが煩さい。い

出雲 つそ泊り込みでこゝで書くかな。

(微笑みながら。)それがよからう。相談相手は傍にゐてくれた方がよい。

松洛 (小出雲とおつるは以前の酒肴を運び出して来る。)

さつきから奥で飲んでゐるだが、まだ飲み足らぬ。あんな掛合を聴かされて、酒の酔も醒めてしまつた。ばか／＼しい。

(松洛はおつるの酌で飲みはじめ。出雲は縁に腰をかけて空をながめる。)

出雲 もう日が暮れるな。

松洛 こゝらはまだ蚊いぶしをせねばなるまいな。

小出雲 墓場が近いので蚊蚊がおびたゞしうござります。(おつるに。)もう蚊いぶしの支度をしたら

何うぢや。

おつる。 はい、はい。(奥に入る。)

(下の方より竹本座の手代萬吉いそぎ出づ。)

萬吉 御めんなされませ。

出雲 おゝ、萬吉か。あわたゞしく何しに來た。

萬吉 旦那様。先刻御奉行所からお召出しがござりましたので、とりあへず出頭いたしますと、

このあひだの曾根崎の五人斬、あれは時節柄どうも穩かでないに因つて、歌舞伎あやつりのたぐひに取仕組むことは一切見合せよといふ御内達でござりました。

出雲 なに、曾根崎の五人斬を取仕組んでは相成らぬと……。町奉行所から内達があつたか。

萬吉 はい。それで早速おしらせにまゐりました。

松洛 では、町奉行所から差止められたか。やはり薩州家への遠慮であらうな。これは困つた。

薩摩 楠

(縁に出る。)これ、どうする。

出雲。 どうすると云うて、泣く子と地頭ぢや。奉行所の沙汰ではどうにもなるまい。

松洛。(舌打ちして。)どうにもなるまいな。

萬吉。 なにしる御奉行所の御指圖では……残念ながら致方がござりますまい。

松洛。 残念ぢや。(持つたる扇を縁になげ付ける。)え、もう勝手にせい。

(松洛は元の座に戻りてあぐらをかき、自棄に酒を呷つてゐる。)

萬吉。(出雲の顔色をうかがひながら。)では、もう戻りましても宜しうござりますか。

出雲。 む、。 歸れ、歸れ。

萬吉。 皆様、御めんどさりませ。

(萬吉は早々に立去る。)

小出雲。 折角これまで出来あがりましたに、残念でござりますな。

(松洛は答へず、むやみに酒を飲んでゐる。奥よりおつるは蚊いぶしを持ちて出づ。)

出雲。(軒を仰ぐ。)その燈籠にも灯を入れてくれ。

おつる。 はい、はい、燈籠を把りて奥に入る。)

小出雲。 日が暮れたので、蚊が大分出てまゐりました。

(松洛の扇を拾ひて渡せば、松洛はそれを開きてばさばさくと煽ぎ立てる。)

松洛。 あゝ、うるさい蚊蚊ぢやな。

出雲。(考へながら。)まつたくうるさいな。

松洛。 うるさい、うるさい。(無暗に煽ぐ。)なぜかう煩さいかなう。

(奥よりおつるは燈籠に灯を入れて持つて出づ。)

出雲。 こつちへくれ。(燈籠をうけ取つて、誰に云ふとも無しに。)少しそこら歩いてくる。

(叩き鉢の音、蟲の聲。出雲は燈籠をさげて門の外へふらふらと出てゆく。)

(11)

千日寺の亂塔場。すこし下の方に「戒名嵐雪月照」と彫りたる美濃屋三勝の墓あり。墓の前には消え残りたる線香の煙ほの白くみゆ。墓の上には小さき松が枝を差しかけたり。そこらには古き石塔、



卒堵婆など澤山ありて、櫻や桐の立木あり。秋草もおどろに亂れたり。

(矢張り鉦の音、蟲の聲。下のかたより竹田出雲は盆燈籠を持ちて、迷ふがごとくに歩み出で、石塔のあひだを殆ど無意識に縫うてゆく。やがてそこらを一とめぐりして三勝の墓のまへに來り、持つたる燈籠を松の下枝にかけ、傍の石塔に倚りかゝりながら、見るとも無しにその灯をながめてゐる。上のかたより竹田近江出で、そこらを通しみて出雲のそばに近寄る。)

近江。

出雲。そこにもたか。

出雲。

(冷かに。)兄者、またお出でか。

近江。

さつきは無理を云うて氣の毒であつたな。

出雲。

(やはり冷かに。)今となつては無理も道理ももうござらぬ。町奉行所からの内達で、あの淨瑠璃はどの道書かれぬことになつてしまひました。

近江。

町奉行所から差止められたか。實はもう一度相談してみようと思つて、かうして引返して來たのぢやが、それでは何にも云ふことはない。よんどころない義理詰といひ、自分もか

かり合のあることぢやで、あゝして無理をたのみに來たが、あれを云ひ出すにはわしも實に辛かつた。思ひやりのない兄ぢやと怨んでくれるな。あらためて詫をいふ。堪忍してくれ。

出雲。

(すこしく色を和げる。)いや、あらためてその御挨拶には及びませぬ。あの時おまへ様

近江。

めて下さらずば、氣の短いお武家に斬られてたかも知れませぬ。(微笑む。)

(同じく微笑む。)まさかに斬りもすまいが、あの衆のことぢやで何とも云へぬな。それよりもわしが氣にかけてゐたのは、今夜引返して頼みに來て、お前がどうか折れてくれ、ば可し、飽までも背かぬと云ひ張れば、自然の詞のゆきがかりで兄弟喧嘩もせにやならぬ。

それが一つの苦勞であつたが、奉行所からの御沙汰とあれば既う何うにもならぬことで、お前には萬々氣の毒ぢやが、わしの胸も軽うなつた。と云うたら、又思ひやりがないと怨まれうが、わしとてもお前の心持はよう知つてゐる、判つてゐる。くどいやうぢやが、かならず悪う思つてくれるな。

出雲。

よんどころない義理詰から、おまへ様が心にもない無理をお頼みなされたことは、わたくしも好う察してをります。萬一あのことで兄弟喧嘩を致さうとも、それは一時のことで、いつまでも根に持つてゐるよう筈はござりませぬ。御覽なされ。こゝはおまへ様とわたくしとが子供の時に隠れん坊などをして遊んだところでござります。

近江。 さうぢや。(あたりを見る。)千日寺などへ行つて遊んではならぬと、親達からたび／＼叱られながら、石塔のかけで隠れん坊をしたり、草の中できり／＼すなどを捕つてあるいたものぢや。

出雲。 そのときの兄弟が今も斯うして向ひ合つてゐるのでござります。おやぢ様も死際に兄弟ふたりを枕もとへお呼びなされて、いつまでも仲好うせいと云はれました。

近江。 む。おやぢ様はわし達を可愛がつてくださった。おやぢ様はよいお人、偉いお人であつたな。

出雲。 まつたく偉いお人でござりました。廿歳のときに江戸に出て、なんでも一天下に名をあぐるほどの人間になりたいたいと、浅草の観世音に日参の途中、子供が砂を計つて遊んでゐるのに眼をつけて、はじめて砂時計といふものを發明なされました。それが京都までもきこえて近江掾を受領なされ、大坂へ戻つてからもだん／＼に工夫を積んで、後には日本一の機關師、日本一の御時計師といふ名譽の御仁になられたのでござります。

近江。 わしはその惣領に生まれたので、未熟ながらも親の職をついで二代目の竹田近江、弟のおまへは操りの座元に作者を兼ねて竹田出雲、親のひかりで兄弟ながら何うにか其名を知

出雲。 られてゐるものゝ、まだ／＼おやぢ様の足もとにも達かぬ。人間は死ぬまでが修業ぢや、せい／＼苦勞せねばならぬな。

それだわたくし、絶えず苦勞してをります。その矢先に今度のやうなことがござりますと、氣が狂ほしいほどに苛々してまゐります。折角工夫した新淨瑠璃がお差止めと聞きましたら、何うもぢつとしてはゐられぬやうな心持になりました、さつきからあの盆燈籠をさけたまゝで、幽霊のやうにこの墓場のなかを迷ひゐてをりました。が、かうしてお話をしてゐるうちに、だん／＼に魂もおちつきました。おやぢ様が砂時計や機關を發明なされた御苦勞をかんがへると、こんな弱いことではなりません。

近江。(うなづく。)さうぢや、さうぢや。

出雲。 わたくしは幾歳まで生きるか知れませぬが、まだ／＼書きたいものが澤山ござります。これから苦んで、苦み抜いて、たとひ近松門左衛門と肩をならべずとも、せめては其次に据ゑられるほどに出世したいと存じます。

近江。 それぢや。その心持を忘れてくれるな。

(月の光うす明るく、上のかたより三好松洛出づ。)

松洛。おゝ、兄弟揃うてこゝにゐたか。あまりに戻りが遅いので探しに出て来た。藪蚊の多いと

近江。ころにいつまで遊んでゐるのぢや。もう歸らぬか。

出雲。話に實が入つてつい遅うなりました。まったく藪蚊の多いところに長居はならぬ。(扇にて

松洛。拂ふ。)もう戻りませう。

出雲。松洛。

松洛。なんぢや。

出雲。曾根崎の五人斬は差止められても、もう悔むには及ばぬ。世話浄瑠璃は何かと世間が面倒

松洛。ぢや。これから精出して、やはり時代物を書かうよ。

出雲。むゝ。それもよからう。

松洛。権四郎と約束した逆櫓の松、あれも書かう。

出雲。いよく逆櫓に取りかゝるかな。

それから知盛の船幽霊、あれに吉野山の源九郎狐を取りあはせて書いてみたい。それからいつそやも相談した通り、梅松櫻を三人兄弟にして菅相丞を書いてみたい。赤穂浪人が吉良の屋敷討入も書いてみたい。そのうちの一つが當つても、われ／＼の名は末代、あや

つりの運も開くるといふものぢや。

松洛。

おれはさつきから武者苦者してならなんだが、それでやう／＼威勢が附いた。もう醫者な

出雲。

どは止めてもよい。これからが必死の戦場ぢや。さあ、家へ歸つて飲みながら攻めて相談

近江。

せう。かういふ時には自分でも不思議なほどにがい智慧が湧き出すものぢやぞ。

出雲。

むゝ、歸らう(ゆきかゝる。)

小出雲。

あの燈籠はどうするな。

出雲。

あれは御存じの三勝の墓ぢや。盆の供養にあのまゝ懸けて置きませうか。

近江。

(三人は燈籠をみかへる。上のかたより小出雲いそぎ出づ。)

小出雲。

もし、錢屋の息子が死んださうでござります。

出雲。

錢屋の息子が死んだか。

小出雲。

こゝから戻る途中で、櫻風田の女中の隙をみて、川へ身をなけたと云ふこととござります。

近江。

今こゝへ来る時に、身投げがあると騒いでゐたのは、あの錢屋の息子であつたか。

近江。いま／＼しい小二才ぢやと思つてゐるが、殺しては不便ぢや。

出雲 死ぬ者は死ぬ。生きてゐる者は働かねばなるまい。さあ、行かう。  
松洛 む。

（出雲は近江に先へゆけといふ。近江は松洛に會釋して先に立つ。つゞいて出雲、松洛、小出雲は上のかたへあゆみ去る。あと少時は叩き鉦の音、蟲の聲。盆燈籠は夜風にさびしく揺めく。）

幕

無  
禮  
講

大正十三年九月作。

大正十四年五月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——土岐藏人（市川壽美藏）伊吹又兵衛（市川左升）妻早

咲（河村菊枝）侍女ちか（小林延子）など。

登場人物——土岐藏人頼員。頼員の妻早咲。伊吹又兵衛。侍女ちか。ほかに齋藤の家來など。

後醍醐天皇の御宇、元徳元年九月なかばの夜。

京家の侍、土岐藏人頼員の屋敷。庭のあき草に露ふかく、月のひかり冴えたり。座敷には短檠をおく。

早咲。

（頼員の妻早咲、廿歳前後、縁にたちて月を仰ぐ。蟲の聲さびしくきこゆ。）

早咲。

（下のかたの樓戸をあけ、縁づたひにて侍女ちか薄絹をもちて出づ。）

ちか。

夜がふけました。お冷えなさるでござりませう。これをおかけなされませ。

早咲。

よう氣がついてくれました。ほんに夜がふけると、秋の寒さが水の様に肌にしみて来る。

無禮講

(ちかば早咲のうしろにまはりて、薄絹を被せかける。)

ちか。

九月も十三夜を過ぎますと、朝夕はめつきりと冷えてまゐります。

早咲。

まして夜ふけぢや。今夜ももう亥の刻を過ぎたであらう。(再び空を見る。)

ちか。

亥の刻は疾うに過ぎました。やがて清水の子の刻の鐘がきこえませう。殿はまだお歸りに

はなりませんまいか。

早咲。

さあ。(さびしげに考へる。)ゆうべは子の刻をすぎると、間もなく戻られたが……。今夜はど

うであらうか。

ちか。

一昨日の晩は夜のあける頃にやう／＼お歸りでござりました。

早咲。

ほんに一昨日の晩は今か今かと待ちわびて、たうとう一夜も睡らずに明かしてしまつた。

(ため息をつく。)今夜もそのやうなことが無ければよいが……。それも武士の務とあれば格別ぢやが、此頃のはさうでない。無禮講とかいふお催しに加はつて、夜毎夜ごとの酒宴遊興……。留守居する女房が夜露に袂をぬらしながら、かうして待ち暮してゐるとは御存じないか。

ちか。

ほんにこゝは端近で餘計に冷えませう。奥へお這入りなされませ。

ちか。

(早咲はだまつて月をながめてゐる。ちかはその袂をひく。)奥さま。(無理に内へ連れ込む。)一體あの無禮講とか申すのはいつまで續くことでござりませう。

早咲。

(さびしく笑ふ。)それはわからぬ。興のさめるまでは續くのであらう。公家衆でも侍でも、

さうじて男といふものは、家をわすれ、妻子をわすれて、酒宴遊興にうつゝを抜かしてゐるものぢや。

ちか。

殊にその無禮講とか申しますのは、普通の御酒宴などとは違ひまして、随分みだりがはし

いものぢやとか云ふ噂でござります。

早咲。

(あざけるやうに。)さうぢや。男は烏帽子をぬいで頭髻を放ち、法師は法衣をはいで白衣ひ

とつの姿となり、身分の高下もなく、禮儀も作法もなく、僧も俗も公家も侍も打ちまじつて、遊び戯れ舞ひ歌ふ。すべてが一通りの遊興を通り越して、ほと／＼狂亂にも近いか聞いてゐる。それも卑い地下の者どもならば知らず、公家では尹大納言どの、四條中納言どの、日野中納言どの、それらの方々をはじめとして、名ある殿上人が我先きにと寄りあつまつて斯くの始末。不行儀と云はうか、不しだらと申さうか。やがては上のお聞きにも

達して、どのやうな御咎めを受けようとも知れまいと、それもまた案じられてならぬ。(また起ちかける。) あゝ、殿はまだお戻りにならぬか。ちか。

ちか。はい。  
早 咲。やがて子の刻であらうと云うたな。  
ちか。左様でござります。

早 咲。かたぶくまでの月を見しかないと古歌のころも思ひ當つた。(再び起つて縁に出る。) 今夜の無禮講もまた曉方まで續くのではあるまいか。ちか、お前はもう休みや。

ちか。いえ、わたくしは……。  
早 咲。このやうに毎晩遅くなつては、誰も彼もみな疲れる。ほかの女子共にもみな休めと云や。  
ちか。して、おまへ様は……。  
早 咲。わたしは妻の役、夜のあけるまでも起きてゐて、夫の歸るを待たねばなりません。

ちか。では、わたくしも御一緒に……。  
早 咲。(じれる。) はて、くどい。早う行きやと云ふに……。  
ちか。はい。

早 咲。(ちかは丁寧に會釋して下のかたに立去る。) 肌が冷えて、つむりが痛む。夜露にうたれて風でも引いたのではあるまいか。

早 咲。(早咲はひとり言をいひながら、惱ましげに元の座に戻る。鐘の聲。) おゝ、あれが子の刻……。このごろの秋の夜は長い。夜のあけるまでには……。 (ため息をつく。)

ちか。(ちかは再び出づ。)  
奥さま。  
早 咲。(顔をあげる。) お歸りか。  
ちか。はい。

早 咲。(早咲はいそ／＼起つて、出で迎へようとするところへ、土岐藏人頼員、廿七八歳、酒に酔ひたる體、烏帽子を少しゆがめて被りしまゝ、奥の襖をあけて出づ。頼員はよき男にて、よき衣を着たり。)

頼員。

それぢや。ゆうべは早く外して歸つたので、今夜はどうでも逃さぬ。ひがしの白むまでは座を起たさぬと、大勢が無理にひき留むる。それを摺りぬけてやうく逃げて歸つて来た。あゝ、喉が渇く。(ちかに。) 白湯でも水でも一杯くれ。

(ちかは心得て立去る。)

早 咲。

では、餘の人々はまだ御酒宴でござりますか。

頼員。

長夜の宴ぢやとか云うて、夜もすがら飲み明かすのであらうよ。いゆがみし烏帽子を押し直しながら。(それに今夜は新しい趣向があつたので、人々も猶さら興に乗つてゐる。やうぢや。はムムムム。)

早 咲。

今夜はどのやうな面白いことがござりました。

頼員。

それはな。(笑ひながら少し躊躇してゐる。)

早 咲。

新しい御趣向とは、どのやうなことでござりました。

頼員。

それは……。まあ、聞きやれ。年のころは十七八の美しい女が廿人あまり、生絹の單衣ばかりを身につけて、一座のなかに入りまじり、酌をするやら、歌ふやら、舞ふやら、よれつ連れ、狂ひまはる……。

早 咲。

(あきれたやうに。) 若い女子……。美しい女子が、肌着も無しに……。生絹の單衣ばかりで……。肌寒いは扱措いて、それでは肌も乳房も透つて、恥かしいことではござりませぬか。

頼員。

(笑ふ。) 女には恥かしいことであらうが、男には興あることとみて、聖護院の玄基法眼ほどの聖すらも、太液の芙蓉新に水を出づるに異ならずと、手をうつて笑ひ囃された。

早 咲。

(いよゝく呆れる。) して、おまへ様はそれをなんと御覽なされた。

頼員。

なんと見たとは……。

早 咲。

(やゝ激して。) 若い女子にあられない、あか裸も同様の姿をさせて、それと一緒に狂ひまはる。おまへ様も他の人々とおなじやうに、そのやうな猥な淺ましい戯れに、うつゝを抜かしてゐられましたか。

頼員。

(やはり笑つてゐる。) おれを責むるな。おれが目論んだことではない。

早 咲。

たとひ誰の目論見でも、おなじ筈につらなつて、おなじく狂ひ興じてゐれば、おまへ様も一つ穴の貉とやらではござりませぬか。

頼員。

ひとつ穴の貉……。 (少しぎよつとして妻の顔をみる。)

早 咲。

(きつとなつて。) わたくし改めておねがひがござります。

無 禮 講



頼員。あらためて願ひとは……。

早 咲。おいとまを下さりませ。

頼員。(おどろいて坐り直す。) なに、暇をくれ……。では、この頼員を見かぎつて、里方へ戻るといふのか。

早 咲。

わたくしには六波羅の奉行齋藤太郎左衛門尉利行といふ立派な親がござります。

頼員。

それは云はずとも知れてゐる。その親の齋藤がわが子に暇取つて来いと教へたか。(やゝ不安らしく。) これ、確かに云へ。

早 咲。

いえ、父からはなんにも申しませぬが、あまりといへば浅ましい。(泣く。) この夏の頃から始まつた無禮講のお催し、最初のあひだは五日に一度、三日に一度であつたものを、このごろは毎日毎晩、おほかた明日も午過ぎから又出直しておいでなさるのでござりませう。しかも遊興のたはむれが次第に高じて、わかい女子をうす物ひとつにして狂ひまはるとは、聞くさへも浅ましい、汚らはしい。もうくわたくしには我慢も辛抱もありません。今夜かぎりにこの屋敷を立退いて、六波羅の里方へ戻りたいと存じます。どうぞお聴きとだけ下さりませ。

頼員。

夫の方から暇をくれるとも云はぬのに、女房の方から勝手に縁切つて戻るといふ。侍氣質の強い齋藤殿が我子にそのやうに我儘をゆるすと思ふか。

早 咲。

おつしやる通り、侍氣質の強い父でござりますれば、これほどの話を聴きましたら、屹と自分からも娘をとり戻すと云ひ出すでござりませう。わたくしの我儘を叱らうとは思はれませぬ。

頼員。

む。 (かんがへてゐる。)

ちか。

(ちかは湯を汲んで出づ。)

頼員。

どうも遅くなりました。

ちか。

(叱るやうに。) なぜ遅かつた。

頼員。

お湯がさめて居りましたので、沸してをりました。

早 咲。

(頼員はちかのさへ上げた湯をひと口のみて顔をしかめる。)

頼員。

え、酔醒めにこのやうな熱い湯が飲めると思ふか。水を持って、水を持って。

ちか。

はい、はい。(早々に引返して去る。)

早 咲。

(あざ笑ふやうに。) 罪もないちかに八つあたりてござりますか。

無 禮 講

(頼員はだまつて考へてゐる。)

早 咲。 して、わたくしへの御返事はいかゞでござります。

頼 員。(怒る) それほどに望みならば、暇をくれる。すぐに立去れ。

早 咲。 では、おいとまを下さりますか。

頼 員。 齋藤へは此方からも改めて挨拶する。ちかは里方から附添うて来た女ぢや。一緒に連れてゆけ。今度のことも大方はちかめが傍から何やかやと焚きつけたのであらう。憎い奴ぢや。

早 咲。 これはわたくしの一存から起つたこと。ちかをお憎みなされますな。

頼 員。 勿論かれめが何のやうに唆かさうとも、おのれの心さへ動かすば斯うはなるまい。憎めば

とて怨めばとて、かれは枝葉ぢや。(妻を呪む)縁あつて夫婦となり、あしかけ三年むつま

じく語らうて、二世の末までもと云ひかはしたを忘れたか。

早 咲。 それはこちらから申すこととでござります。おまへこそ家を忘れ、妻をわすれて、武士にも

あるまじき猥な遊興に耽つてゐるのではござりませぬか。

頼 員。(じれる) え、くどく云ふな。早く立去れ。え、出てゆけ。

早 咲。 はい。(すこし躊躇してゐる。)

頼 員。 望み通りに暇をくれるといふに、おのれはなぜゆかぬ。さあ、ゆけ、ゆけ。

(頼員は起つて早咲を庭口へ突き出さうとすれば、早咲は縁よりかた足ふみ落しながら夫の手にす

がる。夫婦は月のひかりに顔をみあはせて、しばらく無言。ちかは水を汲んで出づ。それに気がつ

いて、頼員は妻のそばを少しく離れて立つ。早咲はそのまゝ縁に腰をおろしてゐる。)

頼 員。(ちかを呪んで) お、水か、これへ持て。

ち か。 はい。

(とは云ひながら、頼員の顔色の唯ならぬのを見て、ちかは猶豫してゐる。)

頼 員。 なにを猶豫。早く持つてまわれ。

(ちかは猶油断せず、主人の顔色をうかゞつてゐる。)

頼 員。 え、なぜこれへ参らぬ。

(頼員はじれて近寄らうとする時、早咲は縁へかけ上りて遮る。)

早 咲。 もし、おまへはなんとなさる。ちかを斬らうとなされますか。

(ちかはいよいよおどろいて身がまへする。頼員はだまつて呪んでゐる。)

早 咲。 今もいふ通り、ちかを憎むはおまへの僻みぢや。無體の御成敗なされますな。

無 禮 講

頼員。

里方から付いて来た女と思つて、何事も大目に見ておけばつけ上り、夫婦のなかに水をさす奴。もう堪忍が相成らぬぞ。おのれ覺悟せい。

(頼員は嗔つて、ちかに近寄らうとするを、早咲はまた遮る。)

早咲。

それほどまでにちかをお憎みなさるも、所詮はわたくしゆるでござりませう。ちかを御成敗なさるまでもなく、寧ろそわたくしを斬つてくださりませ。

(頼員はだまつて突つ立つてゐる。)

早咲。

さあ、わたくしを殺してくださりませ。死骸になつてこの屋敷を出れば、わたくしは本望でござります。泣きくづれる。)

頼員。

(うたがふやうに。) この屋敷を死んで出たいと……父に顔をあはすが面目ないか。(頭をふる。)

早咲。

いえ、いえ、そんなことではござりませぬ。(また泣く。)

頼員。

去られた夫へ面當てに、いつそこゝで死にたいと云ふのか。(早咲は泣きながら再び頭を振る。)

ちか。

(思はず摺り寄る。) では、奥さまはこゝを去られて……。はて、おのれらの知らぬことぢや。あつちへ行け。

(眼で知らされて、ちかは水を入れたる桶をそこに置き、不安らしく立去る。早咲はまだ泣いてゐる。)

頼員。

(しづかに坐る。)

早咲。

おまへに去られて……。いつそ死んだが優してござります。(はげしく泣く。)

頼員。

その恨みは筋違ひぢや。おれの口からは唯の一度でも、おまへを去らうと申した覚えはない。今の今まで、最愛の妻ぢやと思つてゐるに、おまへの方から不意撃に、去つてくれいと云ひ出したのではないか。

早咲。

去つてくれいと云ふやうに仕向けたのは、やつぱりお前でござります。おまへ様が悪いのでござります。

頼員。

(かんがへる。)

無禮講

早 咲。(嬉しきうに。)はい。

頼 員。ちかが水を持つて来た筈ぢや。これへくれ。

早 咲。はい、はい。

(早咲は起つて、ちかの置いてゆきたる椀を持ち来れば、頼員は旨きうに飲む。)

早 咲。まだ欲うござりますか。

頼 員。む。ちかを呼べ。

早 咲。いえ、わたくしが取つてまゐります。

(早咲は椀を持ちて、下の方の棧戸をあけて去る。頼員は笑ましげにあとを見送りしが、やがて起つて縁さきに出で、冴えたる月のひかりを仰ぐ。)

頼 員。(ひとり言。)よい月ぢやな。

(蟲の聲きこゆ。頼員は月をながめてゐるうちに、次第に顔の色が曇つてくる。かれは思案に悩めるやうに幾たびか溜息をついて、我にもあらで縁に腰を落す。早咲は水を持ちて出づ。)

早 咲。お待たせ申しました。

(頼員は無言にて椀をうけ取り、思案しながら飲む。)

早 咲。なにを考へておいでなされます。

頼 員。あらたまつて云ふも異なものぢやが、頼員も武士ぢや、なん時どこで討死しようも知れぬ。

そのときにはお前はとうするな。

早 咲。はて、忌はしいことを……。今夜に限つてなぜそのやうなことを仰せられます。

頼 員。けふあつて明日無いが人の命、まして弓矢取る者はそれだけの覺悟が無くてはならぬ。世は太平のやうに見えても、なん時どのやうな軍が起らぬとも限らぬではないか。いや、近いうちに屹と起る。

早 咲。え。それはどうした譯でござります。

頼 員。それをこれから云はうとするのぢや。そこらには誰も居るまいな。

(頼員は庭に降りて、左右を見まはす。早咲も起ちて、座敷の左右をうかゞふ。やがて夫婦は顔を見あはせて、早咲は誰もゐないと眼で知らすれば、頼員はうなづいて縁にあがる。)

頼 員。(念をおすやうに。)ちかは居らぬな。

(早咲はうなづく。)

頼 員。誰も居らぬな。

無 禮 講

頼員。

近う寄れ。今夜は思ひ切つておまへに大事をあかす。これは大事の上の大事ぢやぞ。かならず他言するなよ。よいか。

(早咲は息をのんで、無言にて首肯く。)

頼員。

おまへ達は夢にも知るまい。京都には北條征伐のおほし立あつて、公家には尹の大納言、四條中納言、日野中納言、洞院左衛門督……いや、ひとり一人にその名を數へてはあらぬ。それらの人々のほかに、名ある上人僧都等も加はつて、このあひだから密々にその御評議ぢや。武士には一族の十郎頼貞をはじめとして、多治見國長、足助重成……。(すこしく聲をひそめて。)

早咲。

この頼員も御味方の一人ぢやと思へ。

頼員。

(おどろく。)

では、あの、無禮講といふは……。その御評議でござりましたか。かの鹿が谷のむかしを學んで、無禮講の遊興にことよせ、鎌倉退治のはかりごと最早おはかたは整うたれば、おそくも當年内にはおん旗あけと決定いたした。就てはこの頼員、一族の頼貞と共に一旦は一味荷擔したれど……。云ひかけて吐息をつく。) よく思案すればこの企て十に八九は成就すまい。鎌倉の高時入道、放埒驕奢のきこえ高けれど、北條九

早咲。

代の威勢はまだ衰へたとは思はれぬ。それに敵對する我々は……。いかに器量才學すぐれたりとも、公家衆や上人や僧都では、いざ合戦といふ時の用には立たぬ。まことの手足となつて働くのはわれわれ武士の役目ぢやが、さてその武士も前にいふ頼貞や多治見や足助の徒ばかりで、三百騎五百騎の人数を持つてゐるほどの大名はひとりもない。勿論、ひそかに廻文を送つて、諸國の武士を召しあつむる手筈にはなつてゐるもの、日和見の多い世の中、果してどれだけの味方がまらうか。

頼員。

それほど覺束ないことゝ知りながら、何故いつまでもその徒黨に加はつてゐるのでござります。石をいだいて淵に臨むとやら云ふは、そのことではござりませぬか。いつそ今のうちに抜けてしまはれては……。

早咲。

抜けらるゝものなら抜けてしまはうが、頼員も武士の端くれ、まして左近の藏人をうけたまはる京家の武士が、退引きならぬ羽目になつて一旦荷擔した以上、今更どうにもならぬことぢや。諺にも云ふ乗りかゝつた船で、もうこの上はどんなおそろしい颯風や荒浪に出逢はうとも、行くところまでは行かねばならぬ。

無禮講

頼員。

それはわからぬ。おほかたは船がくつがへつて……。いや、そんなことは云ふまい、思ふまい。思うたら一刻も斯うして落ちついてはゐられぬ。その不安のあひだにも一つの慰めは彼の無禮講ぢや。おまへの前では些と云ひにくいことぢやが、われくの身分では逆もならぬやうな山海の珍味をとゝのへ、たぐひなきまでに美しい女わらべをあつめ、上下の隔てなく打ちまじつて、夜も晝も酔ひたはむれ、舞ひ歌ふ、まことに前代未聞の盛宴、その面白さについて惹かされて……。

早 咲。

では、その無禮講の面白さに、身のゆく末もうち忘れて……。

頼 員。

いや。忘るゝと云ふではないが……。唯その面白さに惹きつけられて、半分は上の空で月日を送つてゐた。と云うたら、性根の据らぬ奴と思ふかも知れぬが、今のおれとしてはそれより外に仕様がなかつたので、よのつねの遊女狂ひや身持放埒とは譯が違ふ。察してくれ。

早 咲。

(思案して)それにしても、このまゝにうかくと月日を送つてゐたら、やがて大事の時節が近づきませうに、そのときお前はどうかになるのでござります。

頼 員。

それは考へないことにしてゐる。おれはもうどうなつても構はぬと決めてゐるから、おま

早 咲。

御念にはおよびませぬ。

頼 員。

おそかれ早かれ、土岐の家は滅亡、頼員は世にないものと思つてくれ。

早 咲。

はい。(眼をふく。)

(ちか出づ。)

ち か。

まだお休みにはなりませんか。

頼 員。

おゝ、もう夜もふけた。

(早咲はうつむいて考へてゐる。)

頼 員。

(注意するやうに。)これ、ちかが参つたぞ。

早 咲。

はい。(顔をあげて、ちかを見かへる。)これ、酒の用意をしや。

ち か。

これから御酒宴でござりますか。

頼 員。

(気がついたやうに。)むゝ、さうぢや。奥で飲まう。酒の支度をいたせ。

(頼員は起ちあがる。早咲はまた考へてゐる。)

これにて幕をおろし、更に再び幕をあけると、やはり元の頼員の屋敷。秋の夜も已に明け放れたる景色

（頼員は烏帽子をうち落されて大童となり、太き繩に両手を縛しめられて、座敷のまん中にあぐらをかいてゐる。縁の下のかたに齋藤の家來伊吹又兵衛は太刀をつけ、直垂の袖なく、長巻を傍にひき附けて張番してゐる。庭さきにも家來五六人が棒または刺又のやうなものを持ちて警護してゐる。）

頼員。　（狂へるやうに叫ぶ。） 繩を解け、繩をとけ。

又兵衛。　（なだめるやうに。） それはなりません。今しばらく御辛抱なされませ。

頼員。　繩を解け。太刀をわたせ。

（又兵衛は取合はずに黙つてゐる。）

頼員。　やい、又兵衛。おのれは舅の齋藤が家來ではないか。主人の婿の頼員に繩をかけて、座敷牢も同様のこの體たらくは、抑もなんたる事ぢや。仔細をいへ、仔細を申せ。いや、その

仔細をいふ前に、先づこの繩を解け。

又兵衛。　たとひ何と仰せられましても、これは主君の御指圖、手前が自由の取計らひはなりません。女房に酒を強られて、前後不覺に寐入つてゐるところへ、おのれらが不意に押込んで来て、無理無體にかくの始末。無禮と云はうか、狼藉と云はうか、言語に斷えたる振舞ぢや。おのれら何の仔細あつて、この頼員を生捕りにした。それをいへ。

（冷かに。） くどくも申す通り、これは主君の御指圖でござる。

又兵衛。　頼員をかやうに縛めて、さてこの上にどうするのぢや。

頼員。　油断なく警固せよとの御指圖でござる。そのほかには何にも存じ申さぬ。

又兵衛。　え、おのれらでは判らぬ。齋藤をよべ、太郎左衛門を呼べ。

（又兵衛はやはり取合はず。頼員は焦れて起ちあがらうとするを、又兵衛は支へる。下のかたより縁づたひにて早咲出づ。）

早咲。　殿。おしづまりなされませ。

頼員。　お、早咲……。又兵衛等がこの始末ぢや。早く繩を解いてくれ。

早咲。　（進みよる。） それはなりません。父の指圖でござります。

無禮講

頼員。

おのれまでが同じやうに……。あゝ、扱はおのれ、大事を父に洩したか。

早 咲。

おまへさまは京方、父の太郎左衛門は鎌倉方でござります。今度のいくさに京方が勝てば父はほろび、鎌倉方が勝てば夫がほろぶる。まして京方に勝目がないと聞くかなしさに、浅薄ながらも女子の思案、おまへ様を酔ひ潰して置いて、夜のあけぬ間に父の屋敷へ駆け付けました。

頼員。

大事露顯とは大かた察してゐたれど、よもや女房の口からとは……。おのれ、生みの父に功名手柄をさせたさに、夫を敵に賣り渡したか。

(頼員は憤然として蹴起し、早咲を蹴倒し、踏みにじる。又兵衛はおどろいて遮る。庭に控へたる家來共も一度に起つ。)

早 咲。

(踏まれながらに制す。これ、これ、かならず立つまい、騒ぐまいぞ。又兵衛も退きやれ。なう、殿……藏人どの。夫を敵に賣り渡したは、夫の命が助けたさ、夫がいといばつかりに……。)

頼員。

(齒がみをして。) えゝ、いつはり者め。畜生め。夫の大事を敵方に内通して、それで夫の命が助かると思ふか、夫が無事であらうと思ふか。敵方の間者も同様、ふところに刃をいだ

く女とも知らずに、心をゆるしたは頼員が一生の不覺ぢや。おのれ、蹴殺し、踏み殺してくるぞ。

(また踏みにじらうとすれば、早咲はその足にとりつく。)

早 咲。

いえ、いえ、おまへを助ける工夫はある。今朝も父と相談の上、おまへを返り忠の者にして、無事に命が助かるばかりか、恩賞までも賜はる約束、決して相違はござりませぬ。

頼員。

おゝ、この頼員を返り忠の裏切り者にしようと思すか。かうなれば何も彼も申上ぐる。御主君と早咲様が色々に御相談の上で、表向きはお前様が

又兵衛。

返り忠のことにして六波羅どのへ訴へ出で、夜のあるを待つて先づその徒黨の侍ども土岐頼貞、多治見國長の屋敷へ討手を差向け、ひとりも餘さずに生捕り又は撃ち取る手筈でござる。

頼員。

(大息をついて。) むゝ。それを聽いて藏人殿が、われも一緒に斬死と狂ひ出づるか、あるひは燥急つて切腹でも召

又兵衛。

さるゝか、それらのあやまち無きやうに、不意に取りおさへて警固つかまつれと、失禮を



(頼員は無言にて大息をついてゐる。)

早 咲。もし、これでもまだ御得心がまゐりませぬか。

(頼員はまだ無言のまま、で突つ立つてゐる。貝の音きこゆ。家來共もみな色めく。)

又兵衛。(向うをみる。)おゝ、いよく討手が向うたか。

頼 員。むゝ。頼貞の屋敷へも……國長の屋敷へも……。 (思はず縁先へ出る。) 彼等いかばかり猛くとも、不意の討手にかこまれては……。 (身悶えて。) その返り忠の……裏切り者が……。ここにゐるとはよも知るまい。(貝の音又きこゆ。) おゝ、貝の音が……。 (これる。) えゝ、繩を解け。太刀を持って……。

(頼員は繩にかゝりしまゝにて縁より駆け降りるを、家來どもは棒や刺又にて支へる。)

頼 員。えゝ、止むるな、邪魔するな。

(頼員は押退け蹴放して行かうとすれば、早咲も又兵衛も庭にかけ降り、又兵衛は繩尻を取つて無理に頼員をひき据ゑる。頼員は倒れて地に坐す。)

早 咲。(夫にとりつく。) おまへは狂うてどこへ行かるゝ。今となつて燥つたとて狂うたとて何となくりませうぞ。無益の犬死をするよりも、此儘おとなしくしてゐれば、命も助かり、恩賞も

又兵衛。賜はる、ゆうべお前はわたしを最愛の妻ぢやと云はれた、その妻といつまでも無事に榮えて暮す心はないか。どうでもわたしを尼にしたいか。  
早咲様のおつしやる通り、舅御さまも萬事呑み込んでござりますれば、決して御如才はござりませぬ。唯じつとさへしてござればお身は安泰、三方四方無事と申すものでござる。先づこの儘、その儘。(賺すやうに云ふ。)

早 咲。さあ、こゝにゐては悪うござります。内へおあがりなされませ。(夫を優しく抱へ起す。)

頼 員。(しづかに。) おれはもう騒がぬ。この繩を解いてくれ。

早 咲。え。(又兵衛と顔をみあはせる。)

又兵衛。勿論お解き申しますが、今しばらく御辛抱くださいませ。

頼 員。返り忠をすればお前等の味方ではないか。味方をいつまで生捕りにして置くのぢや。おれはもう騒がぬと云ふのに……。

(早咲と又兵衛は再び顔をみあはせて、また躊躇してゐる。縁づたひに侍女ちかが出で來りて窺ふ。)

頼 員。(見かへる。) おゝ、ちか。酒肴の用意いたせ。

ち か。はい。

頼員。

ゆうべのやうな事では足らぬ。肴も澤山の品々を買ひあつめ、酒も十分に用意いたせ。早

二人。

はい。

頼員。

又兵衛も飲め。

又兵衛。

はあ。

頼員。

餘の家來共もみな飲め。羽目をはづして飲め。

家來。

はあ。

頼員。

けふからはおれの屋敷で無禮講ぢや。

(頼員は笑ひながら起ちあがる。早咲と又兵衛は先づほつとする。貝の音きこゆ。)

幕

増補信長記

大正四年一月作。

大正七年三月。大阪中座初演。

初演當時の主なる役割——織田信長（市川左團次）明智光秀（尾上多見藏）善住坊（實川延若）堀尾茂助（市川壽美藏）漁師六右衛門（市川左升）娘お松（市川松蔭）權中納言惟房、市川右團次）景圓阿闍梨（市川小團次）など。

**登場人物**——織田彈正忠信長。權中納言惟房。明智日向守光秀。杉谷の善住坊。景圓阿闍梨。山岡對馬守貞正。堀尾茂助吉晴。池田勝三郎信輝。中川瀨兵衛清秀。高山右近。森蘭丸。中村孫平次。村井又右衛門。漁師六右衛門。六右衛門の娘お松。伯耆坊快善。相模坊法達。但馬坊來典。漁師甲作。漁師八藏。餅を賣る商人。信長の家來、惟房の從者など。

## 上の巻

(一)

江州大津の浦、漁師六右衛門の家。上のかたによせて二重屋體。屋體の上のかたに佛壇、その下は押入。つゞいて繩暖簾の出入口。下のかたは古びたる壁にて、糞笠などをかけてあり。その前には爐を切りてあり。上のかたは低き窓にて、上下の壁も破れたり。屋體の下のかたには、少しくあとへ下げて臺所、一つ竈など置きて、軒に繩暖簾を垂れたり。臺所の角に柳の立木あり。下のかた

の奥には琵琶の湖水遠くみゆ。

(元龜二年九月十二日の午後。六右衛門のむすめお松、十七八歳、爐のほとりに坐つてゐる。漁師甲作は新しき蓑を着け、おなじく八藏は古き蓑をつけて櫂を持ち、竹縁に腰をかけてゐる。浪の音静かにきこゆ。)

甲作。なんだか空模様が可怪くなつて來たな。

八藏。八月のなかごろから照りつゝいたのだから、もうそろ／＼降つても好い頃だ。

甲作。それは世間の人の云ふことで、こつちとらの商賣には雨や風は禁物だ。

お松。(空をみる)けふは朝からどんよりと陰つてはりますけれど、あれ、あの通り、比叡の方に

は些とも雲が見えませぬば、大した時化もござりますまい。

八藏。ほんに比叡の頂上は晴れてゐる。この分ならば心配することもあるまいよ。

お松。比叡の山おろしが吹き出すと、湖水が暴れると昔からきまつてゐますが、好鹽梅にこの秋

は些とも風が吹きませぬ。

甲作。山下しの吹かないのは結構だが、そのかはりに山法師があれ出して、こゝらでも随分迷惑

してゐる。どうかあれを鎮めて貰ふ工夫はないかなう。

八藏。

織田の殿様が御上洛のあひだは、都もこゝらも一帯に静かであつたが、その織田殿が北國へ御出馬になると、鬼の留守に洗濯とやらで、又ぞろ山法師どもが暴れ出したには困つたものだ。

お松。ほんにこのごろは物騒で、夜になるとうつかり一人では歩かれませぬ。

甲作。坊主のくせに女でも何でも攫つて行くといふから、お松坊のやうな若い女はなほ／＼氣を

つけねばなるまいよ。

お松。忌なことでもござりますなう。

(下のかたより漁師六右衛門、五十餘歳、魚籃をさげて出づ。)

お松。(起つて縁を降りる)おゝ、父さん。けふは早うござんしたな。

八藏。思ひのほか漁があつたのか。

六右衛門。(頭をふる)どうして、どうして。あんまり天氣がつやくせるか、このごろは毎日思はしい

漁もないので、いま／＼しいから好加減で戻つて來た。それでも見てくれ。こんな奴が

二尾獲つた。(魚籃をみせる。)

甲作。なるほど、これは大きな鯉だ。父さん、ちかごろの大手柄だぜ。

六右衛。

(打笑む)と云つて、自慢するほどの物でもないが、から手で歸るよりはまあ優しか。こんなのが五六尾も糶ればなう。は、は、は。

八藏。

父さんもなか／＼慾が深いぞ。

三人。

は、は、は。

六右衛。

(お松は魚籃をうけ取りて、竹縁の端に置く。六右衛門は草履をぬぎて縁にあがる。) みんなはこれから出かけるのか。雨支度で用心の好いことだな。だが、日がくれたら又どんなに風が變らうも知れぬ。まあ、まあ、用心に如くはあるまいよ。

お松。

用心と云へば、このごろは世間がなんだか騒がしいといふ噂。日の暮れぬうちに、いつもの酒屋まで鳥渡一走り行つて来ませう。(臺所へ壺を取りにゆく。)

甲作。

相變らず毎晩寢酒をやりなざるのかね。

六右衛。

若いときからの道樂で、どんな晩でも一杯引つかけなけりやあ麻付かれないのだ。板子一枚下は地獄といふ危い商賣を、この年になるまで遣つてゐるのも好きな酒が飲みたいのと、ひとりの娘が可愛いばかりだ。

お松。

(出で来る)では、行つて来ますぞ。

六右衛。

早う行つて来いよ。

お松。

あい、あい。ふたりの衆もわたしの歸るまで遊んでるてください。

二人。

あい、あい。

(お松は酒壺を持ちて、下のかたに去る。甲作と八藏はあとを見送る。)

八藏。

お松坊もだん／＼好い娘になるなう。

甲作。

なんでもこの大津の町では、一番の容貌よしだといふ評判だ。

六右衛。

(嬉しげに)まさかそれ程でもあるまいが、おれの娘にしては出来過ぎた方だ。それにおれが人並はづれた子煩悩と來てるから、なほ／＼可愛さが優して來る。どうかまあ好い聲でも取つて早く安心したいものだ。

甲作。

かみさんは疾うに死んだし、ほかに子供は無し。天にも地にも掛けがへのない一人娘のお松坊だから、可愛いのも道理だ。

八藏。

おれ達もせい／＼氣をつけて、好い聲どのを見つけて世話をしようよ。

六右衛。

ふだんから片意地者の六右衛門だが、娘のためなら誰にでも手をさける、頭も下ける。どうぞ好い聲があつたら世話をしてくれ。たのむぜ。

甲作。よし、よし、おれ達も屹と頼まれた。

八藏。まあ、まあ、安心してゐるがい。

六右衛。ほんたうに呉々もたのんで置く。おまへ達はまだ若いから判るまいが、子の可愛さは又格別だよ。

二人。さうだらうよなう。

(向うより叡山の悪僧伯者坊快全、相模坊法達、但馬坊來典の三人は足駄または草履にて、薙刀または八角棒を杖にして出づ。上のかたより餅を賣る商人出づ。)

商人。これは都の名物、笹粽でござい。

快全。こりや待て、待て。

商人。へい、へい。粽の御用でござりますか。

法達。いや、餅を買ふのでない。其方、けふは幾らほどの商賣があつた。

商人。へい、五十文ばかりござりました。

(三人は顔を見あはせる。)

快全。そればかりでは仕方がないが、無いにはましぢや。兎も角もその五十文を置いてゆけ。

商人。え。

來典。おのれが賣溜めの錢を置いてゆけと云ふのぢや。ぐづ／＼申すと命がないと思へ。(薙刀を突付ける)

商人。へい、へい。どうぞお助けくださりませ。

(商人は顔へながら賣溜めの錢をわたせば、來典は取つてに懐に入れる。)

法達。われ等は下戸ぢや。ついでにその餅を三つ四つ置いてゆけ。

商人。へい、へい。

(粽を出せば、法達は取つて食ふ。)

快全。もう用はない。行け、ゆけ。

商人。へい、へい。(早々に逃げてゆく。)

快全。どうやら空が陰つてまるつたなう。(云ひつゝ甲作等をみかへる。)こりや漁師。

八藏。へい。(顔を見あはせる。)

甲作。其方の蓑を貸してくれ。

快全。え。

二人。

快全。

空が陰つて来たによつて、蓑をかせと申すのぢや。え、わからぬか。

(快全はつか／＼寄つて、甲作の蓑をつかんで前へひき出す。)

甲作。

蓑を貸せと仰しやるのでござりますか。

快全。

知れたことぢや。早くぬけ。

(甲作は餘儀なく蓑をぬぐ。快全は取つて小脇にかゝへる。)

法達。

こりや、そちらの漁師も蓑をぬけ。

八藏。

へい、へい。

(八藏も蓑をぬぐ。法達は手に取りて額をしかめる。)

法達。

え、こんな古蓑がどうならうぞ。(なげつける。)

八藏。

要らぬとあれば丁度幸ひでござります。(蓑を拾ひとる。)

甲作。

おれは新しい蓑を着て来たばかりに、とんだ追剥ぎに出逢つてしまつた。

來典。

なに、追剥ぢやと……。怪しからぬことを申すな。

甲作。

ひとの着てるものを無理に剥けば追剥ぎでござりませう。

八藏。

お、さうだ、さうだ。

快全。

なに、おのれ無禮な奴、ゆるさぬぞ。

(快全等三人は立ちかゝる。六右衛門は縁をかけ降りて押分ける。)

六右衛門。

まあ、まあ、お待ちくださりませ。

法達。

いや、ならぬ、ならぬ。

六右衛門。

でもござりませうが、わたくしが代つてお詫をいたしますれば……。 (甲作等に眼くばせし

て。)

二人。

ぢやあ、父さん。たのんだぜ。

(二人は早々に逃げてゆく。)

來典。

え、待て、待て。

(三人は追はんとするを、六右衛門は遮る。)

六右衛門。

まあ、まあ、わたくしにお任せくださりませ。

快全。

(うなづく。)

よい、よい、しからは今度は其方が相手ぢや。そこ一寸も動くまいぞ。

六右衛門。

(快全は縁に腰をかける。)

御立腹は重々御道理ではござりますが、御覽の通りの濱育ち、失禮の段はまつびら御免く

ださりませ。

快全。いや、ならぬ。その過意としてわれくに酒を買へ。魚を出せ。

六右衛。え、御出家様が酒や魚を……。

快全。お、山法師とておなじ人間ぢや。酒も飲めば魚も食ふわ。

(このうちに來典は縁先の魚籃をみつける。)

來典。こゝに魚籃がござるわ。なにやら跳ねてゐる様子ぢや。(魚籃より鯉をつかみ出す。これ見られい、眼の下一尺あまりもござるぞ。

(法達も魚籃をのぞいて見る。)

法達。まだ一尾あるやうぢや。いつそ魚籃ぐるみ提げてまゐつては何うであらうな。

(來典はうなづいて、自分の持つたる鯉を魚籃に入れて縁よりおろす。)

六右衛。もし、それをお持ちなされては……

法達。え、邪魔するな。退け、退け。

(六右衛門を突きおける。下のかたよりお松は酒壺を持ち出て、この體を見てあわて、駈寄る。)

お松。もし、父さん。どうなされたのでござんす。

來典。こりや、娘。その壺はなんぢや。酒を買って來たのか。

お松。あい。

來典。丁度よいところぢや。これへ出せ。

(お松の持つたる壺を奪ひ取りて、壺の口より半分ほど飲み、更に快全にわたせば、快全も壺より飲む。六右衛門もお松もあきれて見てゐる。このうちに法達と來典とはお松を見てうなづき合ふ。)

法達。では、もうそろそろと参らうかな。

來典。それがよろしうござる。

(來典は快全の顔を見て、お松の方を顧みて示せば、快全もうなづく。)

快全。お、よい心持になつた。では、漁師、無禮の段は免してくれろぞ。

六右衛。御勘辨下さりますか。

來典。その代りに魚は貰うてゆくぞ。(魚籃をさげる。)

六右衛。え。

法達。この魚も貰うてゆくぞ。(お松の手を取る。)

お松。あれ、なにをなされます。

増補信長記



六右衛。娘をどうなさるのでござります。

法達。山へ連れてゆくのぢや。

二人。え。

法達。さあ、早くまわれ。(無理にお松の手を取つて引立つる。)

六右衛。そんな無體なことを……。いかに山門の御威光でも、これはわたくしが大事の娘でござります。

快全。一生連れてゆくといふわけではない。用が済んだら歸してやるわ。

お松。いえ、いえ、なんと仰しやつても……。

六右衛。娘を遣ふことはなりません。

快全。え、邪魔な奴め。

(突退けるを、六右衛門は又武者振りつく。快全は而倒といふ體にて、薙刀の石突きにて一つ突く。)

六右衛門は脾腹をうたれて倒れる。

お松。あれ、父さんが……。

法達。え、来い、来い。

(三人は思がるお松を追ひ立て、向うへ去る。六右衛門はやがて起き直る。)

六右衛。これ、娘……。え、もう連れて行かれてしまつたか。おのれ憎い坊主め、娘のかたき……

……。娘を戻せ、お松をかへせ。

(脾腹をおさへながら起たうとして又倒れる。下のかたより堀尾茂助吉晴、廿五六歳、旅商人のすがたにて足早に出で来る。六右衛門は又たち上りて行きかゝり、吉晴に突きあたる。)

吉晴。御免ください。

(云ひすて、行かんとするを、六右衛門は捉へる。)

六右衛。もし、娘を取返してくださいませ。

(振切つてゆかんとするを、六右衛門は又捉へる。)

吉晴。もし、わたくしの大事の娘を取られました。どうぞ取返してくださいませ。

六右衛。(立ち停まる)して、むすめを誰に取られたのぢや。

六右衛。あの山法師のあばれ者に……。

吉晴。む、。(向うを見る。)

増補信長記

六右衛門。

こりやもう寧そおれ一人で……。

(六右衛門は向うへ駆け行かんとするを、吉晴は止める。)

吉晴。

はて、待たつしやれ。わしに思案がある。

(六右衛門は猶かけ行かんとするを、吉晴は止める。)

(一)

おなじく江州瀬田の城内。本縁つきの二重屋體にて、上のかたに床の間、つゞいて襖。下のかたに折廻して廊下。庭には松の立木などあり。

(おなじ日の夕刻。床には鎧兜をかざりて、織田信長は敷皮に坐す。森蘭丸その傍に控へる。下のかたには瀬田の城主山岡對馬守貞正が控へる。侍女四人が酌に立ちて、酒宴の體なり。)

信長。

(さかづきを乾して。) 杯は主人に取らすぞ。

貞正。

お流れ頂戴いたしまする。

蘭丸。

御念の入りたる御款待。殿をはじめ我々一同いづれも満足に存じ申すぞ。

貞正。

御挨拶痛み入つてござる。北國御出馬とうけたまはつて、いさゝか油斷いたして居つたる

處、思ひよらぬ御上洛におどろき慌て、御迎ひに出でたる次第、諸事不行きとゞきの段々

平に御容赦くだされい。

信長。

信長の進退は電光石火だ。敵にも味方にも油斷させて、その不意をおどろかすが面白い。

北國の淺井朝倉征伐と聞いて、京浪華の奴儕も油斷して居るところへ、不意に信長の旗が

見えたら、かれらも定めて慌つるであらうよ。は、は、は、は。

(返杯する。) して、このたびの御上洛は三好の殘黨御征伐でござりますか。

貞正。

三好松永の徒は多寡の知れたものだ。信長の威勢に氣を挫かれ、そこや彼處に這ひかま

つて、はかなくしい軍もよう出来まい。信長がこのたびの上洛はほかに仔細あつてのこと

だ。當て、見い。

貞正。

はあ。(考へてゐる。)

信長。

は、判らぬか。蘭丸はどうだな。

蘭丸。

それがしにも何分合點がまゐりませぬ。

増補信長記

信長。

そちにも合點がまるらぬと申すか。まあ、よいわ。やがて判らう。  
(信長は笑ひながら杯を取る。侍女は酌をする。貞正の家來一人出づ。)

家來。

申上げます。

貞正。

何事だ。

家來。

叡山よりの使として、杉谷の善住御坊がまゐられました。

信長。

山門より使の僧がまゐつたと……。すぐにこれへ案内せい。

貞正。

ほかならぬ山門のお使であれば、粗相のないやうに心をつけい。

家來。

はあ。(引返して去る。)

蘭丸。

山門のお使、何事でござりませうな。

信長。

坊主、ほそち達よりもさすがに眼が捷い。(笑ふ。)信長上洛と聞いて、大方はそれと氣取つたとみゆるわ。こりや、對馬。そちは唯今家來にむかつて、ほかならぬ山門のお使、粗相なきやうにいたせと申附けたな。

貞正。

いかにも左様申しました。

信長。

山門がそれほど怖ろしいか。

貞正。

おそろしいと申さうよりも、尊いものゝやうに心得て居ります。

蘭丸。

(信長は唯あざ笑つてゐる。下のかたの庭口より以前の家來は、叡山の僧杉谷の善住坊を案内して出づ。善住坊は廿七八歳、高足駄をはきたり。)

家來。

これへ御案内つかまつりました。

貞正。

よい、よい。

蘭丸。

(家來は一禮して去る。)

貞正。

御使僧御苦勞でござつた。

善住。

先づこれへお通りください。

信長。

御免。

善住。

(善住坊は縁にあがる。)

信長。

(わざと高聲に。)お、坊主來たか。それへ坐れ。

貞正。

(善住坊はむつとしたるが、思ひかへして座に着く。)

善住。

して、お使の趣は……。

山門の使者として我等が今日まるつたは餘のことではござらぬ。織田どのに對面して、直

直におたづね申したき儀がござる。確とお答へくだされうや。

信長。は、大分むづかしいことを申すな。なんなりとも問ひたくば勝手に問へ。信長は返答に遊るやうな男ではないぞ。

善住。さらば問ひ申す。このたび北國をひきあけて俄に上洛せらるゝは、三好松永の一族征伐のためにあらず、まことは山門に討手を向けらるゝ御所存とか、世上では専ら風聞いたすが、この儀如何でござらうな。

(貞正と蘭丸は顔を見あはせる。)

信長。(事もなげに)今もその噂をいたして居つたところだが、お身達はまことに耳が捷い。どこで聞いて来たか知らぬが、それはまことだ、紛れもない實説だ。いかにも信長、翌日にも人数を繰出して、山門を攻めほろほさうと存じて居るのだ。

(貞正と蘭丸は再びおどろく。)

善住。これは以てのほかのこと、その仔細うけたまはらう。

信長。仔細はおのれ等の胸に問へ。

善住。仔細と申すはおそらく淺井朝倉に加勢の儀でござらう。いかにも山門の衆徒一致して、淺

井朝倉兩家を援けしに相違なけれど、それを今更かぞへ立てゝ、攻め亡さうなんどとは、近頃卑怯でござらうぞ。

信長。(聲を勵しうして。)なにが卑怯だ。

善住。室町殿のおあつかひにて、織田淺井朝倉の三家は一旦和議をむすび、北國へ引揚げたでは

信長。ござらぬか。したがつて山門と織田殿とのあひだにも、なんの恨みも残らぬ筈。

善住。その淺井朝倉めは、約束を破つて再び敵となつた。

信長。たとひ兩家が約束を破らうとて、山門に於ては些ともかゝり合のないこと、それを兎やか

う云ひたてゝ、王城鎮護の靈場へみだりに弓矢を向けらるゝとは、悉皆亂心狂氣の沙汰、

日吉山王の冥罰もおそろしいとは思はれぬか。

信長。だまれ、賣僧。日吉山王の冥罰がおそろしいなどと、勿體らしくいふ口の下で、なぜおの

れ等は俗凡夫にも劣つたる悪行を働くぞ。法師の身として酒を飲み、なまぐさきを食べ、

あまつさへ山内に女子をひき入れて、言語にたえたる白癡を盡すのみか、山門の威勢を嵩

にきて、洛中洛外は云ふにおよばず、江州一圓を横行して、上は朝廷をかるんじ、下は萬

民をなやます。おのれ等は佛徒にあらずして國賊だぞ。

善住。なに、國賊ぢやと……。〔屹となる。〕

信長。それが國賊であるまいか。國賊をほろぼして世を救ふは信長の務だ。

善住。取止めたる證據もなきに、さまざまに詞をかまへて衆徒を誹謗し、由緒尊き山門を國賊と

罵るは言語道斷。もうこの上は問答無益ぢや。〔起ちかゝる。〕

貞正。いや、しばらく……。〔法衣の袖をとらへる。〕

善住。佛敵の信長と同席するは法衣の汚れぢや。そこ放されい。

〔善住坊は袖を拂つて縁を降り、足駄を穿きてゆきかゝる時、下のかたの縁傳ひに堀尾茂助吉晴、衣服をあらためて出づ。〕

吉晴。御坊、待たれい。

善住。なんぢや。〔立ちどまる。〕

蘭丸。おゝ、堀尾殿。戻られたか。

信長。茂助か。近う進め。

吉晴。はあ。〔進み入る。〕叡山のお使、しばらく元の席にお着きください。

善住。そこまでのゆくは面倒ぢや。用があらばこゝで聞かう。

〔善住坊は足駄穿きのまゝにて縁に腰をかける。〕

吉晴。唯今あれにて承はれば、取止めたる證據もなきに、衆徒を誹謗するとか申されたが、衆徒の亂暴狼藉は疑ひもなきこと。その證人をこれへ呼び出し申さうか。

信長。面白い。早く呼べ。

吉晴。はあ。〔下のかたに向ひて呼ぶ。〕六右衛門、これへ出い。

〔下のかたの庭口より漁師六右衛門、小腰をかどめて出で、庭先にうづくまる。〕

吉晴。殿に申上げます。これは大津の浦の漁師六右衛門と申す者、途中より同道仕つてござりまする。こりや六右衛門、大將の御前であるぞ。

六右衛門。はあ。〔平伏す。〕

吉晴。唯今の一條を御前において逐一申上げい。

六右衛門。へい、へい。〔すこしく進み出る。〕恐れながら申上げます、唯つた今わたくしの宿へ、三人

連れの出法師が押掛けてまゐりまして、居あはせた者の着てゐる蓑を剥ぎ取りました。

信長。むゝ。

六右衛門。それからわたくし捕つて来た魚二尾を魚籃ぐるみ攫つてまゐりました。それから娘が買

つて来た酒も、みんな飲んでしまひました。

お、左様か。

信長。まだくればかりではござりませぬ。忌がる娘を手籠めにしてお山へ擔いでまゐりました。

善住。(堪へ兼ねて。)だまれ。

六右衛門。いや、いや、黙つてはゐられませぬ。お松はわたくしのひとり娘、大事の大事の智取りでござります。それを無理無體に連れて行かれましたは……。

善住。だまれ。

六右衛門。お前に云うてゐるのではござりませぬ。もし、殿様。大事の子を取られた親のこゝろを、お察しなされてくださりませ。いかに山門の御威光でも、あまりと申せば無理非道でござります。

善住。え、やかましい。黙らぬか。

信長。(善住坊は衝と寄つて、足駄にて六右衛門を蹴倒す。)

(蘭丸をみかへる。)あれ、止めい。

蘭丸。

(縁より駆け降りて善住坊を遮る。)御坊、待たれい。上意でござるぞ。

善住。

なにが上意……。佛敵の信長に諂うて、あること無いこと尾緒を添へてしやべり立つる老ほれめ。われ等の足許に踏みにじつて呉れるわ。

(又起ちかゝるを、蘭丸は遮る。)

六右衛門。

なんで嘘いつはりを申しませう。たとひ踏まれても叩かれても、云ふだけのことは云はねばなりません。さあ、娘を戻してくださいませ。

善住。

それを我等が知つたことか。

信長。

よい、よい。六右衛門とやらの訴へは信長がたしかに聞いた。娘はかならず取戻して遣はすほどに、安心して待つて居れ。

六右衛門。

(喜ぶ。)では、娘は取戻して下さりますか。もし、この通りでござります。(手をあはせて拜む。)

信長。

山法師僧は憎い奴だな。(善住坊を見ながら云ふ。)

六右衛門。

ほんに憎い奴等でござります。

吉晴。

(善住坊怒つて又寄らうとするを、蘭丸は隔てる。)

六右衛門、願ひの趣お聞きとゞけに相成つて、そちは定めて満足であらう。この上は長居

増補信長記

は恐れ、早々に立歸つて御沙汰を待て。

六右衛門。はい、はい、ありがたうござります。くどいやうではござりますが、何分ともに娘のことを……。

吉晴。それは我々が引受けた。

貞正。猶豫いたさずに、行け、行け。

六右衛門。では、御免くださりませ。

(六右衛門は先づ信長に一禮し、更に一同に會釋して立去る。)

信長。坊主、どうだ。あのやうな證人が眼の前にはあらはれても、山法師の亂行は跡方もないことだと申すか。(あざ笑ふ。)おのれ等も今日あすの中にはほろびる身の上ぢや。この世の名残りに好きな酒でも飲んでゆけ。うまい肴もここにあるぞ。

(侍女に眼くばせすれば、侍女どもは肴を乗せたる三方とさかづきとを縁先に持ち出して、善住坊の前に置く。)

信長。酌は女子だ。十分に飲め。

善住。われ等は法師ぢや。葦酒山門に入るを許さぬが昔よりの掟ぢや。(顔をそむける。)

信長。嘘をつけ。は、は、は。現におのれが同宿の坊主どもは、大津の町で酒をぬすみ、魚を齎

つたと云ふではないか。

善住。餘人は知らず、この善住は酒や肴に用はないのぢや。

信長。まだ偽りを申すのか。おのれのやうな剛情の奴は、女子の酌では埒があくまい。茂助、蘭

丸。その坊主めを取つておさへて、口を割つても酒を飲ませい。

貞正。それは餘りのこと、なにとぞ其儀は御容赦を……。 (とりなし顔に云ふ。)

信長。そち達の知らぬことだ。控へて居れ。それ、兩人、早くいたせ。

二人。はあ。

(吉晴は三方を善住坊の前につき付けて、銚子を取る。)

吉晴。無骨ながら拙者のお酌で、一獻汲まれい。

善住。む、左ほどに強らるゝを辭退もなるまい。折角のさかづきは斯うして受くるぞ。

(善住坊は三方の上の土器を取りて、矢庭に信長をめぐらして打ち付ける。信長は身をかはして中

らす。)

蘭丸。無禮者……。

曾補信長記

信長。

(走りかゝつて善住坊に組みつく。吉晴も身を楯にして信長を圍ふ。)  
(怒る。おのれ、重々憎い奴。動くな。)

貞正。

(信長は太刀を取りて起ちあがるを、貞正はあわて、支へる。)  
恐れながらお手討の儀は……。

信長。

え、止むるな。放せ、放せ。

光秀。

(下のかたの縁傳ひに明智日向守光秀出づ。)  
その御成敗しばらくお待ち下さりませう。

貞正。

お、よいところへ明智殿……。

光秀。

殿もお鎮まりなされませ。蘭丸も待たれい。

蘭丸。

む、(善住坊をおさへし手を放す。)

信長。

光秀。なにしに止めに来つた。

光秀。

御立腹御もつともではござりますが、法師にむかつて酒を強ひ、肴を勧め、かやうな楯

信長。

事を仕出されしは、あまりに事を好みし爲され方。

信長。

信長が悪いと申すか。

光秀。

いや、日ごろの御氣性としては左もあるべきこと、お察し申上げますれど、兎もかくも彼

信長。

は山門の使。けふのところは一先づ御赦しあつて、糾すべき罪あらば改めて糾すが法でござらう。

貞正。

なにとぞ御宥免のほどを、それがしも共々に願ひまする。

信長。

そち達がそれほどに申すならば、どうで遅かれ速かれ誅伐すべき奴だ。けふ一日の命を延

べてくれるわ。

光秀。

早速のお聞濟みありがたう存じまする。善住坊も唯今聞かる、通りの次第、今日はこのま

善住。

ま穩便にお引取りください。 (思案して) む、(思案して) む、(思案して) しかれば何事も和殿に免じて……。

光秀。

お引取りくださるか。

善住。

して、山門への御返事は。

光秀。

それも光秀が心得申した。

善住。

(眼で知らせる。善住坊うなづく。)

光秀。

萬事はよきにお頼み申すぞ。

善住。

萬事はよきにお頼み申すぞ。

善住。

萬事はよきにお頼み申すぞ。

善住。

萬事はよきにお頼み申すぞ。



信長。(云ひすて、善住坊は悠々と立去る。蘭丸は縁をあがりて座に復る。)

酒宴は止めた。そこらを取片付けさせい。

はあ。

貞正。

(侍女どもを見かへれば、侍女は銚子三方などを片付けて退く。)

信長。

茂助、都のありさまは何うであつた。

吉晴。

商人に姿をかへて、京浪華の形勢を探つてあるきました。三好も松永も差當りては……

信長。

(笑ふ。)手も足も出ぬやうでござりまする。

吉晴。

さうであらうよ。(おなじく笑ふ。)

信長。

唯われくの眼にあまりまするは、山法師どもの亂行日に日に募りて、さながら、山賊も同

吉晴。

様の振舞、苦々しい儀にござりまする。

信長。

ぢやによつて、もう一刻も捨て置かれぬ。今夜にも信長みづから行き向つて、彼の叡山を

吉晴。

攻めほろぼすのだ。即刻に出陣の用意いたせ。

信長。

はあ。

吉晴。

對馬も城にあるだけの人数を連れてゆけ。

貞正。

では、どうでも山門を……

信長。

くだい、くだい。もうやがて日が暮るゝぞ。早ういたせ。(焦れる。)

貞正。

はあ。

信長。

兩人ともに早くゆけ。

二人。

はあ。

信長。

(吉晴と貞正は一禮して早々に立去る。)

光秀。

光秀、そちも一緒にまるれ。

信長。

仰せに返るは恐れ入れど、山門征伐のおほし立はなにとぞお見合せのほど願はしう存じま

信長。

するが、この儀如何でござりませうや。

光秀。

山門征伐はならぬと申すか。

信長。

改めて申さずとも、比叡の山は王城の鬼門を守る、國家鎮護の大道場として、幾百年のむ

光秀。

かしより上下の信仰はなはだ厚く、恐れながら朝廷に於ても、山門に對しては常にこゝろ

承はる。

されば衆徒の亂暴もあながち今に始まりしにもござりませぬ。何事も唯々大目

増補信長記

承はる。されば衆徒の亂暴もあながち今に始まりしにもござりませぬ。何事も唯々大目

信長。

に御覽せらるゝが、天下を治むる大度量かと存じまする。  
(あざ笑ふ) 多くある家來のうちでも、光秀と秀吉とは、相當の分別ある奴だと思つてゐたに、そちまでが同じく左様のことを申すか。山門の由緒あることは信長もかねて存じて居る。かれらが山門を嵩に着て、むかしよりさまぐの亂暴狼藉をはたらき、上を惱まし、下を苦むることも亦よく存じて居る。それを今日まで無事穩便に捨て置いたは因循姑息と申すものだ。信長にそのやうな我慢は出来ぬぞ。

光秀。

天下を治むるには、堪忍も我慢も大切でござりまする。由緒ある山門に弓鐵砲を打ちかけ、神社佛閣を破却して惡虐無道の名を取りたまは、世の人望をうしなひて、味方も敵となる道理でござりませうぞ。

信長。

國賊ともいふべき賣僧どもを踏み殺すが、なんの惡虐、なんの無道だ。總別天下の武將たるべき者が、佛に詔ひ僧におもねり、殊勝らしく念佛など唱ふるが、この信長の氣に入らぬわ。このごろでも小田原の北條早雲、甲斐の信玄、越後の謙信、いづれも人並の弓矢を取りながら、頭を剃りまるめて鬼の念佛、いや何たるさまだ。

光秀。

人間にも後の世と云ふものがござりまする。頭を剃ると否とを問はず、佛を尊み、僧をう

信長。

やまひ、來世の幸ひを祈るが習ひ、まして弓矢を取つて殺生を常とするものは……。

光秀。

信長の來世は地獄でも極樂でもなんでも構はぬ。佛をたのむ用は無いだ。(起ち上る。)

ではござれども、今一度御思案を……。

信長。

(光秀進んで信長の袖をひく。)

えゝ。うるさい。

信長。

(扇にて打拂ふ。光秀再びひき止めんとすれば、信長焦つてその額を碯と打つ。)

蘭丸、まるれ。

(信長は蘭丸を連れて、つかくと奥に入る。光秀はちつとあとを見送る。時の太鼓きこゆ。)

幕

下の巻

(一)

江州打出の濱。正面は琵琶湖を隔て、比叡山遠くみゆ。砂地の布を敷きて、諸所に松の立木あり。  
(おなじ日の夜にて、舞臺の前には一面に浪幕をおろしてあり。織田の家來中村孫平次は武装して槍を持ち、軍兵五人を率ゐて出づ。)

孫平次。

山法師どもの亂暴狼藉、このごろいよ／＼募るに就いて、殿には最早捨置かれがたく、今宵これより攻めよせて、たゞ一戦に踏み潰せとの殿しいお觸れだ。

兵甲。

敵は名に負ふ荒法師。  
嶮しき山坂を足場として、一同必死に防ぐ時は。

兵乙。

なか／＼手剛いことござらう。

孫平次。

とは申しても多寡が法師武者だ。所詮われ／＼の相手ではないわ。山門に向つて弓を引くは好ましからぬことではあれど、殿の仰せには背かれまい。猶豫せずに早くまゐれ。

五人。

心得申した。  
(孫平次は先に立ち、軍兵等もつゞいて上のかたに去る。浪の音。浪幕を切つて落すと、たちまち鐵砲の音きこゆ。織田の家來數人、上下より走り出づ。)

家來一。

不意にひゞきし鐵砲の音は何事ぞござらぬや。

一同。

何事ぞござらぬ。  
(一同はあたりを窺ひて立騒ぐ。下のかたより森蘭丸出づ。)

蘭丸。

いづれもかならずお騒ぎあるな。お輿を目がけて鐵砲を打ちかけたる曲者ありしも……。(聲を高くして) 狙ひは狂うた。殿に御別條はござらぬぞ。

一同。

はあ。  
立騒がすと控へて居られい。

一同。

はあ。  
(一同は鎮まりて控へる。下のかたより織田信長は家來に空の輿をかゝせ、徒歩にて出づ。あとより山岡對馬守貞正をはじめ、家來數人したがひ出づ。)

貞正。

何者の仕業か存じませぬが、危いことぞござりました。

信長。

浅井朝倉の忍びの者か、但しは山法師どもの仕業か。兎にもかくにも信長を狙ひ討にせうとは、敵ながら小氣味のよい奴だな。

(鐵砲の音又ひゞく。一同は彈丸を避けるこゝろにて、いづれも地に伏す。信長は獨り立つてゐる。下のかたより堀尾茂助吉晴は槍を持ちて走り出づ。)

吉晴。

一度ならず二度までも……。油断のならぬことでござりまするな。

信長。

今の彈丸は丁度わが袖を掠つて通つたわ。(笑ふ。)

吉晴。

何にいたせ、あたりをよく、詮議いたしませいで……。)

貞正。

(信長は頓にてまねく。吉晴は進み寄る。信長はなにか囁き示せば、吉晴はうなづく。)

信長。

して、これより矢はり坂本へ……。

信長。

勿論のことだ。(空を見る。)

う。

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

(月出で、湖水の浪かゞやく。信長は悠々として上の方にあゆみ去る。貞正、蘭丸、家來どもは皆附き添ひてゆく。初めに出でたる家來数人と吉晴だけがあとに残る。吉晴は家來を招きてさ、やけば、一同は心得て左右の木かげに隠れる時の鐘きこゆ。向うより杉谷の善住坊は身輕にいでたち、火細筒を持ちて走り出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

善住。

信長めの運の強さよ。

家來一同。

(齒がみをして信長のあとを見送る。木蔭にかくれたる織田の家來ども現はれ出づ。)

貞正。

あれ、お聴きなされませ。討手の寄するを知らず顔に、寺々にて勤行の鉦の音、木魚の音、山内は鎮まりかへつて居ります。

蘭丸。

木の葉をこぼるゝ夜露の音も、手に取るばかりに聞ゆる静けさは、思ひのほかでござりまするな。

信長。

討手が向ふとは知りながらも、さすがに今宵とは思ひ設けず、かれらも油断してゐるのであらうよ。先手より未だなんの注進もないか。

又右衛。

中川瀬兵衛、高山右近、この兩人よりは未だなんの注進もござりませぬ。

信長。

なにを猶豫いたして居るのか。日ごろにも似ず遅いことだな。

貞正。

武勇をはこる兩人も、山門に向つて弓鐵砲を打ちかけますは、すこしく憚つて居るかとおほえまする。

信長。

弱い奴等め。蘭丸、そちはすぐさま登山して、一刻も早く攻めかゝれと彼の兩人に催促いたせ。

蘭丸。

はあ。

(蘭丸立ちあがらんとする時、下手の坂路を降りて、景圓阿闍梨、六十餘歳の老僧、軍兵一人に案

軍兵。

内せられ、鳩の杖にすがりて出づ。軍兵は手に松明を持つ。)

中川瀬兵衛どのお指圖によつて、景圓阿闍梨を御案内申しました。

(孫平次は起つて幕の入口に出る。)

孫平次。

しばらくそれにお控へ下されい。(信長の前に来る。)

信長。

面倒だ。逢ふに及ばぬ。追ひ返してしまへ。

又右衛。

景圓阿闍梨は三塔にても一二をあらそふ碩學の老僧、兎もかくも御對面を許されまして

は……。

信長。

そち達は兎角に坊主の最良をするなう。よいわ。これへ呼べ。

孫平次。

はあ。(幕の外にむかひて。)

阿闍梨にはなにとぞお通りください。

信長。

景圓阿闍梨とは御坊か。それがしは信長だ。

景圓。

初めてお目にかゝります。いづれも御免ください。

(人々に會釋すれば、一同も一禮す。景圓は杖に倚りて立つ。)

信長。

信長は氣がみじかい。用があらば早く申されい。

増補信長記

景圓。

織田どのには山門の罪を問ふとあつて、今宵俄に人馬を差向けられ、先手は西の穴生の坂口まで押寄せて、今にも攻めのほらんづ氣勢を示さるゝ。これに應じて血氣の若僧共も、太刀よ槍よと舞めきさわぐ。

信長。

む、面白い。坊主どもが敵對するとか。

景圓。

いや、かくては柔和忍辱の道場も、血肉修羅の巷と相成る道理。あまりの淺ましさを見るに忍びず、なにとぞ穩使の御處置を願はんとて、それがしこれまで下山いたした。(一座を見わたして)なう、方々。武士と武士とが弓矢を争うてこそ、功名にもなれ。手柄にもなれ。法師を相手に鬪うて、それがなんの譽になりませうぞ。つまりは佛に弓を引いたといふ、世の嘲りを受くるばかりか、來世は黒闇の無間地獄ぢや。

(人々は答へずして頭を俛る。)

信長。

え、又してもそれを云ふか。たとひ佛が尊くとも、これに仕ふる法師僧に、破戒無慚の悪行あらば、いかで免して置かれうや。理を非にまけて云ひ瞞めうとも、この信長は耳を假さぬぞ。(一座にむかつて)おのれ等は眉に唾して、白藏主のやうな古狐にだまさるゝな。

景圓。

織田どのには聞きしにまさる怖ろしいお人ぢや。(嘆息す。)

(下手の坂路傳ひに、中川瀬兵衛清秀出づ。すぐに幕の内に入る。)

清秀。

阿闍梨はまだこれに居られたか。

信長。

瀬兵衛、なにをうか／＼致して居る。先刻からもう一响も過ぎて居るぞ。

清秀。

はあ。

信長。

坊主どもがそれほど怖ろしいか。

清秀。

いや、左様なわけでもござりませぬが、阿闍梨の戻るまで差控へて……。

信長。

それが迂闊だ。おのれは唯信長の下知を背いて居ればよいのだ。早くゆけ、早くかゝれ。

馬鹿な奴め。

清秀。

はあ。(早々に引返して去る。)

貞正。

(氣の毒げに)阿闍梨には今聞かると、通りの仕儀でござる。他の惡僧どもとは事變りて、おん身の高德はあまねく人の知る所。

又右衛門。

早々に下山して、せめて一身を全うせらるゝが、おん身の爲、世の爲でござらうぞ。

景圓。

折角のお勧めではござれども、わが立つ柚の滅亡をよそに見て、おめ／＼下山する景圓で

はござらぬ。三塔のほろぶる時はすなはち佛法の亡ぶる時ぢや。日ごろ讀誦する觀音經を身につけて、刀刃に貫かるゝか、兵火に焚かるゝか。しづかに最期を待つてござらう。いづれもお別れ申す。

(景圓は一同に會釋して幕の外に出で、軍兵に送られて坂路を登りゆく。一同は顔を見あはせて暫時の沈黙、月ばかりかれて、をりくりに鳥の鳴く聲きこゆ。)

信長。暗くなつた。篝を強く焚け。

軍兵。はあ。

(軍兵等は枯枝を篝の火に添へる。火は炎々と燃えあがる。向うより池田勝三郎信輝は軍兵に松明を持たせて出づ。)

信輝。みやこより御使として權中納言惟房卿の下向でござりまする。

信長。なに、都よりの御使とな。それ、御出迎ひいたせ。

一同。はあ。

(信長をはじめとして、幕の内にある者いづれも起つて外に出で、形をあらためてひざまづく。向うより權中納言惟房は馬に乗り出て出づ。軍兵二人は松明を持ちて案内し、ほかに仕丁等大勢したが

信長。

ふ。仕丁のうちには唐鞆を穿きたる者あり。信長等はうやくしく一禮す。思ひもよらぬ御使の下向。信長をはじめ一同の者つ、しんで御出迎ひ仕まつる。

(惟房は馬を降りて幕のうちに入る。仕丁の一人は持ち來りし床几を据ゑる。信長、貞正、蘭丸、信輝、又右衛門、孫平次の六人は幕の内に入り、他の軍兵從者等は幕の外に屯す。)

信長。

御使の趣、仰せきけられて下さりませ。

惟房。

織田信長北國をひきあけて、重ねて上洛の趣きこし召され、上のおん使として權中納言惟房、唯今瀬田の城まで參向せしところ、信長は叡山坂本口へ向ひしとうけたまはり、更にそのあとを追うてまゐつた。

信長。

火急の事とて路次の警固もゆきとゞかず、失禮の段々平に御容赦くださりませう。

惟房。

應仁以來の兵亂にて、花のみやこは荒れに荒れたるを、信長さきに上洛して、半月のうちに四方を切りしづめ、再びむかしの太平に復せしは、その勳功莫大なりとて、上にも御感な、めならず、このたび再び上洛の時を待つて、恩賞として錦の陣羽織一着と、蘭奢待の名香を下したまはるべしとの御説、ありがたく御受けいたされい。

信長。

數にも足らぬ信長が寸功を、上には左ほどに御賞美あつて、世にもありがたき御説を下さ

れたるは、家の面目、身の本懐、つゝしんでおん禮申上げたてまつる。

唐櫃、これへ……。

惟房。仕丁。はあ。

(仕丁は幕の内へ唐櫃をかき入れて、信長の前に置く。)

信長、頂戴の品々をあらため見よ。

信長。はあ。

(信長は左右を見かへれば、蘭丸と信輝は唐櫃をあけて、陣羽織と香箱をさげ出す。)

信長。

恩賜の二品、たしかに頂戴仕つてござりまする。近日上洛のみぎりには、この陣羽織を身に着けて、拜講仕つるでござりませう。(二品をいたゞく。御前よしなに御取なしを願ひまする。)

(蘭丸等は二品を再び唐櫃に収めて、すこしく後の方に運び入る。)

惟房。

これにてお役も相済んだ。今よりは唯の權中納言惟房として、お身に些と申し談じたい儀があるが、聞いてくれうか。

信長。

なんなりとも御遠慮なく……。

惟房。餘の儀でもない。今宵の軍をやめて給らぬか。

信長。

いくさを止めいと……今宵の軍を……。

惟房。

さうぢや。山法師等が狼藉には惟房もかねて胸を痛めて居る。ましてお身達より見るならば、さだめて眼に餘ることもめらうが、延暦草創より八百年、山緒正しき山門をたゞ一朝に破却するは、天下のために悲しむべきことぢや。弓矢の力をからずして彼等を鎮むる工夫はないか。どうぢやな。

信長。

は。(返事に遊つてゐる。)

惟房。

信長は不得心とみゆるな。事新しく申すまでもないが、王法と佛法とは車の兩輪ぢや。その佛法の源たる叡山をほろぼすは、國家の亂れをまねく基であらうぞ。

信長。

は。(猶かんがへてゐる。)

惟房。

まだ合點がまゐらぬか。兎も角も惟房の頼みぢや。せめては明日の朝まで延ばしてはくれまいか。それも成らぬか。

信長。

(迷惑さうに。)ほかならぬ惟房卿の御扱ひ、無下にお断りも相成りますまい。

惟房。

しからは軍を待つてたもるか。

増補信長記



信長。

はあ、仰せにまかせて明日まで……。

惟房。

それは過分ぢや。惟房も初めて安堵いたした。(よろこぶ)われはこれより登山して、山法師等にも理非を説ききかせ、双方の無事を計るであらう、誰かある、案内いたせ。(立ちあがる。)

信長。

勝三郎、お供申せ。

信輝。

はあ。

(信輝も起つて案内せんとする時、遠近にて寐鳥の飛び起つ羽音すさまじくきこゆ。人々あやしみて空を仰ぐ。)

惟房。

はて、心得ぬ。比叡の山風吹き断えて、夜もやうやく更けんとするに、山中俄に物さわがしく、この峰、あなたの森にて、寐鳥のしきりに驚き起つは……。

(寺々にて撞き立つる早鐘の音きこゆ。人々は俄に立ちあがりて、うしろの山を見る。)

蘭丸。

や、あの早鐘は……。

貞正。

山門の人数をあつむる合圖。

又右衛。

さては山内一致して。

孫平次。

切つて出づると相見ゆる。

惟房。

かゝる事もやらんかと心を碎きし甲斐もなく、はや手おくれと相成つたか。今この際に山内より、矢一筋でも射出すが最期、山門自滅の基となる。そこに心がつかずして、武士を侮づる山法師が、佛敵退治などと呼はつて、われから戦ひを挑むとは……。え、淺ましや、なさけなや。さりとて、このまゝには捨置かれぬ。われは即刻登山して兎も角もかれらを制しとゞめん。西の穴生の坂路までは馬も通ふとおほゆるぞ。馬曳け。早う、早う。(惟房急いでゆきかゝるを、信長は遮る。)

信長。

いや、しばらく……。月さへ暗き木下道、つゞら折りなる山坂を、急いで駆けたまふは、危し、あやふし。まして山門の悪僧ばらが、悪所絶所を遮つて、防ぎ矢射るとあるからは、如何なる過ちあらうも知れず、先づくお止まり下さりませ。

惟房。

いや、いや、山門の滅亡を救ふがためには、惟房の命も惜むに足らず。いまだ大事とならぬうちに片時も早う。

信長。

ではござりませうが、卿は都より下されたるおん使、おん身に萬一のことあらば、上に對して恐れあり、信長なんと申譯がござりませうぞ。

増補信長記

惟房。むよ。(すこしく猶豫ふ。)

蘭丸。暫く……。

一同。しばらくお待ち下さりませ。

(人々は惟房を遮りとどめる。早鐘の音いよいよ烈しくきこゆ。坂の上より中川瀬兵衛清秀再び走り出づ。)

清秀。申上げまする。(云ひかけて惟房をみて少しく猶豫ふ。)

惟房。苦しうない。早う申せ。

清秀。はつ。殿のお叱りを蒙つて、それがし唯今山内へ引返せしところ、われより蒐るを待たずして、山門の方より俄に打つて出で……。

信長。むよ。彼より軍を仕掛けたか。

清秀。はあ。

惟房。して、して、どうぢや。

清秀。双方たがひに入亂れて合戦最中にござりまする。

惟房。むよ。

清秀。委細はかさねて御注進仕つる。いづれも御免くださいされ。

(清秀は云ひ捨て、去る。)

信長。お聞きの通りの次第、何事も是非なき成行とおあきらめなされて、御登山の儀は……。

惟房。思ひとまれと申すか。(思案して。)何事も最早水の泡ぢや。今となつては是非におよばぬ。

我意に募りし法師ばらが、みづから招きし禍とは云ひながら、由緒ある山門が今宵かぎりに亡ぶるとは……。信長。

信長。はあ。

惟房。かへすくも残念に思ふぞ。

(早鐘の音又きこゆ。惟房は痛恨に堪へず、黯然として山のかたを見返る。)

惟房。この上に長居は無用。われは最早下山いたさう。

信長。陣中とて何の設けもなく、失禮おそれ入つてござりまする。(一同に向ひ。)それ、お見送り

を……。

一同。はあ。

(惟房は幕の外に出で、再び馬に乗る。信長等も出で、見送る。)

惟房。

信長。

信長。

はあ。

惟房。

山門の大衆三千人、ことごとく血氣の荒法師ばかりでもあるまい。高德の聖、碩學の老僧、そのほか手向ひいたさぬ者には、かならず無慈悲の刃をあつるな。

信長。

はあ。

惟房。

さらばぢや。

(軍兵二人は始めのごとく松明を把りて先に立ち、惟房につゞいて仕丁等大勢ゆく。池田信輝も送りてゆく。早鐘の音又きこゆ。)

信長。

多寡の知れたる法師武者を相手に、いつまで時を移して居るのか。(山を見る。) さりとは齒痒い奴等だなう。

(信長は吹きながら幕の内に入る。軍兵等は再びかゞり火に枝を焚べる。下手の坂路より高山右近走り出づ。)

貞正。

おゝ、右近どの。いくさの様子は……。

右近。

山坂の案内をよく知つたる法師武者、こゝに現はれ、かしこに隠れて、必死に防ぎ戦ふ間

先手も容易に進みかねて……。

信長。

(怒る。) えゝ、さりとして手ぬるい奴等。おのれはどの面さけてこれへ来た。

右近。

はあ。

信長。

この上は容赦に及ばぬ。寺と云はず、社といはず、片端より焼き拂へ。

(一同は顔を見あはせる。)

又右衛門。

あの、山門に火をかけて……。

信長。

おゝ、山一面に燃してしまへ。

(信長はかゞり火の傍に立寄り、燃えたる大枝を取る。)

信長。

山賊どもの巢を焼く松明だ。持つてゆけ。

右近。

はあ。(進んで松明をうけ取る。)

信長。

早く火の手をあけて見せい。

右近。

はあ。(引返して去る。)

軍兵。

(これと同時に、向うより漁師六右衛門走り出で、幕の内に入らんとする軍兵等は遮る。)

えゝ、おのれは何者ぢや。

六右衛門。 大津の浦の漁師六右衛門と申す者でござります。どうぞ大將様にお逢はせなされて下さりませ。

貞正。 (起つて出づ。) お、そちは六右衛門か。なにしにまるつた。

六右衛門。 お約束の通り、娘をお戻しく下さりませ。

貞正。 さりとてこの場合にどうならうぞ。

六右衛門。 それでは御約束が違ひます。え、お前さまでは判らぬ。(貞正を突き退けて幕の内に入る。)

お、織田の殿様、これにお出でなされましたか。このやうに軍が始まりましたは、もううか／＼しては居られませぬ。娘はどこに居ります。早うお松を戻して下さりませ。(狂氣のごとくに叫ぶ。)

信長。 娘を案ずるのは道理だが、唯今對馬も申す通り、今この場合ではどうもならぬ。軍の果つるまで待つて居れ。

六右衛門。 いや、いや、軍の濟むのを待つてゐるうちに、娘に萬一の事でもありましたら、もう取返しが付きませぬ。織田信長ともあらう大將が、あれほど立派に請合うて置きながら、今となつて其のやうな逃口上は、そりや御卑怯でござりませうぞ。(詰め寄る。)

信長。 なに、卑怯だと……。(屹となりしが又思ひ返して。)なるほど、そちの申すにも道理はある。

やあ、孫平次。

孫平次。 はあ。(進み出る。)

信長。 先手の瀬兵衛や右近の許へまるつて、山内にある女子どもは、妄りに殺すな。勝手に落してやれと申傳へよ。

孫平次。 心得ました。

(孫平次は幕の外へ出づ。六右衛門も其のあとを追つて出づ。)

六右衛門。 もし、わたくしも一緒に連れなされて下されませ。

孫平次。 何。(立ち止まる。)

六右衛門。 娘のありかを探したうござります。

孫平次。 え、軍の場所だ、迂濶にまるつて怪我するな。

(突き退けて走り去る。六右衛門もつゞいて追ひゆく。)

信長。 蘭丸。まだ火は見えぬか。

蘭丸。 いづこの峯もまだ暗うござります。

増補信長記